



# 化石漁



浅井健一

群雲から現れた天球が細波む弧湾を照らしたとき、僕らは小舟を繰り出した。櫂を手に、風止みの水面を進む。月下の海はモノトーンの光と闇、揺れ散るは黒金の世界だ。キラキラと輝くそれは、指先を濡らすまで水ということを否定していた。

「エルビン」

今夜は、上手くいきそうな予感がする。

と、ヨナは呟いた。

春めき、真昼には夏の粒子が含まれているというのに、明け方はまだ肌寒い。肩が微かに震えている。毛布で身体を覆わなければ、一時間と我慢できないだろう。

塩の丘と西風の大地は農耕にも放牧にも適さない。だけど良質な化石が産出されることで知られていた。穏やかな夜海には太古から魚介類の化石が漂い、僕はそれを集めて起源種博物館に持ち込むことで、わずかな現金収入を得る。起源種博物館は命名を司るから、未発見の化石ほど高く売却できるが、そうでなくても展示物や資料として適正な価格が与えられた。

僕が漁に出るのは密やかな楽しみのためだ。

ヨナが現金を欲しがるのは、母親のために白パンを手に入れるためだった。

アンモナイト礁へと舟を進める。ここはかつて貝の楽園だった。大巻貝の化石岩が波間から突き出ているように、岩礁と砂辺の入り組んだ地形がその繁栄を約束していたのだ。貝が豊富であれば、また魚も集まる。岩礁は航行を困難にし、危険を冒すほどの価値ある漁場でもないため、今では顧みられることもなくなったが、化石漁には適していた。

鮫岩の近くに仕掛けた駕籠網を手繰り寄せる。化石の相場は貝だとフェニキア銅で、魚だとカルタゴ銀で支払われる。日々の生活なら化石貝で事足りるが、白パンを買うのであれば化石魚を獲る必要があった。ヨナと時間を忘れて化石を選り分けるのは楽しい作業だ。小舟には多くを積みめないから、傷物や価値のないものは海に還していく。

そうして網に掛かった化石の中で、僕とヨナの目に留まったのは二つの化石魚だった。一匹はクンコリ魚の化石、もう一匹は離宮魚の新種。手の大きさしかないクンコリ魚と、深海に漂い羽状のヒレを持つ離宮魚は、そのどちらも高値で取引される化石魚だったから、ヨナは大喜びで月と海に感謝を捧げた。夜海に化石が集うのは、月の雫が波紋となって命あるものを凝固させてしまうからだ。そう囁かれていた。

迷信だよ、と僕は言う。

だけど、何かに感謝したいんだ、とヨナは微笑んだ。感謝したいのなら、僕にするべきだろう、という感情も微笑みに変える。

離宮魚の新種のほうが高く売れるので、そちらをヨナに譲り、僕はクンコリ魚の化石を受け取ることにした。僕のクンコリ魚は、胴体の青い斑点が海洋に浮かぶ島のように見える。当分、生活に困らないな、とヨナに言われ、僕は首を横に振った。これは自分の部屋に飾っておくよ、そう答えて化石魚の背中を撫でる。

日が上がれば化石は海底へと沈むから、空が色付く前に僕らは漁を終えた。岸に上がり、舟を隠すと、僕とヨナは戦利品を手に入れた。

クンコリ魚の化石は僕だけの宝物。漆喰と羊歯植物の集合住宅に戻り、壁に飾られた沢山の化石魚の仲間に加える。

そうだ、名前がないと可哀想だ。

僕は少し考えて、

「チチムー」

という名札を化石魚に与えた。

僕の部屋は僕だけの博物館だ。ここでは魚一つ一つに名前がつけられて、在りし日の遊泳を思わせるように飾られる。新種も、旧種も僕の前では等しく価値のあるものだった。夜の安らぎを得るために僕は化石魚の部屋を作った。魂は輪廻を繰り返して、人になり獣になり鳥になり歌になるという。たぶん、僕の前世は海に住まう生き物だったのだろう。

朝日が昇り、漁の疲れを癒すために大麦のスープを啜った。痩せた土地に実る植物はライ麦と大麦だけで、ヨナが求める小麦の白パンなどは、周辺都市に出向いて買い求める必要があった。当然、車で小旅行をすれば出費も嵩むし、手間と労力を裂いて白パンを得るほど豊かではない。

昼から丘の発掘なので、それまで一眠りしよう。

カーテンを閉めた。毛布に身を包む。暮らしぶりは良くないが、僕にはこういう静かな生活が似合っていた。穏やかな午前六時の風が部屋に潮騒を届ける。化石魚の部屋にて微睡むと、心に沈殿した記憶が揺り動かされた。

目を閉じて、僕は架空の海を漂う。

クアドラ、トルム、パオ・クー・リン、ジュハブ、スタカット……そしてチチムー。

壁に飾られている、僕の心を楽しませるためだけの、夜海の生態系。

蒐集した化石魚なら事細かに語れるけれども、自分のことは存在意義も見出せない。エルビン、僕は心の中で名前を言うと、エルビンは墓銘碑に生年月日しか記されない人間だ、という気持ちに襲われた。世に成すことなく死ぬ男、それが僕だった。カール・リンネ卿が著した『自然の体系』、つまり分類学の手法に従えば「根無し草」とか「渡り鳥」とか「放浪者」……そういうカテゴリに振り分けられるだろう。

世の潮流は失うことを目指し、それは悪夢だと誰かが呟いた。

大投棄時代はもうすぐ終わるけれども、今はまだまどろみの牢の中。

西暦が終わって程なくして、僕らの文明も終わった。人々の間で奇妙な情熱が流行して、大投棄時代へと突入したのだ。それは胎内回帰への衝動だったのだろうか、所有することへの罪と罰から、裸の世界に戻るのには愉悦をもたらした。個人的に、組織的に、投棄主義は遍く広まり、僕にさえ影響を与え、今でも写真を見付けては一枚一枚捨てたりする。塩の丘が上面だけで内容がないように、過去への拘りを喪失すれば視線が未来に固定できると信じていたからだ。

時計に頼らず目覚めると、息継ぎした勇魚の気分が味わえる。

『今日も一日が始まります。今と今と今に感謝を』

朝のラジオを聴きながら、僕は顔を洗った。

大投棄によって混乱した世にも統治を担う組織はあり、それは「現在政府」の名称で知られていた。ふざけた名だ。あの時代の初期に既存の国家は機能しなくなり、野蛮と迷信が広まる中で、投棄主義を主導していったのが現在政府だった。年月を経て投棄行動も下火になりつつある今、現在政府も復興政策に舵を切りつつあるようだ。

つまり破壊によって人を治めることはできないということか。ラジオは広報装置として現在政府の傘にあり、放送は以下のように続く。命ある者に命の意味を、虚構に立ち向かう社会運動に協力を、現在政府に惜しめない支持を、今と今と今に感謝を、と。ラジオは抑揚のない声で決まった台詞を繰り返し、それから気持ちの良い音楽が流れた。

政府の放送には興味がないが、朝に音楽を聴くのは日課の一つだった。曜日によって流れる音のジャンルが違うので、ノワール・ジャズの調べから水曜日と気付くときもある。井戸から汲み上げた水は洗面台の素焼き甕に溜めているので、これで身嗜みを整えた。

鏡を覗く。疲れているのだろうか、肌が土色に荒れている。

食べても不味そうだ。

「今に始まったことじゃないさ」

僕はそう呟くと、カミソリで無精ヒゲを剃った。

今日は陸の発掘に参加するつもりだったが、疲労は根深く足首を痺れさせていた。無理に身体を酷使する必要もない。手軽に現金収入を得ようと、僕は蒐集物の一つを持ち出すことにした。

トマトを食べながら歩く。

ここは雨量の少ない土地だった。

人はただ「塩の丘」と呼び習わし、貧しき者が住む集落には名前もない、そうした土地に僕は生きていた。人口は千を満たさず、目立った産業もない。大投棄時代の影響が薄かったために、かつては岩塩の採掘とイワシ漁で賑わっていたのだ。往時の名残は海辺に建ち並ぶオイルサーディンの缶詰工場に見ることができたのだが、今は人を養うに足るものは記憶の中だけにあった。

だから旅の途上で立ち寄るなら最上だろう。温暖な気候は乾きの海に静寂を与えていた。緩やかな時間の流れを、神の恩恵に例える者もいるほどだ。風は強く弱く、中天の太陽をより神聖な座へと舞い上げた。しかし居を構え、生活するのは勧められない。塩と化石の他に何もなければならぬ。

起源種博物館は駅の隣、古錆びた鉄に縁取られし巨石建造物だ。汽車は一日三便だけで、集落のどことも適度に離れていたから、閑静な場所と言えるだろう。

『花の大路に鳥は舞い降り……』

という一節の掲げられた門は、錆鉄の格子扉によって内外を隔てていた。シリンダー式の認証機にトークンを入れると、石の擦れ動く音と一緒に扉が開く。

丘陵に建つ博物館はメソポタミアの葬祭神殿を連想させて、神聖なものに接する気持ちと呼び醒ました。ここは、そういう場なのだ。草食恐竜の肋骨を利用したアーチから、生命の基礎詩の刻印された碑文回廊へと連なる。

碑文回廊 (p o n e g r i m t)

左右の石壁に連なる文字は、韻を示す。韻とは言葉の陽炎だ。生命を言語化する過程の中で、

舞踊のような不確かさを内包させるために、無数の韻音韻律が生み出された。それは形而上のものであるが、基礎詩に注ぐ木漏れ日によって、色調と濃淡からなる繊細なリズムを知ることはできた。

「いつか、母に白パンを食べさせてあげたい」

一ヶ月前、基礎詩に手を当ててヨナは呟いた。

僕らの土地は痩せ衰えているから、そのような贅沢品を買うのは容易ではない。小麦は豊かさの象徴であり、肥沃な大地と豊富な水があればこそ育つのだ。当然、重厚な柔らかさと甘味を備えた白パンは貴重になる。いわゆる「天界でも食される純度の高い」白パンは、教会でのミサのときや謝肉祭といった特別な日に食べるくらいで、いつもはライ麦入りの黒パンやジャガイモで空腹を満たしていた。

都市では白パンの食事は信仰と社会契約の問題に関わるから、為政者もその流通には特に気を遣うが、豊かさの恩恵も塩の丘までは届かない。よって白パンを手に入れることは、親孝行の手段として大変意味があった。

それはヨナだけに限らない。働き口がなく、三日も食事を摂らないときもあるのに、それでも土地の住民は「信じれば叶う」という純粋な考えを持っていた。昼月の空には祈りも届く余地があるのだろう。つまり僕がヨナに協力したのも、彼の想う心に屈したからだ。

溶けた青によって空は統一されていた。現実的でない美しさには溜息が出る。海を安定させるのは穏やかな西風。『まどろみ』と僕らが呼び、科学的には涅槃現象というものによって、この地域は蜃気楼の浮遊感に包まれていた。起源種博物館のように趣向を凝らした建物にいと、その感覚はことさらに強くなる。

「今日は、見学に？」

ふと、背後から話しかけられた。

典雅な鉄蔓の螺旋階段にいたのは博物館の館主だ。小さな鉢植えを手に入れている。

「僕にとっては、どれも『見飽きた』ものばかりですよ。館主」

「すまないね、常設展ばかりで」

「怠け癖がつきますよ」

僕の言葉に館主は笑う。

自動化の進んだ博物館では、館主の役割も楽なものだ。暇を持て余して散歩でもしていたのだろう。鉢植の名札には「ピテラ・クストルフス」という学術名が書き込まれていた。秋になれば柑橘系の実が生る植物。

館主は謎めいた女だった。

細く伸びた手足と、艶やかな黒髪。女性であれば誰もが羨む美貌だが、背広に袖を通してあるので、むしろ中性的な印象のほうが強かった。

僕と彼女は旧知の仲だ。お互い礼儀と距離を保っていたが、深遠なる知識を求める者同士、親しく会話を交わすことも多い。歴史であれば穀物の伝播から、貨幣経済の是非についてまで。遠く伝え聞く大陸から運ばれてきた農作物やスパイスが、豊かさの基準を押し上げ、飢餓の恐怖から人々を救い出したことを、教区の文書や司書の通信を元に語り合う。

そういう関係は珍しいと言えなくもないだろう。

ランチボックスから、包み紙に守られた化石を出した。

「珍しい貝を見つけたので、引き取ってもらおうと」

「化石貝か、良い物だろうね」

「ええ、日の出前の岩礁で見つけたので、質は保証できます。直角貝の一種で、オルトケラスとは違う模様でしたので、面白いかと」

「これはトセラリテスだろう。特徴的な三尖模様が連なっているから、すぐに分かる。保存状態も良く欠けも少ないから、良い資料になるだろうね」

「ありがとうございます」

促されて、僕は交換室に入った。

窓口で書類に記入を済ませると、化石貝を金属製のカプセルに入れてエアシューターに送った。博物館の地下には鑑定装置があって、化石の良し悪しを判断する。オートマチックな仕組みは解らないけれども、化石は学術的な価値に応じた収蔵場所に送られ、僕らには経済的な価値によって報奨金が支払われた。

空気の圧縮される音がエアシューターの帰還を告げる。今回は化石貝なので、対価としてフェニキア銅の硬貨が充てられた。舟に乗る女の刻印は女神アスタルテだというのが、過去の記録は失われて久しく、それを立証する手立てがない。文明遺物にも化石と同じ価値があると思うのだが、当世は人の成したものには興味を示さないという風潮だった。

大投棄によって負け犬ばかりが肥え太る。

僕の中に燻る力は、それを許さないと言った。まどろみを前に抗う心は残っているのだ。だからといって打開する手立てがあるわけでもなく、石の収集や売買で自分を慰めているだけだった。陸の化石は現在政府からの委託を受けた白亜堂会社が発掘する決まりで、僕らは手間賃を得て労働に従事するしかないように、土と共に生きるとはとかくままならない。

年月を経るほどに、真実や事実から引き離されていく。月の魔力が化石を生むというが、それは迷信だった。起源種博物館が化石を買い集めるのは、石を砕くと生命のmanaが零れ落ちて、澱み、そこから神にも比する何かを創ろうとしているのだと言われているが、それも俗説だ。

「白亜堂公司から、また書状が届いた。博物館の譲渡を要求しているが、ああもこう居丈高に書を振るう意図が私には掴めないね。東洋からはるばる来たのはご苦労だが……」

「黙って兵馬俑でも掘っていると？」

「そう、分かっているじゃないか」

館主が窓際のソファに腰掛けた。

「東洋茶でいいかな？ 白亜堂公司の人と思想に罪はあっても、東からの香りが損なわれることはないだろう？」

「そうですね」

テーブルには茶器が一式置かれている。茶盤、茶海、茶壺、聞香杯に飲用杯、これらを揃え、しかも用法を心得えているのは館主くらいのものだろう。温め、手順に従い茶壺から茶海へ、茶海から聞香杯へ、聞香杯から飲用杯へと茶を移していく。

そうして振る舞われた青茶には、潮風や強い日差しにも負けない清涼感があった。

「ヨナが君に感謝の言葉を呟いていたよ」

「そうですか」

孝行に理由は要らないとヨナは言う。想い続けることが大切なのだ、と。砂浜の波は和みの音を鳴らしつつ揺り返すけれども、単調な反復にも僕らには伺い知ることのできない意味があり、その恩恵に誰もが浴している。明確な言葉を求める世界が呼吸の仕方まで決めてしまい、生きるために才覚が必要な時代になったとしても、ヨナの生き方は賞賛に値するだろう。

僕は……ヨナのように明確な目的意識があるわけではない。彼は母親のために化石漁をするが、僕はといえば収集し、生活が苦しくなればコレクションを切り崩し、一貫性があるわけでもない。「集めたものを手放すなんてどうかしている」と言われ「キャッチ・アンド・リリースが釣りの基本だ」と言い返すものの、今その場に即した表現を選ぶなら、どうでもよかった。浜砂の取り留めなさにも似た生き方に、降り積もるものを期待しているのか。無駄、と自覚はあるのに。

青茶の深い香りが鼻腔を満たす。

「悩んでいるようだね」

「過去と未来の違いが分かりますか？ 裁判官が刑を重くする際の口実が『過去』で、弁護士が刑を減らすために持ち出すのが『未来』です。だとすれば悩むことなんて、何も無いはずですよ」  
「文学的な受け答えをしてみたところで、私にはお見通しだ」

館主は微笑んだ。

僕の肩が抱き寄せられて、細波の震幅と同じ心の平安が染み渡る。誰かに身を委ねるのは、なるほど神聖な行為だった。預言に従うユダヤのラビは、黙示された未来をこのような方法で伝えるのだという。那由他の果てに梵我を合わせるラマ僧は、時輪タントラにおける悟りをこのような方法で表した。

ただ、あなたは恐ろしい人だ。

館主への畏怖が咽の下に溜まっていく。彼女には力があり、事象の全てが掌中にあった。慈愛持つ者は意識の海を凧だま、低きに流れる水のように他者を屈服させてしまう。何も恐ろしくないところが、途方もなく恐ろしい。

基礎詩を紡ぐ起源種の回廊に、人名が刻まれることはない。存在はやがて死へ至る過程だ。風化して塵になり、情報は失われ、熱は冷めていく。博物館は巨大な歯車だった。カタカタという音もなく、鉄を穿つ鋤もなく、七の聖韻と十二の舟韻、十五の葬韻、八の龍韻によってたゆたうノアの機械。

それはまるで海原のような。

「命の有り様は否定しないよ」

館主は言葉を選んだ。

「命あるところに力への意志ありだから」

棋盤に並べた駒の動きをゲーム中に変えるように、哲学者が許し難いのは、語義の混乱を招きながらもそれを楽しむ悪癖にあった。窓の前に立ち、屋根に破碎タイルを塗り固めた家々を眺め

、空を意識してこなかったこの身に気付く。紀元前のケルト人は硝子を空気が固まったものとして珍重していた。楽器があれば午後を題した曲を奏でたのに、と館主が呟く。どういう趣向ですか、と問い掛けた。彼女は笑う。

「現在政府は私をないがしろにしていると思わないか？」

「さあ、僕には博物館と政府の関係なんて、良く分かりません」

「面白い話があるんだ」

テッサリアの某所で発見された飛行船が、試運転で夜海を航行する、と館主が知らせてくれた。塩の丘の近くを通る保証はないけれども、人が再び空を取り戻すのは何だか感慨深かった。遠くに行けるようになれば、何かが変わる気がする。遠くに行けるようになれば、近くが懐かしくなるだけだ、と言われ、今度は僕が笑う番だった。談笑は談笑にすぎないのだが、館主の言葉一つ一つが示唆に富む。

中天の太陽が傾く頃に、僕は適当な理由をつけて館を出ることにした。

「急ぐこととも思えないが、納得しよう」

「あなたは僕を困らせたいようですね」

「まさか。ほら、こうして見送りまでしているじゃないか」

僕らは別れ際に握手を交わした。

ムール貝を積んだ荷馬車が僕の横を通り過ぎる。海岸沿いのカフェでトルコ式の水煙草を燻らすことも魅力的だが、目的を見出さないまま歩くことにした。七百年前に十字軍が通ったという道は、神の思し召しか先人の努力の賜物か、ライ麦畑の広がる耕作地になっている。

塩の丘は岩塩の採掘には適しているが、農耕や放牧には適さない荒野の土地だ。しかし近隣から土を運び、塩に強い草を植えることで、ライ麦が育つくらいまでにはなった。小麦は実り豊かな大地を選ぶとあるように、痩せた土地ではライ麦こそが農耕の主役になる。北の辺境や、東の高地、寒冷な島々では「神の恵み」と呼ばれているのだ。

しかし、僕たちの食卓に出るライ麦のパンは、黒くて渋味があり、大ローマのプリニウスが「貧者にのみ相応しい」と評したものだ。ジャガイモとのスープと黒パンで空腹を満たし、岩塩の採掘や化石の発掘で生計を立てる。ここは、そういう人々が毎日を繰り返す土地だ。

このまま一日起源種博物館にいてもよかったけれども、ヨナのことが少しだけ気になっていた。

彼の家は集落の外れにある。ヨナは塩の丘で生まれ育ったわけではないが、誰よりも土地に慣れ親しんでいた。塩の丘の空気が病気に良いと聞いて、五年ほど前に南の河畔から移り住んだのだ。ヨナの住まいはかつての電信局で、母親と生活するには少々狭いように思えるが、引越しの誘いは断り続けていた。人は一度根を下ろしたら容易には移らないものだ、というのがヨナの持論なのだ。

石積みの壁と破砕タイルの屋根は、塩の丘の一般的な住居の形といえた。ヨナの家には、それに電信局の名残のアンテナが一本立っている。外の世界と連絡を取ることもないので捨て置かれている状態で、鉄の柱は風に吹き晒される骸骨のようにも見えた。

扉に「外出中」の張り紙がしてある。

「白パンを買いに行ったのかな」



すぐにそう思ったけれども、母親を一人残して外出するのはヨナらしくない。

もちろん、一日二日家を離れても母親が困らないよう準備はしてあるはずだ。戸締りを確かめた上で、軽くノックをしてみたが反応はなかった。館主はヨナについて話していた。あれは今朝のことだったのか。駅は博物館の隣にあって、おそらく離宮魚を換金した足で都市方面の汽車に乗ったのだろう。

一言言ってくれれば都市でのことづけを頼んだのに。汽車でなら五時間を目安に大投棄時代以後の新都市に着く。都市には遠方からの食材や西暦の珍しい品物、塩の丘にはない娯楽施設が集まり、人も集まった。物の集まる場所には仕事が集まるからだ。嗜好品に興味はないものの、菜園商社製のバジル瓶だけは新都市から買い求めていた。僕の部屋には空のバジル瓶が転がっている。

仕方がない。等級は劣るものの食料品店でバジルは間に合わそう。

時刻も三時を過ぎていた。ヨナの家についていづまでもいれないので、立ち去ることにする。静かな光が浮遊する時間帯には妖精、つまり「t i t a n i a」と名付けられていた。朝からトマトしか食べていないから、どこかで軽い食事を摂りたい。

舗装道路は岩塩とイワシで潤っていた頃の名残だ。色合いに時代の積み重ねを確認できた。足と車輪で踏み締められ、石畳もヒビと摩耗に苦しめられている。かつては艶やかであったのに、と過去は常に美しいが、僕は今に生きていた。

枯れた噴水の広場は集落の中央にある。

そこには屋台式カフェがあった。歩き疲れた足を休めるには丁度良い。

「クムランが名前なのか。今知ったよ」

「誰も知ろうとしないんで」

屋台式カフェの店主は黒板に書いたメニューを指差した。固そうな無精髭が印象的だ。

「注文をどうぞ」

「カフェラテ、それとタラと卵のトースト」

「シナモンは」

「あれは苦手だね」

パンや酢漬果実が正面の台に並んでいる。吊られているのは生ハムと塩タラだった。見た目楽しく、僕はブリキ缶の紙巻煙草を一つ抜いた。

「貰うよ」

「煙草は平和に相応しい。煙草は肺を悪くするとも言いますが、それでも」

「なら売るなよ」

「西暦のしきたりに従い警告しただけです」

紙巻煙草は手軽さが好まれているが、僕が煙草と言って思い浮かべるのはトルコ式の水煙草だった。いよいよのときにしか吸わないので、マッチで火を点けるのにも一苦労だ。重い紫煙が肺に溜まり、意識を軽くしていく。

店主がテーブルにカフェラテとトーストを置いた。屋台式カフェをしても儲からないのでは、と訊くと彼は不思議そうな顔をして、今こうして客に接しているじゃないか、と答える。要領を

得ない言葉だが、つまり僕が考える以上に客はいるということだろう。それに煙草とカフェラテの組み合わせは抜群で、これなら商売にもなると頷かせるものだった。紙巻煙草は死海の沿岸地域に残る倉庫から、知り合いのつてを使って取り寄せたらしい。道理で年代物の香ばしさが舌に残るわけだ。

新聞紙を広げ、トーストを頼張る。過去の日付が記された新聞だから、現在政府の動向や農作物の出来高に興味はないが、館主の言う飛行船についての記事には目を惹かれた。記事が伝えるところによれば、飛行船の試運転は白亜堂会社の技術支援によって可能になったようだ。政府と会社の関係改善は最近著しく、いよいよ知識が主座に帰る日も近いと囁かれていた。

投棄主義は投棄主義らしく世に寄与することなく自らをも捨て、去り、残された者たちはガラクタの中から「かつて」を物真似ようとする。

「しかし、百年前のものを飛ばそうとして、大丈夫なんですかね」

「百年？」僕は微笑した。「そこまで古くはない。せいぜい二十年だろう」

店主は固そうな無精髭を撫でながら、釈然としないものを感じていたようだが、それをあえて口にするほど無遠慮ではない。空に浮かぶ飛行船を想像しようとして、考えてみれば実物に接したことがないと気付いた。新聞に描かれた夜海と飛行船の挿絵に、こういうものかと納得した自分があるのだ。煙草を蒸かして、そのような思考を頭から追い出す。ある老夫婦が家の畑を耕していて地下遊園地を発見したという記事を読んで、編集者は出来事の掲載順位を弁えているなど感心した。

広場で油を売っていて三十分も経過しただろうか、傾いた太陽が夕刻の涼しさに印象を与えている。今が一年で最も優しい季節だ。屋台式カフェには一服しようという人が集まりはじめていた。頃合いも十分なので、邪魔者は立ち去ることにしよう。働くでもなく暇潰しに時間を注ぐ僕に、誰かが「金の稼ぎ方を知っている奴は羨ましい」と言った。それには侮蔑する意思が感じられたので、心は泡立ったが、無視を決め込む。

煙草の煙は目に沁みるが、香りはショコラのように甘いのはなぜだろう？ 刺激を受けるのは同じ粘膜なのに、快不快を分かち合えないのは僕と他者のそれと似ていた。

白羊歯の集合住宅に戻り、化石魚の部屋で緩やかな時間を過ごす。閉めたカーテンから射し込む昼の陽光が夜の闇へと移り変わり、空腹を感じた僕は台所にある有り合わせの材料でスープを作ることにした。ジャガイモ、玉ネギ、大麦、それに香辛料。僕はあまり料理が得意ではないので、こういう適当なものを鍋に入れることしかできない。でも、適当な料理でも胃に溜まるのなら満足だった。

鍋が煮立つのを待つ間、僕は起源種博物館の館主との関係を考えていた。

大投棄時代に起源種博物館は存続の危機に立たされて、それは代々の館主の勇氣ある行動によって防がれてきたのだが、彼女が館主として赴任するまでの十年間は無人のままだった。

僕は当時、塩の丘を散歩しては化石の欠片や西暦の遺物を集めていた。

学問の日々は投棄主義の広まりによって途絶え、戸籍の職業欄に「史家」と書く夢も断たれてしまい、僕は喪失感の虜になっていたのだ。葦草の茂る丘の斜面で。

足下に転がっていた土器の破片を拾っていたとき、僕は突然話しかけられた。

「かつて、この丘には巨人が住んでいたというが、本当だろうか」

今でも不思議に思う。長く艶やかな黒髪と美貌の女が横にいるのを、僕は自然に受け止めていた。

「どうでしょう。この地域は先史時代に巨石文明が栄えていたそうです。丘の博物館も、歴史ある墳丘墓の上に建てられているとか。石の遺跡が残る土地には巨人の伝承が生まれると言われてますから、塩の丘も似たようなものだ」と

「詳しいね」

「昔から、この辺りは迷信……というか信心深い人たちが住んでいるのです。岩礁のほうには、西暦の宗教遺構が点在していますよ。と、いっても祭祀用の洞窟や墓で、土地の人間は気味悪がって近付きませんが。近付いたとしても面白い場所じゃない。面白い場所じゃないのは、塩の丘の本質でしょう」

「しかし、ここは岩塩の採掘やイワシ漁で賑わっていたと聞いたが？」

「昔のことです。海塩が流通するようになって岩塩はさっぱりだし、イワシの魚影が海面を黒く染めて『夜海』のようだったのは何十年も昔のことです。良いのは景色と天気だけ……ところで、あなたは？」

彼女は右手を差し出した。

「起源種博物館に新しく赴任してきた。現在政府は辺境の博物館など見向きもしないから、手続きに時間が掛かってしまったが、宜しく頼む」

「ああ、そうですか」

握手を交わす。

「君は、もしかして史家なのか」

「目差していた頃もありました。今は投棄主義で夢も捨てててしまいましたが」

「でも、話し相手くらいにはなってくれるだろう？」

館主の微笑みを例えるなら、魅了の魔術。僕は同意も拒否も思う前に頷いていた。

起源種博物館に新しい主が住むようになって、塩の丘は何も変わらなかったが、館主の存在は僕の心に一石を投じたのだ。彼女は現在政府の委任状を持ちながら、現在政府とは一線を画していた。投棄主義に対する否定的な言動が、館主をこのような僻地に追いやった原因なのかもしれない。博物館のテラスで憩う姿は、容易に伺い知れない陰影が付き従った。

塩の丘の住人は起源種博物館の美しい館主を「隠者」と捉えていた。時々、思い出したように記録映画の上映会や展示物の説明会をする以外、博物館の仕事らしきことは何もしないからだ。カカオの五大生産地を問えば、ベネズエラ、エクアドル、トリニダード、マダガスカル、ジャワ、と答える博識さと、人の機微を読み取る聡明さを兼ね揃えているというのに。

鍋からスープを掬い、テーブルに持って行った。ライ麦のパンとスープが今夜の食事だが、こういう粗末な献立にも慣れている。

ジャガイモの浮かぶスープに僕は呟いた。

「海か」

アンモナイト礁に仕掛けた化石漁の籠は、一週間を目安に引き上げることにしていた。岩礁へ流れ込む急流が化石の魚を泳がすのだが、一週間以内であれば実入りは少ないし、一週間以上であれば籠が破損する怖れがある。

それに化石漁の方法は僕だけの秘密だ。

海に心惹かれる気持ちが、僕を塩の丘に束縛しているのだろう。豊かな海の揺らめきに心が底へと沈む心地よさに魅せられて、僕も魚や貝になりたいと希望していた。一度ならず「なぜ都市に行かないんだ？」と訊かれ、僕にも理由を上手く説明できないから微笑むだけだったけれども、つまり集落の人々が土地に生きているのと同じなのだ。

明日は海に。

何かをすれば、何か意味あるものが見出せるかもと考えるのは、浅はかだ。浜辺や岩礁を歩いても、生きる意味や存在価値を発見できるわけでもないのに。でも、心が求めることをするのは好きだった。夏の盛りにアイスクリームが欲しいと感じたり、徹夜した朝に二度寝したくなるように、空と海の衝突線を眺めることで心が慰撫されるのなら、無意味な行為も馬鹿にはできない。

海についての荒唐無稽な想像を巡らして、今日は眠ることにした。珊瑚の迷路、貝の爆弾、潮汐が波の賛美歌に洗われる。鯨に飲み込まれた預言者の物語を思い、ヨナを少しだけ心配した。本当は心配する必要はないのに、あえてそれをするのが、友情の成せる技なのだろう……

シャツを湿らす汗は気温によるものだった。

眩しくて眉を顰める。

夏は四季の王者というが、海辺にいとそれも納得だ。競い合う海空の青に疲れた僕は、廃工場の作る日陰に入ろうとした。波止場の工場はイワシ漁で賑わっていたときに建てられた。オイルサーディンの缶詰を作っていたのだが、今では猫と子供たちの遊び場だった。丘の西に広がる大海原は、漁獲量で言えば十万トンを超えるイワシの黒い影によって「夜海」と名付けられるほどだった。

イワシと塩、そしてオリーブ油があれば缶詰ができる。オリーブ油は汽車で小アジアの果樹園から運ばれ、オイルサーディンは汽車で線路沿いのどこにでも運ばれていった。今はバルト海の大規模タラ漁が復活したことで塩の丘の缶詰工場は閉鎖されたが、集落の住人であれば一ヶ月に一度はイワシ肉の臭いを嗅ぎたくて、ここに立ち寄るのだ。

西風と波の崩れる音を軒下で聴いていた。

「臭いが、懐かしいだろう？」

話しかけてきたのは工場跡を倉庫に利用している薬屋だ。イワシの貯蔵庫は通気と温度管理に優れているから、薬の保存にも適しているのだという。

昔は、イワシの肉を練り込んだ古小麦のパスタを食べていた。夜海製の印がついたオイルサーディンの缶詰も絶えて久しく、缶詰は近隣から取り寄せないと食べられないが、ここにいるだけで思い出から空腹になる。僕と薬屋は昔話をした。

「今は駄目だな。何でも塩漬けされたように萎びてる」

「波は海だけのものではないですよ。人にも土地にもある」

夜海製オイルサーディンの復元をパロ・トロームの主人が考えている。薬屋は缶詰工場の高い屋根を見上げながら言った。パロ・トロームは海沿いのカフェで、イワシ料理とトルコ式の水煙草で親しまれていた。躊躇なく過去を削る現在にあって奇特なことだ。僕も懇意にしているので、その試みが成功したら素晴らしいと思う。

「これからどこへ？」

「海沿いを歩こうかと」

「今は一番散歩に適した季節だから、悪くないだろうよ。それと、気が向いたら俺の店に来るといい。薬屋にも良い物があると教えてやる」

「じゃあ、近い内に」

薬屋と別れて、海鳥の高く低く飛ぶ様子を眺めつつ、海岸を歩いた。碧い海に映える白い雲、白い鳥、白い灯台といったものが絵画のようだ。まどろみ、と土地の人々が言う優しい幸福感は四方に広がり、溜息一つ僕に吐かせた。

文字が生まれる以前から、人と海は共にあり、海は人を育んだ。

僕は小舟。

日照り空に誘われて岩礁に向かった。小高い丘から、白亜堂会社の発掘隊が地面を掘り返しているのを眺める。太古の生物が石化した巨躯を晒していたが、あれの闊歩する様は想像もでき

ない。白亜堂公司はシステムの発掘体制を敷き、スコップと一輪車で武装した人夫を動かしていく。まるで蟻だ、と観ていて思い、食べるために蟻の一匹として動くのは正しいと感じられた。

何を馬鹿なことを。まどろみの幸福感は詐りだ。

目的を喪失したままだと心が塵になり囚われる。不安を忘れ、コミュニケーションを図ることもせず、表情を殺したまま佇むのは心地よい眠りへ至る道だ。シャツの襟元を弛める。少し足早に、躓き、僕は岩礁へと降りていった。岩礁には誰も近寄ろうとしない。海と陸との境界にあって、禁域に足を踏み入れるのは、逸脱したいという気持ちに動かされているからだ。

「命の有り様は否定しない」と館主は言った。僕は自分が否定の塊のように思われた。彼女は賢く徳に満ちているのに、僕の心は身体を硬化させた化石魚と同じだ。報いは受けても、報われることはないと考えている。母への思慕を隠さないヨナとの一夜を虚構であると言い聞かせ、化石魚の部屋で深海と冥府の闇を夢想する。そのためだけに僕は息をしているみたいだ。

でも、飽きた。

真面目に生きよう。

磯の香りは大好きだ。

不安定な足下を慎重に進んでいき、蟹や甲虫が逃げていく場所を目差す。波の微かな海水は透明度が高く、砂に埋もれた桜貝も確認できた。西からの潮流は塩の丘を削り、崖を形成し、洞窟を穿つ。そうして出来た一つに僕は足を踏み入れた。

動物の鳴き声が聞こえた。たぶん、コウモリだ。日の届かない世界は存外に涼しく、首筋の汗が乾いていくのが分かる。昔、どこかで「人は迷宮的なものに惹かれ……」という論文を読んだ記憶が甦った。アメンエフマト三世の迷宮神殿や、クレタ島のダイダロスの迷宮、迷宮は救済を求める人間の苦難を象徴しているという。

「竜やキマイラが出てきそうだな」

薄暗い洞窟に僕の心臓も静かに高鳴る。

古来から洞窟には火を噴く竜や悪霊が住むと伝えられてきたが、史家的な見解を述べるならば、それは天然ガスや有毒な物質に対する知識がなかったからだろう。採掘の歴史は人が思うよりも古く、人の精神に影響を与え、数々の神話を生み出した。地獄や地底世界のことを考えながら、洞窟に入るのは冒険の動機付けにピッタリだ。

ただ、岩礁の洞窟は坑道や鍾乳洞と違い、恐怖を感じさせるほどの深さはなかった。仄かに暗い内部は頭上が高く、白砂の地面と湧水の泉があるだけだ。

期待は下回るが、他人ならば肩を落とすところであっても、僕には嬉しい発見がある。

「陶器だ」

禁忌とされた岩礁はやはり宗教的な意味を持っていたようだ。泉に手を差して、砂の底をまさぐってみると、杯や器の陶片が幾つも浮かび上がってきた。

神霊の世界に対する畏怖や敬愛の念が、祭司によって現世と結ばれる。命と同様に死んだ物語がここで語られ、命と同様に死んだ言葉で祈りが捧げられた。アミニズム的な存在へ供えられた食物の名残である陶片は、そうした人の精神史を思考させる貴重なパズルの一片でもあった。

泉に沈んでいた遺物の色彩鮮やかな模様に、果実や酒など相当に高価なものが捧げられたのは間違いない。西暦の末に起源種博物館が建てられて、線路が引かれ、イワシ漁と岩塩の採掘で栄えるまで、塩の丘には文化文明とは名ばかりの陋習が幅を利かせていた。岩礁の禁忌も忘れ去られた信仰による僅かばかりの残滓だったのだろう。膝下までの深さの泉には人間の痕跡が色濃く、僕は夢中でそれらを拾い集めていった。

ここは僕にとって海賊の宝物庫だ。

陶片の様子は素朴ではあるが意匠に富んでいた。黒絵式という、この地域で普遍的な技法の陶画には魚だろうか、鱗が描かれている。もう一枚の陶片には舟の舳先と波模様だ。塩の丘で拾う陶器とは様式も製法も違っていた。

ある時、館主が僕に問い掛けた。

「海岸にある陶片と、丘で見付かる陶片は、同じ場所のものではないようだが？」

「この狭い土地に、海の民と塩の民がいたのです。海の民は轆轤を回した薄い黒絵式陶器を、塩の民は手づくねと幾何学模様の陶器を使っていたみたいですね」

僕は人の創意工夫に思いを馳せていた。

どのような祭司が行われていたのか。生け贄が捧げられたのだろうか、祈りの歌は？ 神聖なアイコンがどこかにあるはずだ。膝下まで水に浸かったまま、泉の中程まで進む。淡水の澄み渡る冷たさを足に感じ、それから底に沈む石版を見付けた。人の身長ほどもある石版には「Quo Vadis Domine」と書かれている。古い言葉だ。意味も用法も忘れられた一節。

「Quo Vadis Domine」

僕は無意識のうちに答えていた。

「星降る海へ」

零れ落ちた言葉は水面に波紋を描き、石版は粉々に割れた。

長い年月が瞬きの間に飛躍して砂となり、泉の水は仕掛けによって引いていく。石版は厳密に言えば蓋だった。泉が消え、そこにはただ砂の積もった柩だけが残る。

綺麗だ。

砂の中には朽ち果てた少女人形と、黒い宝玉が収められていた。黒水晶のようだが、鉱物に対する知識は僅かなので断言は出来ない。透かすと光の作用によって、幻めいたものが見えた。ある人が観れば生き物と言ひ、ある人が観れば地図だと言う類のものだが、自然に精製されたわけではなさそうだ。

遺骨は見付からず、あるいは完全に朽ちたのかもしれないが、柩には他にめぼしいものはなかった。少女人形は微睡んでいたが、抱えればそれだけで砕け落ちそうだ。全てはやがて塵と砂に還る。人形はそういうことを僕に伝えているようで、長居するのは憚れた。まだ探索してみたい気持ちが強いけれども、明日も明後日もある、と自分に言い聞かせて洞窟を出る。

傾いた夕日に鳥たちが舞うのを観て、今日は有意義な一日だったと思うことができた。自然に込み上げてくる微笑みは、ヨナと化石漁をしたとき以来だ。駅には汽車が到着していて、都市を貫く特急車両のように速くも煩くもないが、時間が遅々として進まない丘には相応しい。家々の煙突から煙りが漏れているのを観ると、充足した生き方とは言い難い自らの、後ろめたさに身震いした。僕はこうして歩きながら、少しずつ何かを捨てていき、やがて何も持たずに死ぬのだ

ろう。

僕が忌み嫌う投棄主義者のように。

日が暮れて、食欲がなかったので、水だけ飲んだ。いつものようにソファに身体を預け、暗い部屋に一人だけ、化石魚と微かな波音に思考を止めて死者の気持ちへ近付いていく。心が貧しいと空腹にも耐えかねてしまい、つまらない欲に転びそうになるが、恐ろしいのは全てに対して空虚なままになることだった。

岩礁の洞窟から持ち帰った黒水晶を撫でる。過去が断絶することなく、綿々と受け継がれていれば、僕という存在も華やいだものになったのかもしれない。知識を積み重ねることができるのは、人間だけが持つ特権だったが、もはやその知識すらも失われつつあった。黒水晶もまた、何か用法があったはずなのに。

思い当たる節はあった。

館主から借りた西暦の書物を広げる。『オートマタの社会的受容の変化と展望』という題のそれには、オスマントルコのチェス差し人形から始まる自動人形の歴史が語られていた。当初は山師のイカサマだったものが、精巧な技術と自律に関する理論を得て産業に組み込まれる。穀物の生産や機械の製造に、そしてサービスや文化的な分野にも自動人形は使われるようになった。

神は自らに似たものを作ろうとして、似ても似つかぬ人ができたというが、人が自らに似たものを作ろうとした自動人形は、神の目をして区別のつかない器を持つ。僕はページを捲り、掲載されている写真に視線を落とした。チェスの世界王者と対戦する自動人形、軍事的な任務に就く自動人形、そして宗教的行事に参加する自動人形。人と同じ機械を「背德的」と断罪するようになる前には、自動人形が闊歩し、人と肩を支え合うような時代が確かにあったのだ。

自律制御と人工知能を担う回路は胸部に組み込まれていた。

これは、オートマタの頭脳に値するものかもしれない。僕は黒水晶の模様に見とれながら、朽ちた人形の側にあったということだけで、奇妙な思いつきに納得した。星々に線を引いて、獅子だ蟹だと連想するような他愛のなさだが、洞窟で発見した黒水晶については、また明日調べてみることにしよう。石の魚を飾るのに意味などいらぬように、こういうことでも暇つぶしには最適だった。

ラジオが今日一日のニュースを流していた。

『今と今と今に感謝を』

テッサリアの飛行船や、鉱山労働者の生活改善を報じたニュースを聞きながら、情報に接していると妙に安心する自分に気付いた。酸素と知識が共に「吸収する」という言葉に繋がるのは偶然でないように、生きる限り知ろうとするのは人の性なのだ。

書棚に並ぶ本を、手当たり次第に読んでみた。付箋を付けたページを辿り、かつて僕が歩んだ思索の道を辿る。何も語るべき事柄のない男だったけれども、僕が僕の考えを理解するのは楽しい。ソファで横になったまま文章を読んでいたら、筏に乗って航海する物語を考えた。鋳を持ち、周遊魚らを狩りながら、西を目差す。なぜ西なのだろう。真理を求める旅は例外なく西を目差した、とヨナが言ったからだ。



ラジオをつけたまま眠っていたので、目覚めもラジオの言葉によってだった。

『今日も一日が始まります。今と今と今に感謝を』

誰が感謝するものか。現在政府に対する不信感と、眠りを阻害された悔しさから、僕は苦しげに呟いた。西暦の宗教音楽がラジオのスピーカーから流れ、今日が木曜日だと気付く。気付いたら賞金を貰えるクイズなら良かったのに。僕は身体を起こすと、肩や足に感じる怠さを引き摺りつつ、冷たい水で頭蓋骨の中の靄を追い払う。

昨日の夜は何も食べていなかった所以体が軽かった。空腹感も強い。台所で目玉焼きを作り、ライ麦パンと一緒に食べる。これで牛乳があれば最高なのに、と思ったが、ないものは仕方ない。牛乳も塩の丘では高価な食材だ。チーズならともかく、保存の難しい食べ物はすべからく得難いのだった。

「卵の味付けには困らないか」

僕は微笑む。

化石に価値が見出される前は、岩塩だけが丘の恵みだった。イワシ漁を生業とする海の民は多かったけれども、大地を削り岩塩のレンガを運ぶ丘の民はさらに多かった。西暦の流通網は大投棄による破壊で機能しなくなっていたので、岩塩は内陸の都市群で重宝されたのだ。

岩塩は二瘤駱駝を連ねた商隊によって、毎月毎週運搬された。駱駝といえば砂漠の生き物と思われているが、小舟にも例えられるそれは一瘤駱駝のことで、二瘤駱駝は岩肌の高地に群生し荷運びなどに使役される。あの時代の旅は、悪路と混乱、そして投棄主義者の襲撃に怯えながらの旅だった。

昔は幾日もかけて都市に行ったものだが、今は汽車線路が回復し、時間的な距離も短くなった。反面、心情的な距離は遠くなったように思える。

幹が枝へと向かうように痩せ細る、そうした場所だ。海塩には海塩の、岩塩には岩塩の味があり、一口に塩といっても千差万別だと、都市の人間が知るのはもっと後になってからだろう。膨大な時間と手間を必要とする岩塩は価格の面で海塩に太刀打ちできなくなり、それは他に産業がない丘では致命的だった。岩塩の採掘は十年前を境に寂れてしまい、職を失った男たちは何をすることもなく屯していたが、起源種博物館と白亜堂公司の化石発掘事業が塩の丘を救った。

人生のニガヨモギを飲み下すのも一興だ。かつて僕は史家として、西暦の知恵を取り戻せば郷里を救う手段になると考えていた。東奔西走して廃棄都市の大学跡を巡り、失われた知識を求めていた昔が懐かしい。でも、史家として僕は世に何一つ貢献することなく終わるのだ。傍から観れば滑稽すぎて笑えないと気付いたときには、もう遅い。

都合の悪いことは忘れるに限る。珍しく早朝に目が覚めたので、今日から仕切り直したと考えた。良い傾向だ、前向きなのは。

水を飲むために家を出て、そこで僕はヨナと会った。

「何も言わずに丘を出るなんて酷いじゃないか。ヨナに頼みたいことがあったのに」

「そうだったのか？ ごめん。君が都市嫌いなのを知っていたから、別に用はないと思っていたんだ」

彼は実に申し訳なさそうな顔をした。

「謝るよ、エルビン」

「そう言われて、許さない人間は集落にいない。

ヨナは魅力的な青年だ。誰からも愛されている。僕はコミュニケーションの欠乏に餓えているが、彼の存在は救いであり、気恥ずかしくもあった。白亜堂会社の発掘に参加する前に、どうしても僕と会いたかったとヨナは言った。白パンを購入できたことを僕に感謝し、また力になってほしいと言葉を続けた。迷惑でなければ、と俯くヨナに、君なら大歓迎だと微笑みかける。

「ありがとう、エルビン」

「ああ、気にしないでくれ。困ったときは、お互い様だから」

それから朝食に誘ってみたが、彼は仕事に急ぐからという理由で僕の元を去った。後ろ姿を見送り、朝に相応しい出来事だったと嬉しく思いながら、井戸水で咽を潤す。九時を過ぎれば暑さで水も生温くなるが、今ならまだ身体の隅々まで染みる冷たさだ。

午前中は読書や書き物をして過ごした。午後から発掘用の手袋をポケットに入れて外出する。黒水晶を忘れていたので、もう一度部屋に戻り、バジル瓶を買うことにした。

近くの食料品店には銅貨三枚で珈琲と噛みハッカを買い、隅の席でボードゲームをして遊ぶ男たちがいる。今日は働かないのか、と挨拶する。お前を見習ってサボタージュしているんだ、と男の一人が言った。それから岩礁で崖崩れがあったと聴き、あそこは蟲や植物の屑石だらけだという話になり、新聞で報じられている野球の結果に一喜一憂した。

でも、店の人間は誰一人そのスポーツを観たことがない。

「野球を知っているのか？」

「昔、都市に出掛けたときに観た。と言ってもルールは知らないが。投げた球を打ち返すなんて芸当に、ひどく感心させられたよ」

僕の言葉に周囲が何度も頷く。

「まあ煙草でもどうだ？」

「遠慮しておこう。トルコ式以外じっくりこないから」

男たちは「トルコ式だとよ」と笑い、僕も笑い、珈琲とラムネ・ソーダで乾杯した。姪の誕生日が近いから人形を買いだいたいだが、と嘘を吐くと、新都市でも買い求めるのは難しい、と店の人間が答える。廃棄場ならマネキン人形が幾らでも転がっていると別の男が言い、それじゃあ誕生日のプレゼントにならないだろうと皆笑った。

「この際、それでもいいかな」

「よせ。気持ち悪いぜ」

「恐くないさ」

僕はそれとなく詳しい位置を訊きだした。

銅貨一枚でジュークボックスを動かす。午後に相応しい曲にしてくれ、と店の女主人の注文を受けてボサノバを選択した。今や機械を扱えるのは、丘では僕と館主を含めて十人にも満たないだろう。だからジュークボックスも店の隅で埃を被っていたが、こうして食料品店に来たときは動かすことにしていた。

新聞を受け取る。目下の話題はテッサリアの飛行船が夜海に運ばれることだったが、残念ながら新しい情報はないようだ。現在政府傘下の都市群が大使議会を開こうとしているという記事が

、一面に載っていたけれども興味が持てない。思えば僕の目を引く事柄などが、容易に新聞に載るわけもないのだ。

「バジル瓶を一つ」

「菜園商社製は品切れだよ」

「あるのでいい。トゥーロンの修道院製は？」

「コルスの島バジル瓶ならありますよ」

仕方ないとは思いつつも、やはり等級の落ちるものを買うのは納得がいかない。あれは卵との相性が微妙なんだ、と言いながら銅貨を払う。そして男は女と賭け事の話ができない人間には冷たいから、僕がいられる時間はとうに過ぎていくと感じ、店を出ることにした。

一日中無駄な話に興じられるのも立派な社会性だ。

砂利道を歩き、海を見詰める。蒼い水面を小舟が漂い漁に勤しんでいた。旅が盛んな季節になれば材木を求める商人や、聖地巡礼の投棄主義者、物見遊山の輩などで少しは賑やかになるのだが、この長閑な景色のほうが味わい深い。街路樹として植えられたオリーブの木陰で一休みしていると、アイスクリームを売る行商が同じように暇を持て余していた。

「お客さん、冷たいのはいかがか？」

「今日は昨日よりも日差しが強いな。大丈夫なのか？ そんな箱に入れて」

自転車の荷台に箱を設えて、学校帰りの子供たちを待っているのか。ああいうものは暑さに耐える商売には適さないと素人目には思うのだが、氷室で作られた氷は密度も高く日持ちも良いというから、案外大丈夫なのかもしれない。氷の他にも工夫を凝らしていそうだが、アイスクリームを買い求めただけでは、秘密を窺い知ることはできなかった。

箱の中から、陶器椀に入ったアイスクリームを手渡される。

「昨日は、起源種博物館の館主様がアイスクリームをお求めになったよ」

「館主が？」

行商人の言葉は僕にとって少々意外だった。

「博物館前で格子越しに。良く買われるよ、お得意様だ」

館主は博物館の外には出ない。そこだけは職務に忠実だが、どのように生活しているのかと心配になるときがあった。広大な博物館の敷地には、館主の私的な温室庭園があって、そこで果実や野菜を栽培していると噂されていたが、一人では限界もあるだろう。僕は柑橘類の鉢植えを持つ姿を思い浮かべた。

微笑ましい。彼女がアイスクリームを好いているというのは初耳だった。館主は菓子作りや紅茶の入れ方にも通じているが、女性らしい嗜好はらしくない。今度、会話する機会があれば、手土産に持って行くのも面白い。

「そろそろ、放課後が近いですなあ」

行商人は呟きを残して自転車を漕いでいった。

「僕も、行きますか」

もちろん目指すのは、食料品店で聞き及んだ廃棄場だ。

廃棄場は丘の東にあって、名前の通り吹き曝された荒野に一面瓦礫が散乱していた。視界にあるのはセメントの塊とアスファルト、そして硝子片ばかりだ。こういう場所は珍しくないし、特

に理由なく訪れるところでもない。ただ西暦の物を何か探そうとするのであれば、金があれば都市へ、なければ廃棄場へ行くのが定石だった。

しかし、西暦の一切を否定した大投棄の爪痕は、宝探しの欲望を簡単に打ち砕く光景だ。破壊は徹底的だったし、わずかに残った物も略奪と屑鉄化に遭った。ただ、海岸の洞窟で見付けた黒水晶が僕の推測通りであれば、自律制御と人工知能を発揮できる容れ物はどうしても必要だ。それが少女人形だろうが、マネキン人形だろうが構うことはない。

とりあえず試せばいいのだから。

発掘用の手袋をして瓦礫の山を登る。突き出たH鋼やコンクリートの石段、大理石のモニュメントが無惨な笑顔を浮かべていた。足下は突然空洞になることもあるから注意が必要だ。大投棄時代に西暦の都市の七割が減んだといい、そのような技が可能なのかと懐疑的にもなるが、廃棄場の有様を見れば誰もが納得してしまうに違いない。

二つに割れた高層ビルから、非常階段を伝って地下へと降りた。西暦の都市は政庁、港湾、工業、住宅、商業の機能ごとに区分けされていて、商業施設は狭隘な都市空間を有効利用するために地下に作られることが多かった。非常階段から地下ファサードに出ると、そこは砕けた天井から射す日と発光ダイオードの灯りに彩られている。

振り返ると、モザイクタイルの壁に摩天楼に登る大猿の絵が描かれていた。通路の左右には、名のある商店の豊かさを誇示する大写真が貼られ、無惨な廃墟とは異質の華やかさが目を引く。硝子の破片に気を配りながら歩くと、食料品店での話通りマネキン人形が数多く捨てられているのを発見した。

「死体と変わらないな」

作り物であれ、人の形をしたものが積み重なるのを観て愉快でいられるはずがない。可動式のマネキン人形であれば、黒水晶が機能する可能性は高い、と思ったが、適当なものを探すだけでも困難な作業になりそうだった。壊れた胴体や頭部を選り分けるとして、風雨に晒され、時には土砂が容赦なく降り注いだ中で、山積みになった人形が何百体といたからだ。

まず試してみよう。僕は持ってきた黒水晶を使うことにした。

可動式人形の胴体を掘り出す。両足、右手はなく、欠損部から機械が露出していたが、実験ならこれで問題はないだろう。西暦の機械産業は規格と互換性を重要視していた。可動式人形の背中に、人工知能を内蔵させるための蓋があり、そこに黒水晶を入れる。

僕は人形の頭を両手で持った。右目の力なく沈んだ瞳が、緩やかに彩るのを見詰める。

「どうだろう……」

マネキン人形の口が小さく開いた。

「テ、テ」

「て？」

「テ、テケリテケリリコガウアアアアア」

左手が痙攣したように震え、意味を成さない外国語が口から漏れた。汗が噴く。危害を加えるものではないと知ってはいても、異形に対する恐怖は拭い難いからだ。どこかに捨てたはずの信心が背中に被さり、これは流神的だと主張した。手を離すと、可動式マネキン人形は地面に落ち

て動かなくなった。僕はひどく安堵して溜息を吐くと、背中から人工知能を抜き取る。

黒水晶はわずかに熱を帯びていた。

ガラクタのような人形でも動くのだ。西暦の技術の確かさには驚くばかりだが、これが完全な可動式人形ならどうなのだろう。地下街跡の不気味な静寂を破るほどの笑い声を上げて、僕は砂山で針を探す行為に手足を動かした。

探すには根気が必要だった。幸い、こういう作業は化石漁で慣れていたので、僕は一時間も二時間も飽きずにいられた。一日の内で一番日差しの強い時間帯になり、汗が浮かぶ。考えてみれば身体を酷使するのは一週間以上もなかったことだ。壊れた人形を一体一体どけていく。

しかし、僕が納得できるものはいくつも見付からなかった。

疲れたので腰掛けて、ポケットに手を伸ばすと煙草があった。トルコ式の水煙草が最上だが、こういうものでも気晴らしにはなる。ただ、火を持っていないことに気付き、溜息だけ吐く。仕方ないか、どれもこれも。

黒水晶の宝珠を瓦礫の果てへと投げ捨てて、アディオス・アミーゴと呟いた。執着心を捨て去ることに躊躇いはない。僕は家路につく途中、人を一人殺して、頭蓋骨の中にあれを埋め込んでみたらと考えた。思考だけなら気楽なものだ。今日から日記を書くなら、どういう始め方がいいだろう。特筆すべきことは何もなかった、とか気持ち良いくらい簡潔に纏められそう。猟奇的な思考に魂が癒されてしまうのは、僕が人間として恥ずべき存在だから。歌を歌ってみて、ステップを踏んだが、それは面白くなかった。今夜から始めるつもりの日記も延期にした。

シリンダー式の認証機にトークンを入れた。歯車の噛み合わさる音、僕は唐突に昔のことを思い出す。

まだ大投棄時代の最中で、投棄主義者の群れが徘徊していた頃のことだ。集落の外れに誰かが住んでいるという噂を耳にして、僕は好奇心に任せて会いに行った。

僕は死にたかった。その時の僕は、今よりも自暴自棄だった。住んでいるのが投棄主義者であれば、手斧や棍棒で殴り殺されてしまう可能性は大。だから、よそ者と安易に関わるのは忌諱されていた。人々は警告したけれども、僕はすでに世捨ての厄介者だったし、火中の栗を拾ってもみたかった。集落の外れには無人の通信局がある。そこに行くと、僕はアンテナに登った男に声を掛けられた。

「俺の名を知りたいのか？」

と、男は僕に言った。

それが、ヨナとの出会いだった。

水瓶に浮かぶ睡蓮の花、それを見てもなお過去に心を囚われていた。最近、誰かについての記憶しか保てないことに気付き、鬱になる。自分だけの時間は存在しなかったと錯覚しそうになるから。

鬱屈した感情も水に流れてしまえばいいのに。水瓶から溢れ出た花水は鼎に敷かれた銀砂を濡らし、床下に組まれた竹管に滴る。装飾を排した大理石壁の空間は、観覧者の歩き疲れを癒す目的で造られていた。東アでは、このような方法で涼を楽しむのだ。起源種博物館は記憶と記録に

縁取られ、命に不可避な生老病死を展示する。その事実から目を逸らすため、知性あるものは心地よさを求めた。水甕の花、休日、まどろみの風。

運命は稲穂を狩る鎌車として表現された。

そうであるなら博物館は運命のサイロか。

ヨナとの待ち合わせには、いつも起源種博物館を利用している。互いの家を使わないのは、そちらのほうが都合良いからだ。ヨナには病みがちな母がいるし、僕は部屋で客をもてなすがどうも苦手だ。ヨナは偶蹄目展示室のヘラジカの前にいた。僕が近付くのを予期していたのか。

「この大きな角は、何の役に立つのだろう」

問い掛けは、背後の僕に向けられていた。

どうして気付いたのだろう。足音で、とヨナは種明かしをしてくれた。僕は顔を赤らめる。知識は館主に遠く及ばないが、と前置きした上で、北の針葉樹林ではヘラジカが「盾持つ獣」と呼ばれていることを話した。ヘラジカの角は軍神を矢から守るためと信じられているのだ。本当は求愛行動を有利にするためののだが、人の空想が事実を勝るときもある。

命がここにあるのは、とても不思議だ。ヨナは展示物を興味深く見ながら呟く。多くの神話が生命の誕生について言及し、外在する神秘の御業を讃えるが、神秘は生命に内在し、海原でネジと歯車が自然に組み合わさって時計となるような奇跡にこそ注目すべきだろう。命あるところに力への意志あり、と起源種博物館の館主は言う。生きようとする力があるからこそ、碑文回廊の基礎詩は多様にして妙なる旋律の韻音に満ちているのだ。

「そうだろうね、エルビン」

ヨナは頷いた。

階段を降り、海洋生物展示室に入ると、まずピアノ線で吊られた巨大エイに目を奪われる。ここは僕らが漁で入手した化石魚や、サメのような軟骨魚類が展示されていた。

「ヨナの母親はどういう人なんだい？」

「昔は、働き者で街でも評判だったけれども。今は足を悪くして誰にも会おうとしないんだ」

淡い青色の光に彼の表情も曇りがちだ。

「もし良ければ、君の母親が作るスープが食べたいな。大麦と野草の」

「もちろん。いつでも大歓迎するよ」

「一人だと温かいものに餓えてしまうんだ」

僕の何気ない言葉がヨナの同情を揺り起こしたようだ。孤独や一人とは無縁であれば、僕などは病を患っているのも同じなのかもしれない。恋をしろよ、と彼に言われ、馬鹿にするなど笑い返した。

「エルビンも、たまには都市へ行けばいい」

ヨナが都市へ行った話をする。都市にはサーカスの大天幕と宣伝気球、空を穿つ摩天楼、物で溢れた市場、何万人という市民がいた。それらは塩の丘では想像もできないものばかりだ。でも、母親のために白パンを買ったことに勝る思い出はないと言った。

ヨナの母親ほどの年齢になると、ライ麦のパンは身体に良いとは言い難い。しかし、塩の丘で白パンを買い求めるのは、海で真水を探すようなものだった。白亜堂会社の発掘に参加しても、

一日銅貨五枚の賃金では生活するのもやっとなはずだ。だから僕はヨナに生き方を変えるよう勧めたのだが、それでも皆が働いているから僕だけ仕事を放棄するわけにはいかない、と優しく拒否されるに留まっていた。

孤高を保つ生き方も損だが、周囲に束縛される生き方も損だ。損得だけを考えれば塩の丘では生きていけない、と微笑むヨナに僕は恥じ入る。でも、気持ちが理解出来るからこそ一緒にいられるのだろう。

通路は複雑に絡み合い、容易に全体像を把握できない構造は、館内の人々を飽きさせないための工夫だった。僕は海洋生物展示室では階段を降り、次の展示室へは簡易リフトを使って上階に行く。墳丘に建てられた博物館は三層、館主が生活する「智王の座」、展示場となる「歌花の座」、地下にある「機械の座」の三つに分かれていた。智王の座と機械の座へは立ち入りが禁じられているが、歌花の座だけでも相当な広さがある。

歌は韻律、花は命を表す。

僕は天井から掛かる垂れ幕に「罪」の一文字が書き記された、絶滅種展示室についた。巨大な象の骨格が出迎える展示室には、人が滅ぼした生物が集められている。感嘆するヨナの後ろで、言葉で表されない断罪の意味について考えるのだが、結局は不快になるだけだ。象を殺した者は自らも殺すことになる、という東洋の警句に人々は耳を傾けるべきだった。

人は人の業によって象を滅ぼし、ドードー鳥を狩りつくし、密林を伐採し、湿原を埋め立て、その果てに大投棄が起きたのだから。生物史による絶滅の曲線は幾度となくあり、二畳紀では全生命の過半数が絶滅した。それは隕石が原因と考えられているが、無思索な石にも匹敵する行為を人が為したことには驚くばかりだ。人の智は愚かさをも助長するようにできているのだろうか。

「投棄主義は正しかった？」

「さあ、人間が滅べば正しさも証明されただろうね」

基礎詩による色彩の伽藍には滅びの音階が良く似合う。起源種の九割九分が既に絶滅し、それが自然淘汰の四文字で片付けられてしまうことに、人はただ鈍感なのだ。この博物館の根底には黒いユーモアが沈殿しているように思えた。

黒髪の館主は、絶滅について、こう語る。

二酸化炭素をエネルギーにしていた単細胞生物から、突然変異によって光合成をする種が現れたとき、酸素は命を腐らす毒として地球を満たした。想像を絶する大絶滅によって、単細胞生物による死の地層が今でも確認できるほどだ。生命は自らの手で星を不毛にも豊潤にもする。これが自然淘汰であり、人の所行などは別段珍しくもなく、むしろナーイブすぎるのではないか？

それは現在政府の見解に沿う言説だったが、彼女は静かに微笑み、

「死ねばいいのに」

と呟くのだった。

僕はそこまで利己的にはなれない。

「エルビン、聞いてほしい」

前衛芸術家が描いた鯨漁のキュビズム壁画、それが周囲を巡る広場が歌花の座の最後だ。黒い

円で表現された恐ろしげな鯨、三角の槍を持つ漁師、困難とそれに打ち克つ人間力を象徴しているのだという。広場の中心に立ったヨナは、僕に約束を持ちかけた。

二人のどちらかが窮地に立たされたときは、お互いがお互いを助けると。

ヨナが化石漁のお返しをしたがっているのは想像できた。でも、白パンの対価になるようなものをヨナは持たないから、誓いという空手形を切ったのだろう。

「受けてくれるだろうか？」

「断る理由がないよ」

「良かった。それだけを言いたかったんだ」

ヨナは好青年だから、きっと僕を助けてくれる。たとえ鯨に飲み込まれたとしても。僕らは新しく付け足された関係に満足して、親愛と義侠を守るためにポリネシア式の握手をした。

それからヨナは起源種博物館から去り、僕は残って、館主が訪れるのを待った。

窓から碑文回廊の基礎詩を眺める。意味の塊は塊であるが故に、読解を強く拒む。だが、韻字には多様性を支える規則があり、文章の体裁は得ていた。以前、館主が基礎詩の一節を口にしたことがある。抑揚と変化に富んだ、素晴らしい詩韻。

「友の顔は、憂鬱であるほど美しい」

「誰の言葉ですか？」

「さて、誰だったろうね。神学者だと記憶しているが」

大理石の広場に射す影の、一つが実体を得たように、館主が僕の傍らに立っていた。足音で僕に気付いたヨナのようにはいかないか、と僕は苦笑する。彼女は落ち着いた口調で、僕とヨナの語らいを邪魔したくなかったと言った。アイスクリームも食べ頃を過ぎれば溶けるでしょう、と話を振ってみたけれども、館主は小さく頷いただけだ。

かつて、全ての問いに答えが用意されているわけではない、と思想家ジャック・ラカン論じた。現在でも十分通用する考え方だ。館主はサチュルニヤン詩集を知っているかと尋ねた。僕は首を横に振る。詩人は夢の中で見知らぬ女と出会い、女は詩人を愛し、詩人は夢の中の女にだけ心を開いた。

「ベルレーヌが象徴主義なら、あなたは何を暗示させようとしているのですか？」

館主がその問いに答えないのは、最初から分かっていたことだ。僕の視野の右から左へと彼女は歩き、広場の壁画に描かれた鯨の一点に手を押し当てると、隠し扉が開いた。裸電球の光が点々と続く通路には本や紙の束が積み重ねられて、床と天井を支えているようだ。羊皮紙を踏んだ僕は電球の灯りを頼りに目を凝らしたが、それはグレゴリオ聖歌の旋律を記したネウマ譜だった。

「ここからは智王の座。君は知らないだろうが、人の基礎詩は私が作った」

「人の基礎詩？」

「右に廻せば滅び、左に廻せば始まりへ」館主は通路の先にある年代物の昇降機に乗り込むと、僕に手を差し出した。「さあ、君も乗るんだ」

滑車が軽やかに動く音に続いて、昇降機が上昇を始める。

「韻が全てを律するのは君も知っているだろう。七の聖韻と十二の舟韻、十五の葬韻、八の龍韻が起源種博物館の基礎詩を構成しているのも。生命を構成する情報を韻によって圧縮し、詩によ



って封じることで、時間をも超越する。ところで、西暦が終わったのは今から何年前のことだっただろうか」

「二十年前でしょう？」

「暇があれば、今度ヨナに尋ねてみるといい」

館主は意味ありげに微笑んだ。

人の基礎詩は起源種博物館には存在しないとされていたが、館主は自らが作ったと言う。昇降機の生み出す疑似的な重力と、出口を閉ざした迷路のような会話に、僕が感情は沈んでいった。それを不安と捉えたのだろうか、館主は僕を抱き寄せた。

「君が喜ぶものを与えたい。ヨナと約束を交わしたように、受け取ってもらえるだろうか？」

「盗み聞き、覗き見は褒められた趣味とは言えないですね」

「許してほしい。私の密やかな楽しみなんだ」

昇降機が上昇を止めると、僕らは空中庭園に出た。

硝子と鋳鉄のドームのようだが、人の背丈ほどもある黍が視界を遮るほど密生している。館主は畦道を歩いていく。僕は後を追った。なぜ黍が植えられているのか疑問に思ったが、おそらくは砂糖を生産しているのだろう。黍に含まれている糖分は、地下に鎮座する人工頭脳に供給されると同時に、館主が用意する茶菓子にも使われる。

「良く分かったね」

「アイスクリームの行商人にも、ここの砂糖を分けているでしょう？ あなたがわざわざ買い求めるからには、何か理由があると思っていましたが……」

「それも正解だよ。正解者には世界の命運をプレゼントしよう」

欲しくない、と答えた僕に館主は笑い、強制するかと呟く。黍園の終わりには海洋生物展示室のリフトと同じものがあり、それに乗って上階に向かった。岩礁の洞窟を探検したときには迷宮的なものに強く惹かれたが、今こうして迷宮的な博物館にいと搔痒感だけが際立つ。

終点はどこにあるのだろうか？

「智王の座の特別見学は、ここまでだ」

到着した場所は、館主の私室。

そして、

「戻ったよ」

と、館主は部屋の奥にいる誰かに声を掛けた。

他者の存在こそ、起源種博物館に最もそぐわない。

と、思っていたので、館主の他者へと向けた言葉に僕は驚いた。

「はい、館主様」

可愛らしい声をする。部屋は適度な広さで、暮らしのための調度品が揃えられていた。館主の呼び掛けに答える声は、天鷲絨のカーテンで仕切られた部屋の奥から届いたようだ。天蓋を持つ寝台があり、僕はそこに人影と細い手を垣間見た。声は、透き通るような人形のそれだ。智王の座に館主以外の誰かがいることに、僕は戸惑いを隠せない。

「何か飲み物を用意しよう」

「館主、誰がいるんですか？」

「興味があるんだ」

「館主……」

僕を流し見た館主は、反応を楽しみながら氷箱から炭酸水の瓶を取り出した。

別に誰がいたって構わないですよ。僕は言った。館主が一人で住んでいる、と思い込んでいただけで、館主が一人で住んでいるわけではない、ということが判明しても常識的に解釈できる。

僕がそういう態度に出たのは、もちろん館主の思惑通りに動きたくないからだ。彼女は肩を竦めたが、それはチェスの上級者が子供と対局するときの所作だった。

「こちらに来て、挨拶をなさい」

「はい、館主様」

天鷲絨のカーテンから、下着姿の少女が現れる。

珈琲に入れたばかりの乳液が渦巻く、それが今の感情だった。僕の前で、恭しくお辞儀をしたのは、少女の姿をした人形だったからだ。白磁色の肌、栗色の髪、硝子玉の瞳、精巧な手足が少女を模して、自らの意志で歩いたとき、僕の目には少女以上の美しさがあるように感じられた。

廃棄場のマネキン人形などとは比べるまでもない。憂鬱な表情を保ち、微細な均衡を保つ姿は、球体関節人形の系譜に連なるものだ。

触れようとした僕に、少女人形は微かに微笑む。

「御機嫌麗しゅうございます。御主人様」

「これは？」

館主は少女人形の顎を撫でて、僕に説明した。

「西暦で最も優れた人形造形師による作品だ。肌を触ってみるといい。人の手触りと同じだろう？」

僕に炭酸水の瓶を手渡し、彼女は人形の肩から下半身へと手を這わせる。

「種類の異なる合成樹脂を、軽量化した骨格に重層コートすることで、人に近い柔らかさを表現している。それに綺麗な目を見て欲しい。硝子眼は人形造形師が最も技巧を凝らす部分で、人形は瞳の色彩一つで魂を得るということが、君にも理解できるはずだよ」

少女人形は館主の手の動きに身震いした。そういう反応まで人間と瓜二つだが、視線は僕へと固定されている。ぎこちない笑顔だ。

君は運が良い、と館主は言った。

「廃棄場で君が捨てたものを手に入れた」

「……廃棄場で？」

「人工頭脳だよ。君が見付けて、君が捨てた」

あの黒水晶だ。

なぜ、とは訊かなかった。館主は起源種博物館にいるが、世情に詳しく、興味の赴くままに事象を知る術をもつからだ。覗き見趣味、と僕は言うけれども。そして、ここなら黒水晶を入れるに相応しい器が保管されていても不思議ではない。黒水晶は心宿る場所に入ると、すぐに機能を取り戻したのだという。細腕が僕の首に絡み、口づけを求められた。

柔らかな感触が僕の唇に触れ、甘く陶醉しかけてしまう。

「これは君が拾い、君が捨てたものだから、所有権は君にある」

館主が囁いた。

「炭酸水よりもずっと価値あるだろう？」

どちらも僕には刺激が強すぎるように思えるが。

廃棄場の地下街跡で、可動式マネキン人形に黒水晶を入れてみて理解できたのは、これが僕の手には余るということだった。だから捨てた。

「責任を持て。彼女は君に感謝しているそうだ」

「廃棄場で一瞬でも目覚めさせたことがですか？」

「はい、とても嬉しかったです」

少女人形が頷くのを、僕は苦々しく見詰める。僕は右手で人形の身体を押し返すと、机に腰掛けて炭酸水を咽に流し込んだ。

苦々しさの競い合いは、炭酸水のほうが直接的で、僕は館主を一睨みする。

「意図を教えてください」

「エルビン、君が喜ぶものを与えたいだけだ」

「僕がこれを喜ぶと？」

喜ぶ？

僕は喜ぶべきなのか。

しかし、僕は館主から何かを与えられることに慣れていなかった。裏の意図があるだろうと、そればかりが気になる。僕が廃棄場で自動人形を探したのは悪く言えば暇潰しのためだったが、実際に少女人形が歩いたとき、どうするかまでは考えていなかった。疑われるとは心外だ、と彼女は言い、少女人形を側に寄せて可愛がる。

館主は、少女人形を僕に与えようと告げた。

「そして君に、名前を付けてほしい。そういうのが得意なんだろう？」

命名を司る博物館の主が、僕に役目を押し付けるのは職務怠慢ではないか。だが、彼女が言うように僕も「そういうのが得意」だった。少女人形とクンコリ魚は違うけれども。

相応しい名前を思案する。

アル……コル。

アルコール、というのはどうだろうか。

「綺麗な名前だ。アルコール、アルコール、アルコール……」

館主は満足げに頷いた。

北斗七星のミザルに付随する星の名前、アルコールとは「弱さ」を意味する。

少女人形は名前を与えられて嬉しそうに微笑んだ。有り難うございます、有り難うございます御主人様、一所懸命御奉仕いたします。アルコールは僕の靴に唇を這わせた。

「何をしているんだ」

少女人形の行為に虫酸が走る。

館主が男に媚びることを教えたのだろうか。視線を逸らすと、彼女は炭酸水の氷を割る音に聞き耳を立てながら、僕が理性と欲望の間でどう行動するかを観察しているようだ。僕は舌打ちした。館主に試されていると感じ、さらに人形の媚びた態度に苛立ってもいたからだ。

「御主人様……」

「僕はお前の主人じゃない」

その首を僕は絞めようとした。

「エルビン？」

僕の行為に館主が腰を浮かしかけたが、すぐに座り直す。

意味がないと気付いたのは、咽の滑らかなが確かに人形の感触からだった。アルコールは僕が何をしようとしたのか、理解できかねる表情で見詰めていた。生や死の意味すら分からないのに、媚びることだけを仕込まれた機械。

館主の悪い趣味だ。

「お気に召さないのかな？」

「このような言動を好みません」

命あるところに力への意志ありでしょう、と僕は館主に伝え、アルコールは生きていないから思考することもない、と館主は僕に言った。人工頭脳といっても、小脳的な運動制御は申し分ないが、大脳的な思考回路は形而上レベルまで到達していない。模倣して最適な行動を選択するだけであり、僕らにはそれが「思考している」と見えるだけなのだ。

頸を締めていた指の力を緩め、アルコールを抱きかかえた。館主は僕が倒錯した感情に傾いていると考えたようだ。君の暮らしにも彩りが出てきたな、と囁く館主に対して、僕はあえて何も答えなかった。思うに、人と人との関係であっても、一方は一方が「思考している」ようにしか見えていない。慎重であることを望む必要があるだろうから、僕は丁寧に礼を伝えて館主の私室から出ていくことにした。

智王の座には文明の名残が色濃いから嫌いではない。地上に降りる直通エレベーターを待つ間、僕は館主に初めて上がった智王の座についての感想を語った。大小の歯車が回転して、吊り下げられたソビエト連邦の人工衛星が弧を描くのを、キネティックアートだと館主が説明する。

本当は何か機能があるようにも思えるが。

「エルビン」

塩の丘の斜面から海まで至る集落に、まるでジオラマのようだと感じた。館主が何度か僕の名を呼び、振り返る。雲一つない青空に、館主の濃紺の背広は良く映えていた。

彼女は西の方角を指し示して、言った。

「君は、巨人の話はまだ覚えているか？」

「塩の丘に住んでいて、巨人と修道士ヴァルゴの話を忘れる人間はいませんよ。あなたと最初に出会ったときに、僕はあの伝説が疑わしいと言いましたが」

「史家らしい見解だった」

館主は西の夜海を眺めて呟いた。

「きっと、君の意見が正しいのだろうね」

「館主様、『史家』とは何ですか？」

アルコルが問い掛ける。史家とは何なのだろう？

根源的な疑問が脳裏を過ぎったとき、館主は微笑みを浮かべて僕に説明を求めた。史家とは過去の出来事を学ぶことで、現在から未来への問題を解こうとする人を指す。時間と人の歩みは、航路もなく舟を走らす行為に似ていた。歴史、過去の出来事を歴史と言うが、史家は歴史を明らかにする使命を帯びている。なぜなら地中海的な時間概念に従えば、人の行為や思想、人々の風俗や文化は何度でも今でも未来においても繰り返すからだ。

しかし、大投棄時代を経て史家の価値がどれほど残っているというのだろうか。白亜堂会社の復興事業にも、自らの過去にも、僕は懐疑的な見方をしてきた。かつて共産主義が世界の東を征したとき、史家は暴拳の数々に目を逸らし耳を塞いだ。でも、それは許そう。かつて資本主義が世界の全てを飲み込んだときにも、史家の声は金銭の力の前には小さすぎた。でも、それも許そう。

史家が許されないのは、大投棄時代に飲み込まれたことだ。過去の出来事を学んだところで、未来の破滅を未然に防がなくては意味がない。氷山の存在を知りながら、これを避けない客船の船長は死ぬべきだ。同じように、史家は大投棄時代の罪を背負って地獄に墮ちるべきだった。

「史家とは……」

僕は声を絞り出した。

「史家とは、何か物知り博士のように思われていますが、本当は違います。史家は人に指針を示す羅針盤でなくては。僕はそうしたものに憧れていました」

「過去形だね」

館主が呟いたとき、僕を乗せるためのエレベーターが到着した。真鍮の装飾外装と均等分割された硝子窓が美しい乗り物だった。アルコルには難しい話をしてしまったようだが、館主には理解してもらえたと思う。僕と少女人形はエレベーターに乗った。浮遊感と近づく大地、僕はアルコルを覗いた。お前を人間として接したい、それだけを告げるとアルコルは静かに俯くのだった。

昔、まだ史家を目差し大陸の図書館や大学を巡る旅をしていたとき、立ち寄ったサラゴサの蚤の市で僕は拳銃を手に入れた。欧州軍が廃棄した基地倉庫から出回った物で、投棄主義者が跳梁跋扈する中では、護身のために是非とも欲しかったのだ。結局、拳銃は一度も使用することなく、史家への夢も諦めてしまったが、あれを使わずにいられたことを僕は時々感謝していた。

アルコルが石の魚を抱きかかえている。

「これは何ですか？」

「肺魚だ。僕はトルムと名付けている」

トルムは僕が持つ化石魚の中では、最も肉厚だった。肺魚というのは沼地に生息し、水中ではエラで、水上では原始的な肺で呼吸をしていた。左右のヒレで沼地を動き回るので、一般的な魚の流線型ではなく、両生類の体型に近いように思われる。

「でも、これは私が知る肺魚とは違うようですね」

「特別なんだよ、これは」

僕はアルコールの肩に手を置くと、肺魚の化石を受け取った。海を眺めるために、窓の椅子に腰掛ける。

それから意識しないまま徒然と、物思いに耽っていたようだ。

人は運命の大枠から外れることはない、と僕は呟いた。乳飲み子から立ち上がり、杖を頼り老い朽ちる。聖者にしろ、愚者にしろ、その過程は同じ。ただ、季節の巡りを百数えることが出来ないからといって、一生が無為なものと達観するほど、僕は利口ではないのだった。

寄せては返す波音に海岸線でさえ千差があるのに、誰もが規格化された生き方に甘んじている。人生とは中継点でスタンプを押すウォークラリーのようなものなのか？ 違うだろう。

僕は得体の知れない嫌悪感から抗う術を覚えた。しかし心に茨を秘めることは、肉体を裂かれ血を搾られるのと同様だった。他者と壁を作れば、自己にも近寄り難くなる。あるのは哀れみの無限連鎖だ。ヨナは僕を哀れみ、館主は僕を哀れみ、僕は僕を哀れみ.....

その全てを拒絶する。

「御主人様」

アルコールが手を差し出した。

「僕はお前の主人ではないよ」

「はい、御主人様」

他のことは上手くいくのに、これだけは直らない。

一度、殴ってみようかと考えたが、手を痛めそうなので抑制する。魅力のない人間は暴力に頼るが、そこまで自分を貶めるつもりはない。まあ、殴りはしないまでも、頸は締めたから、僕の人間性はとっくに暴落しているか。だからアルコールを殴ろうと考え直したが、少女人形は僕の足から伸びる影に手足を丸めていた。

「.....何をしている？」

「こうしてきたいのです」

それは人形が持つ癖なのだろうか、彼女は日差しを嫌い、暗く冷たい場所を好んだ。

館主は奉仕と媚態の二つだけは良く教えていたようだ。僕が好まないのは知っていたはずだが、あるいは気が変わるとでも。彼女の髪に指を伸ばしてみたが、人の形として何もないことに哀れみを感じた。つまり僕と同じなのだ。

アルコールには言葉から教えよう。言葉を理解することによって思考は深まる。視覚も聴覚も失った少女が「w a t e r」の意味を知り、やがては崇高な自我を獲得するに至ったように、アルコールも僕が好む存在になれるかもしれない。

「館主は、お前に何か話したか？」

「特に何も。ただ、あの方は、御主人様のことばかり考えているようでした」

吉凶の区別がつかない胸騒ぎがする。アルコールは機械的に受け答え、であるからこそ信じるに足りた。主観性がないということは、言説に嘘がないということだ。写真のように。

館主の意図など、僕には窺い知ることもできないが。

「余興のためだと思ってたよ。少し、安心した」

家ではまず化石魚に興味を抱く少女人形の足を洗った。指の一本一本まで精巧に模した足は、水の冷たさには少し反応しただけだが、柔らかなタオルに包まれたときには気持ち良く目を細めた。アルコールのために服を用意しなければ。館主が着せた黒の喪服は似合うものの、やはり、という意識はあった。人形だから食費を気にする必要がないのは幸いが、人らしくあるよう望むのであれば、ある程度の出費は覚悟しないとイケないだろう。

何か教えてほしいことがあるか、と尋ねた。御主人様の名前が知りたい、と答えたので、僕を御主人様と言うのを禁じた。しかし、禁じるという概念をアルコールは理解できない。

殴ろうとすると、頬を差し出し、殴られるのは嫌ですが御主人様が好むのであれば耐えられます、などと口にする。アルコールを誇りある個として教育する道程は、茨のものになるだろう。しかし、食べ物は歯応えのあるほうが美味しい。山は険しくあるべきだし、目標は高く設定されるものなのだ。

ささやかな食事の後でアルコールに接吻すると、気が変わってしまい物語の一節を話すことにした。僕の行為を全て受け入れるのは人形だからこそだが、こうして黙したまま耳を傾けてくれるのはありがたい。聖ルスカが嵐の夜に櫛の苗木を洗礼した物語は、新しい同居人を迎える日に相応しいと思えたから、曖昧な記憶を辿りながら少しずつ聞かせた。朝歌う小鳥も、夜ざわめく樹木も、秋に揺れる麦穂も、春に戯れる羊にも、命あるものには意志が宿るということを……伝えたくて。

アルコールの物憂げな硝子眼は、新たな知識に接したことで輝きを増したようだ。「理解」するのではなく、「理解するふり」をするとする館主の顔を思い出し、過度の期待は禁物と自戒する。アルコールはただ僕に忠実でありたいだけだ。この話をどう思う、と問い掛けてみると、御主人様のお話を拝聴できてアルコールはとても幸せです、という答えが返ってきた。

「他には？」

「何ともありません。ただ感謝の心で一杯です」

「……そうか」

一朝一夕に成し遂げられる偉業はない。

人形に情理を教えることが、はたして「偉業」と言えるだろうか。その疑念は付き纏うが、無視だ。今日はもう寝よう、明日も早いだろうから。

「アルコール、僕はもう休むよ」

命のないアルコールには睡眠の必要がない。だから椅子に座らせたまま電灯を消して、僕は寝室に入った。館主のこと、ヨナのこと、集落と僕とのことを、一度無の状態にしてしまいたい。化石魚の部屋でいつものように毛布に包まると、夜海の水面に煌く星影、波に揺れる海中の温もりから、静謐な深海へと心を沈めていく。瞼を閉じた僕は、今ここにある架空の海で、化石魚の一

つになった。

化石魚は歌声に誘われて漂う。

僕にはその声が、とても身近なものに感じられた。誰の歌声だろうか。心が落ち着く。そして化石魚の夢の中で聴こえた歌は、それが目覚めてからも聴こえることに気が付いた。

部屋には少女人形の姿はなかった。

「アルコール？」

真夜中の風を肌を感じたくて窓を開けると、月明かりの下で踊る喪服の少女がいた。何をしているのだろう、綺麗だ。夢で聴いた歌を歌い、その手足の動きに見せられて、しばし見詰めていたけれども、睡魔に勝てず化石魚の部屋に戻る。

漁に出よう。

そう心に決めた。磯の香りにアルコールの歌声は良く似合う気がしたからだ。

午前三時に僕は目を覚まし、身支度を整えた。

「アルコール」

月夜に佇む少女人形を誘い、僕は潮騒へと向かう。

「どこに行かれるのですか？」

「海だ」

「御主人様が行かれる場所は、とても素敵なところなのでしょうね」

「アルコール」

「はい」

「僕は御主人様じゃない」

黎明前の闇は色濃く、そのときを見計らい、浜辺から小舟を出す。

アルコールは海が初めてだ。舟に乗せることに不安もあったが、不確かに揺れ揺れる感覚に喜びの声を上げて、杞憂であると安心させた。彼女の人工頭脳は岩礁の洞窟にあった。だから海洋との相性が良いのだろう。天球と星屑の祝福に照らされて、夜海の世界は静寂の支配下、舟は水面を滑らかに行く。

楽しい、とアルコールは呟いた。

水平線のかなたを眺める少女人形の、美しい眉目が心地良さそうだ。楽しい、僕は「楽しい」という言葉を噛み締める。本当に楽しんでいるようなアルコールに比べて、自分はどのようなだろう。

濡れた手足が乾くころには、アンモナイト礁に到着していた。

櫂を漕ぎ、夜の潮風と揺らぐ小舟に上機嫌のアルコールを見詰める。

「歌うことは出来るか？」

「流行の歌でなければ」

僕は頷く。

歌が海へと還る戯れを、耳にするには良い月の夜だった。ここは幾多の大巻貝が岩肌に眠ることから、アンモナイト礁と呼ばれる場所だ。文字を持たない生物は、自ら石になることで墓と墓銘碑になるのかもしれないと考え、透明度の高い海水に手を差した。温度はそれほどでもなく、漁には適している。



アルコールの音が風に染む。

それは諸島に伝わる古い歌だった。方言の強い詩は意味を超越していたが、感じるのはより直線的に、波揺れのリズムと調和して僕の心を慰めた。

諸島には歌で霊と交流する人たちがいる。「花近衛」の名で知られ、宗教的な儀式では十人ほどの集まりになって、神歌を歌う。アルコールが僕に聴かせているものは、海に豊漁を願う歌だった。古式の声調は水の奥にも届きそうな、真青の音。館主が君に教えたのか、と尋ねると、意味深な眼差しを海に向けたまま、元から知っていました、と言う。

「海を覗いていると、懐かしい気持ちになります」

僕は心臓を掴まれたように、舐先のアルコールを見詰めた。

夜と海は一つになって夜海になり、影を好む少女人形を包み込んでいるようだ。その証拠に歌は月明かりを浮かべる水面に確かな波紋を残し、小さな泡になって海に溶けていく。碑文回廊の基礎詩のようだ。言葉にできない感覚に強く心が動かされた。

「アルコールは、お前の人工知能は、あの岩礁の洞窟で見つけたんだ」

「はい、そのように館主様から伺っています」

あの洞窟は海の民が残した遺跡だ。それは土器片の様式から明らかなことだった。

だとするなら、海の民は少女人形にどのような役割を与えていたのだろう。

「今初めての場所とは思えません」

「不思議だな、人形のくせに。岩礁の洞窟に捨てられる前の記憶があるのか？」

「いいえ、ただ記録の欠片が歌の形をしているのかも」

歌もまた、化石のようだ。僕はアルコールに笑顔を見せると、漁を始めることにした。

網を手繰り寄せる手に、気持ち良く力が籠もる。魚の形をしていると言っても、それは石だから、海中に仕掛ける網は小さなものでなければならない。海面に浮かぶデゴイを頼りに、僕は網を五つほど引き上げた。本物の魚は海に帰し、アルコールに化石の違いを教えていく。これはユーコノスピラ・エレストクス、海で一般的に獲れる化石。これはボトリオテピス・モノス、デボン紀の甲冑魚。

化石は、名無しの星座が落ちたものなのですよ。

「言葉ない生き物が、墓と墓銘碑になるためだと思っていたが」

「それは迷信です」

少女人形は悪戯っぽく微笑んだ。

ああ、そうかもしれない。

アルコールは両手に巻貝の化石を抱いた。意味のない行為に意味を付与したくなる。

海のもたらす魂の静けさは、波の揺らぎに溶けてゆく。心地よい疲労感、空はもう朝の一手前、明星が輝いていた。舟の上は海に身を任せるに丁度良い場所だった。アルコール、僕は少女人形の名を呼んだ。彼女は巻貝に耳を当てて、潮騒を聴くふりをしていた。

砂浜に押し寄せる波の泡立ちが、黒から濃紺に薄れる闇の下では幻影的だ。僕は小舟を茂みに

隠した。化石漁はいつも午前六時に終える。皆が夜と朝の境界と考え、政府のラジオ放送の始まる時間でもあるからだ。

舟を引いた後は、風と海水が洗い流すだろう。

「アルコール、丘から日が昇る頃だ」

朝日は澱んだ意識の象徴だと思う。朝に対するイメージは、ネガティブなものばかりだったからだ。秘密を嗜む夜が終わると、次に控えるのは日常生活の時間帯。そこでは太陽ですら自由を許されず、暦に沿った運行を強いられていた。

真昼に息苦しさを覚えるのは、アルコールも僕も同じだった。家に帰る途中、彼女は名残惜しそうに何度も振り向いていた。海に還りたい、と呟く、それも記録の欠片が原因なのだろう。化石魚の成果は乏しいものだったが、彼女の歌声は銀月と黒金の世界に唯一つの花にも思われた。

白漆喰に羊歯植物が生い茂る集合住宅。

「これから何をなさるのですか？」

「朝食だ」

僕は井戸から朝の真水に組み上げ、卵とベーコンのパスタを作ることにした。良い匂いですね。傍らで料理を見詰める少女人形に、僕は微笑みかける。

「島バジルは塩梅が難しいんだよな」

と、独り言を言いながら沸騰する鍋にパスタを入れた。

塩の風味がする島バジルは、卵との相性が悪い。菜園商社製のバジルでの半分の量を卵に振り掛けると、柔らかくなったパスタと一緒に絡める。朝はこれで十分だった。

部屋の隅に腰掛けたアルコールが、食事の僕に憂いを秘めた視線を送る。精巧な人工皮膚と造形によって本物以上の魅力を秘めた身体は、少女の成長過程を拒絶する悲鳴が今にも聴こえてきそうなほどだ。髪、硝子眼、細頸から肩、そして背中へと降りる曲線、下腹部。バロック的な美意識が器、人工頭脳によって動作する四肢に心は備わらない。

食事に見詰めているだけで興味が無限に湧いてくる。

「申し訳ありません。私に心がないばかりに、御主人様の起源を損ねてしまいました」

「.....気にすることはない」

哲学者曰く、精神は肉体の付属物に過ぎない、のだから。

食事を済ませてアルコールの足を洗う。十二条の革ベルトで身体を拘束する喪服は窮屈そうで、もう少し軽快な服装にするべきだと思った。

今日は、白亜堂会社の発掘に参加しよう。

生計を立てる意味においては、発掘の仕事など足しにもならないけれども、労働の実感が欲しいときもある。

「御主人様、私は何をすればいいのでしょうか？」

「僕を御主人様と呼ぶな。それと今日は僕が帰ってくるまで、静かにここにいるんだ」

「解りました」

髪を梳くと俯いた顔が僕を見詰めて、笑った。孤独に慣れた心に、それは辛い。

水筒と手拭い、発掘用の革手袋を鞆に入れて、スコップを手にした。白亜堂会社の発掘現場に続く、畦道には見知った男たちがゆらゆら歩いている。景色の中に自分がある感覚をいつも持ち

続けていよう。海沿いのカフェで水煙草を吸いたい。周遊漁の生態が知りたいから本を買おう。その前に、彩湖貝の流通についての本を読んでしまわないと。アルコールの服は、どうしたらいいのだろう。アルコールとの生活は。

そのような思考を続けていると、僕はいつの間にか発掘現場の小屋に到着していた。ここで集まった男たちは組に分けられ、作業に従事する。発掘は流れ作業だ。地面を均等に掘っていき、土を一輪車に乗せ、一箇所には捨てる。そうして慎重に地層を剥がしていき、化石の年代測定や保存状況を克明に記録していくのだった。発掘途中の巨大な化石は熟練者が慎重に土を取り除いていく。この現場からは蜥蜴鳥の化石も良く出るとのことだ。

ヨナを探したが、今日は来ていないみたいだ。他愛ない会話が交わされて、思い思いの組に分かれていく。紙切れに名前を書き込んで、白亜堂公司から発行される人証を示すと、僕も適当なところに入ろうとした。

「ちょっと待て」

背広姿の男が僕を呼び止める。

現場責任者だ。軽く頭を下げると、彼は意に介した様子もなく、発掘現場の一角を指差した。そこはまだ整地されていない、大小の岩石が転がる場所だった。

「測量に邪魔な草木や石をどけてほしい」

「一人でですか？」

そう言いかけて、

「解りました」

と答える。

苦々しいのは、囁かずもアルコールと同じ受け答えをしたことだ。個人の自由意志を求めている人間は、これを当然として去っていくが、釈然としない感覚は僕に施された呪いなのだと思う。仕事になれば、僕は思考を停止した機械だ。行為は媚びを売る人形と大差はない。

作業は測量で等高線を引くために、機械が設置できる空間を確保するのが目的だった。一人ですべき仕事ではないが、一人しか割り振られない仕事でもある。地形を読む人間が鉋と鎌で草木を切り、スコップを使い、テコの要領で石を転がしていく。単純な肉体労働だが蟲や貝の化石が出土するときがあるから、常に注意を保たなければならない。化石を見付けたら一箇所に集め、作業の終わりに現場責任者に確認を求める。

午前中も残り少なくなると、日は高く輝き、汗の量が増えた。もう夏と言っても差し支えない陽気だ。海からの潮風は生温く風の用を為さないため、つねに心地悪さを感じつつの作業になった。水分の補給と休憩を怠れば、すぐに熱中症で倒れてしまうだろう。一人では遅々として進まないが、それでも昼間近くになると刈った草も石もかなりの量になっていた。成果も。僕は動かした石の下から、骨の化石を発見した。

丸みのある骨だ。顎か骨盤の骨か……

地中のものは空気に触れれば急速に風化するので、エナメル剤で科学的な処理を施し、その後、石膏で割れや欠けを塞ぐ。骨を手に取り、僕は想像した。何億年もの昔に、巨大な爬虫類が塩を求めて丘を闊歩していたのを。

海からの暖風が汗を含んだ肌着を乾かす。空は青一色で、光の束である太陽が素晴らしい輝き

を放っていた。水筒の水で喉を潤す。井戸水は咽から肺へと染み渡るが、それも気休めでしかないほどだ。だが、それがいい。身体を動かして、何かを成すという実感に、この暑さは欠かせない要素だった。

休憩時間になり、木陰で横になった時だ。

「御主人様」

潮風が運ぶまどろみの香りに浸っていると、なぜかアルコールが僕の前に立っていた。直射日光を浴びないように鴉羽の日傘を差して、暑さにもかかわらず涼しげな表情、影から浮かび上がる実体に、僕は館主が来たのだろうかという錯覚に囚われた。

何をしている。僕が問い掛けると、弁当箱を手渡された。

「料理です」

「料理？」

「お気に召していただければいいのですが」

「そうだな、僕は好き嫌いが無いほうなんだ」

アルコールが料理をしたというのは意外で、少し嬉しかった。家事などは最初から期待していなかったからだ。人間らしいじゃないか、と僕が言うと、少女人形は小さく頭を下げる。家事のことよりも料理の中身が知りたくて、僕は興味津々で弁当箱の蓋を開けてみた。

これは……パスタだ。

「どうでしょうか？」

ネジとボルトがトッピングされている。

「あ、うん、独創的というのかな」

冗談かと一瞬思ったけれども、大真面目なのはアルコールの表情を見れば察しがついた。アルコールは僕のために料理を作った。パスタなのは朝食を見ていたからだろう。ただ、彼女は人ではなく、ましてや生き物でもないから、食べられる物と食べられない物の区別がつかないのだ。基本を教えるとして、どこまで基本的なことから教えればよいのか。難問だが、今は気持ちだけいただくことにしよう。

「美味しそうだ」

「ありがとうございます。御主人様」

「その呼び方はやめてほしい」僕は、弁当箱の蓋を閉めた。「美味しそうな料理は、一人で食べることにしているんだ。今日はそういう気分だから、後で食べさせてもらうよ」

「解りました」

「アルコール、ありがとう」

僕はアルコールを見送った。

それから穴を掘って、誰にも見られないようにネジとボルトのパスタを埋める。顔色の悪さを鉄分の不足と考えたのだろうか、だとしたら喜びも五割増しだけれども。木陰で休憩していると、肉体の疲れが他愛ない思考を呼び込んだ。今ある因果を忘れて、何にも拘らなければ、世界は許せることばかりじゃないか。なんとなく、思考の辿り着いた答えに背中を押され、僕は立ち上がった。草を刈り、枝を手折り、測量杭を打ち込んでいく。楽しいと感じると、仕事に没頭す

るのも早かった。

時計が四時を回れば、確かに日が傾いているのを実感できて、風も疲れた身体を慈しむようになる。発掘作業の終了は午後五時だ。僕らは土埃と汗に汚れた服のまま、日当を得るために列を作る。

食料品店で会話を交わした男らが、僕に好奇に満ちた表情を向けていた。

「エルビン、お前が発掘だなんて、どういう風の吹き回しだ？」

「身体を動かすのが好きなんだよ、意外に」

「休憩のときに来た女のためだろ」

男たちが笑い、僕はそうじゃない、と否定したが、どういう理由かまでは説明しなかった。ハッキリしない奴だ、と見られるのには慣れていたので、平気だ。しかし、白亜堂公司の現場責任者だけは僕に厳しい視線を送っていた。なぜ彼は僕を毛嫌いするのだろうか。僕が起源種博物館の館主に近すぎるからだ、と思っていたけれども、どうやら違うらしい。

「お前がヨナと仲が良いからだって、言われているぜ」

「何だ、あいつはそういう趣味なのか？」

日当の銅貨五枚を現場責任者から受け取るとき、僕は鼻で笑ってやった。どうした、と彼が詰問してきたので、どうしたもこうしたもありません、と僕は前置きした上で、肩を竦める。

気が晴れたので、帰路に行く足取りは軽かった。発掘帰りの男たちは日銭を使って酒を飲むが、ヨナがいなければ僕は特に誘われたい。酒を飲んでも会話が弾むわけでもないし、共通の話題に乏しいのは如何ともしがたいことだった。エルビンはああいう性格の男だから、という評価は芳しくないものの、僕にとっては気が楽だ。

アルコールに服を買ってあげないと。

僕は呟いた。

塩の丘では古着が普通だが、アルコールには都市で着るような服が似合うような気がする。今度、誰かが新都市に行くような機会があれば、購入してきてもらうことを考えた。それを打ち消す。やはり自分たちで試着してみないことには、身体の寸法や似合うかどうか解らないではないか。自分のことは何も考える必要がなかったが、世間知らずの同居人には世話を焼いてあげないと。

僕は立ち止まった。

館主が押し付けたものを、嫌々ながら手元に置いているという図式から離れている。化石魚と僕だけの世界は閉じられていて、例え媚びに長けた自動人形であっても、拒絶できる準備はできていると思っていたのに。それはそれで悪くはない、と僕が考えていることに驚く。

「ただいま」

白羊歯の集合住宅に帰り着くと、アルコールが笑顔で出迎えた。

「御主人様の帰りを待ちわびて、歌を歌っていました」

「ああ、すまないね。一人は辛かっただろう」

アルコールは何も言わず、僕の胸に顔を埋める。栗色の髪と頭を撫でてしていると、ネジとボルトの pasta について一つの名案が閃いた。アルコールに食べられる物と食べられない物の区別を教えるのは難しい。しかし、アルコールに僕が好きな食べ物と嫌いな食べ物を教えるのは簡単だろう。

「アルコール、夕食にしよう」

「はい、お腹を空かせていると思って、もう作っています」

「作っている？」

「お魚料理ですよ。御主人様の大好きな……」

と、言いかけるアルコールを退かして、僕は台所に行った。鍋に入っていたのは、魚には違いないが、それは僕が大事にしている化石魚だ。茹で上がる寸前のチチムーとクアドラを取り出して、褒められたがっているアルコールを一瞥した。分かってはいるけれども、どうしたものか。

「御主人様の大好きな……」

「ああ、固い魚はあまり好きじゃないんだ」

「それは、申し訳ありません。御主人様」

本当に悲しそうに頭を下げたアルコールに、僕は世界を許す態度で溜息を吐いた。

アルコールがベランダの観葉植物に水を与えていた。通りを歩く人に手を振って挨拶している。井戸に行くと、住人の一人に話しかけられた。白羊歯の集合住宅には僕の他に十人ほどが生活している。アルコールを幾らで買ったのかと問われ、そんな馬鹿なことが知りたいのか、と答えた。

「お前も見掛けによらないな」

「勝手に想像してる」

僕は微笑みを交わし、それぞれの部屋に戻る。

アルコールと同居して一週間が過ぎようとしていた。僕は今の今まで一人暮らしだったので、周囲から好奇の目で見られている。その視線も気にはならないけれども、回答くらいは用意したほうが良さそうだ。アルコールは遠くから訪ねてきた姪と説明することにした。喪服を着ているのは両親に不幸があって、色々と事情があるのだと仄めかせば、それ以上の詮索はないはずだ。

食事が終わって器を片付けているときに、僕はそのことを言い聞かせた。

「アルコール、お前は僕の姪だ」

「めい？」

「意味は知らなくてもいい。僕との関係を誰かに聴かれたら、姪だと答えるんだ」僕は少女人形の掠れた髪を梳きながら囁く。「これは約束だよ」

アルコールは頷いた。僕の言葉は絶対だから、一人のときも約束を守ってくれている。一人のとき、アルコールはオリーブの木陰で歌いながら過ごすことが多いようだ。歌声は物悲しげに掠れ、透き通り、横切る人を魅了した。十二条の革ベルトで拘束する喪服と、憂いを秘めた眼差しが、両親を失った傷心の少女という印象を強めている。

だから、あえて話しかけようとする人間も少なかった。

僕が食料品店に行くと、そこで交わされていた話題がアルコールの歌声だったときがある。

「あんなに綺麗な歌声は、ラジオでも聴けないよ」

と、店の女主人は溜息混じりに呟いた。酒場で歌えば金になる、と男が口々に言ったけれども、彼らがアルコールの正体を知ればどういう顔をするだろう。学校帰りの子供たちが、オリーブの幹に腰掛けるアルコールに歌を教えてもらっているのを見た。舟の歌、雨の歌、星の歌、恋の歌。独特な節回しや諸島言葉に子供は舌足らずな声で悪戦苦闘していたけれども、皆で歌うのも心地が良さそうだ。

「今度、学校で歌ってほしいと言われました」

「いいじゃないか。アルコールも、大勢の前で歌いたいのだろう？」

「はい。歌いたいです」

僕よりも集落の役に立っている。

そう自嘲してしまうほど、心配は杞憂に終わりそうだ。ただ、もう一つだけ、ヨナには事情を話すべきか迷っていた。

彼は信頼できる男だ。それは十分すぎるほど理解している。でも、僕にはアルコールのことを上手く説明できるだけの言葉がなかった。真実を話せば、ヨナは僕を不道德だと罵るかもしれな

いし、騙したところでアルコールのことが知られるのは時間の問題だ。独り身の男が等身大の少女人形と一緒に暮らしているというのは、世間的には褒められた行為ではない。

物思いに耽るのを止めようと、化石魚の部屋から出てみた。

昼の柔らかな日差しから逃げて、アルコールは部屋の隅で寛いでいる。

「アルコール」

僕は彼女に発掘現場で拾った骨を見せた。

「これは、何だろうね」

「オルニトミムスに似た顎骨の欠片です」

「踝の骨かもしれない。こういうものでも想像を楽しめる不思議だ」

「想像？ 私は想像することができません」

アルコールの呟きは、事実を事実のまま言葉にしていた。

二つの部屋に機械と人間を入れて、質問をし、その答えが人間のものか機械のものか区別できなければ、機械が「知的」であるというテストを思い出す。

つまり、主観の問題なのだろうか心というものは。頬に手を伸ばすと、温もりを求めて身体を寄せようとする仕草に、僕は枯れたものが湿りゆくときの音を聴いた。日陰を好むアルコールは、僕が昼間外出しようとする、日傘を手に追いかけてくる。意味もなく歩くのは僕の趣味だけど、彼女はそれが理解できないから、目的を聴きたがった。

「歩くことが目的なんだよ」

アルコールは少し考えた。

「健康のためですか？」

「あ……まあ、心の平穏を保つためかな」

何百年の昔に作られた轍道を歩き、右手に丘、左手に翡翠色の海を眺めながら、散歩をするのは気持ちがいい。風は穏やかな波の音を運び、夜海の硬質な水面とはまた違う、柔らかな命の揺りかごの顔を覗かせていた。海はいつまでも見飽きることがない。

僕の呟きに、アルコールも同じ気持ちのようだ。

「私は海の眷属なのかもしれません」

「僕も時々思うことがあるよ」

化石魚をしたときの、アルコールの様子が思い浮かぶ。彼女の人工知能は海に縁のものだった。

人形には、その始まりから宗教的な意味があり、アルコールが口にする海への憧憬にも確かな理由が存在するのではないか。海は男女の神性を兼ね揃えている。地域によって海に捧げる儀式は異なるが、夜海では少女人形が歌で神の怒りを鎮め、魚を呼び寄せる役割を負わされていたとしたら。

「お前は舟巫女だった。そういう記憶はないのか？」

「あまり、過去のことは分かりません。一度記録が失われているので」

その答えは残念だったけれども、アルコールに対する理解は深まったような気がした。波止場近くまで歩くと、喫茶店のパラソルが僕に咽の渴きを思い出させる。水煙草と珈琲、それに魚料理を味わい、長椅子に侍りながら時間を消費するのは蠱惑的だった。



「ちょっと立ち寄ってみよう」

僕が懇意にしているのは、風車が目印の喫茶店『パロ・トローム』だ。店の主人はアルコールを飲んで少し驚いたようだったが、心得たものでベイルート製の水煙草を用意してくれた。珈琲を二杯テーブルに置くが、アルコールはこの黒く濁った飲み物を不思議そうに眺めるばかりだ。水煙草の吸入口からリンゴのフレーバーと一緒に紫煙を味わう。

漁師の舟が波に揺れていた。コンクリートの波止場で老人たちがチーズ石に興じているのを眺め、アルコールにルールを説明する。チーズ石とは、杭に目掛けて一定の距離から石を転がす遊びで、転がす石がチーズに似ているから、その名が付いた。杭の廻りには二重に円が引かれ、ダーツと同じく中心に近いと点数が高い。ダーツと違うのは、相手方のチーズ石を弾き飛ばすことができるという点だ。

「簡単そうですね」

「そうかな。地面には僅かな凹凸があって、思うようには転がらないし、それよりも相手方を詰めていく思考が必要になってくる。単純なものほど、奥が深いんだよ」

アルコールには遊戯の醍醐味までは理解できないようだ。地面を転がる石を眺めるよりも、風にかかる雲のほうの方が面白い、と呟いた。それは僕も同じだった。

主人が気を利かせて、イワシの油漬けをテーブルに置く。パロ・トロームの主人は漁師でもあり、水煙草の他にも海のものも料理して客に提供していた。豊かな胴回り、日に焼けた肌、岩のような手は海の男の証だ。アルコールが可愛らしい仕草で「ありがとう」と言うと、表情を崩さないまま頸の関節を鳴らして、僕のほうに視線を滑らす。

「薬屋から話は聞いたよ。夜海製のオイルサーディンを復活させたいそうだね」

「塩とオリーブの比率が問題なんだ。普通の缶詰なら問題ないが、夜海製の味を再現するのは難しい。隠し味があったように記憶しているが、それが何かも分からないし」

「島バジルは卵との相性は良くないが、魚との相性は抜群だよ」

「そうか、試してみよう」

空が溶けていく海の碧さと、庇の下で風を感じながら、主人と缶詰についての情報を交換した。漁の季節になると、イワシの魚影で海が黒く染まる。小魚を追う鮫や鯨を狩るのもいいが、塩の丘ではイワシを網で引くのが主流だった。以前は波止場に缶詰工場があったのだが、今は薬屋の倉庫として利用されているだけだ。バルト海のタラ漁に圧迫されて漁業に従事する人間は近隣へ散ってしまい、今は漁も個人の楽しみだけのものになっていた。

「魚だけで食っていくのは難しい」

と、主人は言った。

「お魚は美味しいですよ？」

「味の良し悪しじゃないんだ、お嬢ちゃん」

「要は銭になるかならないかさ」

漁業は運に翻弄される。チーズ石と同じで、単純なようでいて複雑なのだ。

「夜海製のオイルサーディンが食べられるなら、銀貨を払っても惜しくはないな」

水煙草の成分が肺を満たし、軽く円やかな味わいに眼が泳ぐ。こうしているとアルコールが夜海で聴かせた歌を思い出し、波音と同調する歌声の名残に頬を弛めた。少女人形の役割とは何か、

良く解らないけれども、影だけを道連れに生きていた僕には分不相応にも思えてくる。

アルコールが僕の袖を掴んでいた。

「お話、してください」

「……聖ルスカと嵐の夜の物語のような？」

「はい、お願いします」

僕は少し考えて、塩の丘に伝わる巨人の話をした。

海が陸を覆い、丘が島だった頃、起源種博物館のある場所には大理石の館があった。館には古きに属する巨人が住んでいたという。巨人は海を見守りながら静かに暮らしていたが、ある日、一人の修道士が訪れた。修道士の名をヴァルゴと言う。ヴァルゴは国同士の争いに巻き込まれた棄民を引き連れていた。ヴァルゴは言った「神の御名において、館を使わせてもらいたい」と。巨人は言った「その神は我が神にあらず。早急に立ち去るがよい」と。

しかし、ヴァルゴは諦めなかった。ヴァルゴは言った「それでは私たちに立ち去る土地を与えて欲しい」と。巨人は笑い声を上げた「小さく賢い者よ、お前の望みを叶えよう」

巨人は虹の鎖を使い、海から陸地を引き上げた。ヴァルゴと棄民たちの周りには、塩の大地が広がった。ヴァルゴは古に属する巨人に感謝し、修道院を丘の下に建てた。それが今の集落の元となった。この一帯が塩を産するのは、大地が海から隆起した証だ。修道院が栄えると、巨人は静かさを求めて西の海へと旅立っていった。塩の丘に吹き付ける西風は、巨人が故郷を懐かしんで出す溜息だと言い、地下から見付かる恐竜の化石は巨人の一族の骨だと考えられていた。

「巨人なんて、本当にいたのでしょうか？」

「神話なんて全て作り話だよ」

「そうなのですか？」

僕は微笑むと、アルコールの頬に口吻をした。意味を付与することに人は情熱を傾けるが、真偽を決めることには人は興味を示さない、ということだよ。僕は喫茶店を出ることにした。水煙草の残り香を噛みつつ、パロ・トロームの主人に金を払う。日傘を差して、浜辺を歩くアルコールは無垢の象徴だった。僕はなんだか疲れているようだと言った。

ヨナは、今の僕をどう思うのだろうか。

「アルコール」

僕は少女人形に尋ねた。

「お前は、何だ？」

「私は御主人様の忠実な……いえ、姪です」

「僕は、自分が分からない」

生きている意味が見出せずに彷徨う、僕は幽霊なのだろうか。そうだとしたら、今はとても耐え難い。アルコールの硝子の瞳が、僕へと向けられている。もっと話がしたい。僕は心の奥から滲み出る欲望に声を漏らす。

「あ……、そうだアルコール」

「はい」

「こんな物語もあるんだ」

一度話すと、僕らは夜中まで話し続けた。



テッサリアで発見された飛行船は『饕餮号』と名付けられた。東洋の神話由来の名は、飛行試験に白亜堂公司が関係するからだろう、というのは新聞が伝えるところだ。広場の屋台式カフェで記事を読んでいた僕は、釈然としない気持ちになる。饕餮とは青銅器時代の東洋で祀られていた古神であり、時代を経て強欲暴虐な性格が付与された悪神でもあるからだ。

饕餮と竜と鳳凰、この三つが青銅器時代の東洋では意味ある神として祀られた。三神の内、竜と鳳凰に対する信仰は後の世まで続いたが、饕餮だけは青銅器と共に地中に捨てられている。土地神が新しい信仰の中で、悪と断罪されるのは洋の東西を問わずに行われていたことだ。だが、呪術的な力を祈るための象徴として、白亜堂公司は青銅器の文様にのみ残る饕餮の名を飛行船に与えたのだろう。

その飛行船『饕餮号』が空を飛んだ日に、塩の丘に一台の自動車が現れた。

「御主人様、黒い箱が！ 黒い箱が！ 黒い箱が！」

という声に、僕の睡眠は破られた。

「黒い箱……ああ、自動車か」

深く振動するエンジン音が理解に通じる。身体を揺するアルコールに、僕は説明してやった。自動車は西暦の乗り物で石油系燃料によって運動する。発明者はカール・ベンツとゴットリーブ・ダイムラー。一般的な定義では、四つのタイヤと一つの原動機があるものを自動車と言って……自動車。

「どこに自動車が？」

「ここにです」

アルコールの単純な答えと呼び鈴の音が、ほぼ同時に虚ろな意識を叩き起こす。

「はじめまして」

白羊歯の集合住宅に来た男は東洋系の顔立ちをしていて、それだけで彼が白亜堂公司の責任ある立場の人間だと分かった。塩の丘を訪れる東洋人は希少だし、僕に用があるのならなおさらだ。都会的な服装に革靴、容姿は「整った」という形容詞が似合っている。整った顔、整った髪、整った襟元、整った服の皺。

彼は「白亜堂公司の広域支配人」と名乗った。

「丘の発掘現場で、あなたのことを伺いましてね」

「あの現場責任者は、僕のことを毛嫌いしていると思っていましたが」

「失礼があれば、私から注意しておきましょう。あなたのような人間が地方で隠遁生活をしているのは、我々としても惜しいと考えます。どうですか？ お望みであれば支配人権限で、適当な職に就いてもらいたいのですが」

僕は今の境遇が身の丈に合っていると謝辞した。

彼の職権は僕では想像もつかないほどだろう。西安城市を拠点に世界の発掘を仕切る同社でも、広域支配人の肩書きを持つのは二十四人しかいない。人が生きた足跡を辿り、地球が今ある過程を追うために、大地を棋盤に見立てて「発掘隊」という駒を動かすのが彼らの役割だ。襟のカフボタンには、彼の地位を証明する蚩尤の印章が輝いていた。鉄を喰らう荒神の蚩尤は、貪欲

さの象徴、知を統べようとする白亜堂会社が野心の形だ。

蚩尤も饕餮も神性は良く似ている。

僕はアルコールに水を注ぐように言うと、男をテーブルに案内した。

「はるばる東洋から？」

「いえ、白亜堂会社は世界中に枝を張っています。当然、この地域にも。普段は新都市での史料蒐集などを行っているのですが、たまに外の空気を吸うのも心地よいですね」

窓からの景色を眺め、広域支配人は感慨深げに溜息を吐く。

「今日は飛行船の試運転があると聞きましたが」

「あれは技術畑の仕事です」

男はさして重要でもないという表情をした。白亜堂会社のような巨大企業であれば、職種ごとに分業が進んでいるだろうし、広域支配人の職務は交渉や政治判断にあるようだ。だとするならば、彼が集合住宅に来た理由も自ずと明らかに思えた。

人当たりの良い笑顔と、齒の浮くような甘言には警戒したほうがいい。

「しかし飛行船が空を飛ぶといえ、古典文化復興にも匹敵する出来事ですよ。連日の新聞報道で、僕でも招待状があれば立ち会いたいくらいだ。それに比べれば、地位ある人間が、わざわざ会うべき価値があるとも思えませんが」

「困ったときは、お互い様と言うでしょう？」

「困ることは特にはないですが」

広域支配人の眉が微かに反応する。それを確認した。アルコールが優雅な動きでコップを運び、部屋の隅の椅子に腰掛ける。白亜堂会社の広域支配人の目でも、アルコールが少女人形であると見抜けなかった。それどころか僕と喪服の少女の組み合わせに、意味を見出せないでいるようだ。

「姪です。身寄りがなくてね」

「そういうことですか」

その真意を問い質してみたけれども頷くに止めた。

「そろそろ本題に入ったらどうですか？」

意味に乏しい受け答えに時間を費やすほど、僕も彼も悠長ではない。

白亜堂会社に来た理由、それは起源種博物館にあった。

いずれも大投棄時代を乗り越えた存在でありながら、復古主義を掲げる白亜堂会社と神秘主義を貫く起源種博物館は水と油の関係だ。あの時代に、今も地域的に続いているが、焚書と破壊によって叡智のかなりが抹消されてしまった。人は西暦の記憶を留めていても、進歩の記録を取り戻すのは容易ではない。白亜堂会社は実際良くやっている。考古学的な研究発掘によって、人類史の幾分かの復元に成功していたのだから。

だが、古生物学の分野は立ち遅れたままだという。

彼は小箱をテーブルに置いた。

「知識は共有されるべきものでしょう」

「密かに楽しむのも認められるべきですね」

「あなたは館主に近い人間だと聞きました。過去に史家を目指していたとも。私の気持ちも痛い

ほど理解してくれるはずです」

僕は白亜堂会社が館主に宛てた手紙を思い出した。

起源種博物館は大投棄時代の以前、西暦の末に建てられた。十年経てば人は思想も変わるし、百年超えれば命も尽きる。そうした時流の中で、生命の名を司る博物館は宗教的なものを帯びるようになっていた。早くから破壊の対象であり、葬祭神殿を模した建物が本当の「遺跡」になる可能性すらあったのに、代々の館主は起源種の城を守り続けたのだ。そして神の全知を思えば、無知な身ならば畏敬の念を覚えることにも繋がった。

だが知識欲に限界はなく、十を数えられたなら次は百を目差すのが人の性というものらしい。白亜堂公司是博物館の譲渡を求めている。そうすることで万智の座に着きたいとの野望があるのだ。かつて七十万冊の書物を有していたアレクサンドリアが燃えたとき、シギリアの哲学者ラコメネスは「文化の昼は終焉し、蛮習の夜が到来する」と嘆いたが、知を求める営みが途絶えることはなかった。

それは今も同様に、と男は語り、同意を求めた。

「白亜堂公司是現在政府から過去の復元事業を任されています。文化、文明、風俗、風習、科学、技術、伝統、伝説、神話、歴史……自然。人が守るべきだったものは万機に亘る」

小箱に入っていたのは矢魚の化石だ。

「私どもは陸、あなたは海、それで今まで共存していましたよね」

「何か問題でも？」

「いえ、私は起源種博物館の館主と会いたいのです」

「会っても、満足いく結果になるとも限らないですよ」

「それは、あなたが心配することではない」

「言い方が汚いですね」

「何とでもどうぞ」

広域支配人は余裕の面持ちで微笑み、僕は仕方なしにそれを真似た。

自然に忠実な人間は出世する、と薬屋が話していた。つまり弱肉強食、弱みに付け込み強きを盗むのが処世の要なのだ。広域支配人は矢魚に視線を注ぎ、暗にこれが意味を察しろと促している。白亜堂公司に対する反感は、蚩尤の紋章にある強欲さではなく、空に浮かぶ饕餮号の高慢さにこそあった。

組織の威を借る人であればこそ、高みから弱者を圧迫しようと自覚的に選択する。彼が化石魚を携えて来たのは、僕を喜ばせるためではない。漁場をいつでも荒らすことができるという示威だった。道理の通じない相手であれば、それも方法の一つだろうが、僕や館主に対する態度ではない。

「……東洋のことわざに、羽虫にも魂が宿るとあるのを忘れないでください」

「ええ、肝に銘じておきましょう」

結局、僕は矢魚の化石を受け取った。話すだけ話してみます。そう言った僕を、広域支配人は手下に対する視線で見詰めるのだった。

「期待しているよ」

「するだけ無駄ですね」

最大限の皮肉を込めた言葉も、広域支配人の厚顔には通用せず、彼は得意げに僕の両肩に手を置くと部屋から出ていった。僕も笑顔で見送ったが、黒い自動車が悪意の届かないところへ去るのを確認した後、テーブルを力に任せて叩きつけた。アルコールは黙ってその様子を眺めていたが、テーブルから転がり落ちた化石魚を拾い上げる。矢魚は二束三文の値打ちしかなく、白亜堂会社の胸の内が嫌でも分かる仕組みになっていた。

平穏に暮らしている者の家に土足で上がり、自らの都合で他人の密やかな楽しみまで奪おうとするのは、盗賊の所行と同じだ。

だが、感情を昂ぶらせたのは誤りだった。僕はアルコールに頭を下げた。

「ごめん、アルコール。驚いただろう？」

「私のことは気になさらないでください」

矢魚の化石を撫でながら、アルコールは台所へと歩く。水だけでは気持ちを静められないでしょう、と呟いて、簡易珈琲の用意をした。心を持たない少女人形が、僕に気を遣うのがありがたく、同時に気恥ずかしい。椅子に腰掛けてアルコールを待ちながら、心が波立たないように努めた。

僕を餌に、館主を釣りたいという意図を、化石魚から読み取った。

矢魚はそういう魚だからだ。

「珈琲にシナモンは」

「あれは苦手だね」

「どうぞ、お召し上がりください」

鼻を刺激する香ばしさに、僕は微笑んだ。耐えられない熱さの珈琲を我慢して啜るのが好みで、朝の一時はこうでありたいと呟いた。アルコールが嬉しげに視線を送る。僕はそのことに気付き

、「どうした、アルコール」

と尋ねた。

「いえ、御主人様が化石の魚にどのような名前を付けられるのかと思って」

「アルコール……」

今度は咎める口調で名前を言う。媚のみを知るアルコールは、気を許すとすぐに媚態を晒そうとした。お前は憂鬱の種だ。白亜堂会社の有無を言わさぬ力は耐え難いが、無垢がもたらす歯痒さにも困惑してしまう。首を横に振った僕に、少女人形は意味を把握しているのかしていないのか、上目遣いをしたままだ。

僕は化石魚を握り締めた。

「こいつの名前は『ロケット』にしよう」

「ロケット？」

「知らないのか？」

「はい」

僕は広域支配人から貰った化石魚を、窓から天に向かって投げ捨てた。太陽を射抜けと思ったけれども、惜しい、矢魚は熱に焼かれたイカロスのように放物線を描き、地上へ墜落していった。硝子玉の目で僕の行為を見ていたアルコールは、何も言わずに視線を窓からの景色に移していく

。小さな声で歌う、その仕草が物憂げで。存在は哀しみを背負うものだが人形ならば尚更だということ、人類は古代から物語にしてきたというわけだ。

時計の針は十時を過ぎようとしていた。

「少し、のんびりしすぎたかな」

「いつも通りに思いますが」

昨日は白亜堂会社の訪問という思いがけないことがあり、その道理を無視した言動に僕の気分は大いに害された。アルコールの注いだ珈琲も一時の気休めだ。矢魚の化石を投げ捨てた後、僕は酒を飲みたくて駅前の穴倉酒場「ロミ」へと出掛けたのだった。ロミはパリ風の、階段を降りていく形式の酒場だが、ブランデーではなくジンを出すから集落の人々に親しまれていた。ジンは安価な蒸留酒だ。西暦の昔から「銅貨一枚で酔える。二枚なら泥酔する」と言われていた。

日中に酒を飲ませてくれるのは、集落ではロミくらいなものだった。閑散とした店内で、僕は酒と書き物をしながら過ごした。暇な連中は浜辺や丘で見えもしない飛行船を、一目見ようとしているらしい。ジンをテーブルに置いたバーテンに、飛行船など落ちてしまえと呟いた。

僕が白羊歯の集合住宅に戻ったのは、とにかく夜も遅くにだ。

だから目覚めるのにも手間取った。朝はライ麦パンとチーズを食べた。アルコールも珈琲の入れ方が随分上達したのだが、そのために昨日のジンがもたらす嘔吐感が癒されて、予定よりも長く寛いでしまった。

「そろそろ行こうか」

汗ばんだシャツを着替え、帽子を被る。

「お前は喪服の他は着ないのか？」

「この服が気に入っています。他の服はあまり好きではありません」

「そうか、変なこだわりだ。アルコール」

「はい」

手を携えて階段を下りた。行き先はもちろん起源種博物館だ。

「夜海を飛んだ飛行船は、ギリシャ空軍がキプロス島侵攻の際に、兵員の大規模輸送を行うために開発したものらしい。西暦の頃の話だよ。装甲板に覆われた硬式飛行船で、テッサリアの山岳地帯に隠されていたものが、大投棄時代を潜り抜けて、羊飼いの子供が偶然それを見つけたんだ」

「私には良く分かりません」

「アルコールと似ていると思う。お前も、岩礁の洞窟で人知れず眠っていたのを、僕が発見したのだから」

日傘を差したアルコールが恥ずかしげに俯く。

今日も乾いた暑さが土を照らしていた。

僕とアルコールはピクニックの気分で白羊歯の集合住宅を後にしたけれども、それは白亜堂会社の依頼を果たすためだった。館主に俗な話をするのは気が引ける。それでも、広域支配人の顔は



二度と見たくなくても、約束は約束、依頼を受けたのであれば、仕事は仕事だ。

起源種博物館は昨日と同じく静かに佇み、シリンダー式の認証機にトークンを投じると優しく迎え入れてくれた。トークンとして利用しているのは、西の合衆国が長距離通信のために発行したニッケルのコインだ。表にはコーラ社のロゴが、裏には地球が刻印されている。トークンはそれ自体珍しいものではなく、浜辺や本棚の裏、露天商の小箱の中などに転がっているが、これがないと起源種博物館との商売はできない。

面倒だ、と一度抗議したことがあるけれども、仕組みだから仕方ないというのが返事だった。

門に掲げられた『花の大路に鳥は舞い降り……』の一節を口遊む。昔の桂冠詩人によるソネットで、この後は確か『風薫る世に月は欠けまじ』と続く。それから、いつものように草食恐竜の肋骨アーチから碑文回廊に出た。無人の空間を流れる微かな水音がアルコールには聞こえるようだ。少女人形は「全ては水から生まれ、水に還ります」と言い、僕は「言葉が最初にあり、言葉が最後まで残る」と言った。

不思議そうに見詰めるアルコールに、

「どちらも正しい気がする」

と微笑む。

博物館には相変わらず人気がなく、展示内容も数年前からのままだ。このようなことで経営が成り立つのだろうか。館主と現在政府の関係は知らないけれども、心配になる。針金のような立像彫刻が並ぶ階段が回廊の先にあり、展示室へと繋がった。広い館内で一人だけを捜すとなると、気の遠くなる時間が必要になりそうだ。

歌花の座は碑文回廊からキュビズム壁画の広場まで、本当に鑑賞すれば一日では足りないくらいだが、歩くのは慣れている。それに今はアルコールという強い味方がいた。睡蓮の水甕に視線を注ぐ少女人形が、僕の求めに応じて『立方ラタ』へと通じる道を指差す。

アルコールの勘の鋭さは、僕などより余程研ぎ澄まされているようだ。

「確率は四十三パーセントです」

「らしくない台詞だ」

「機械を真似てみました」

無邪気な笑顔を見せたアルコールの後ろを追う。

展示通路の大階段の途中から、硝子天窗の渡り廊下に入った。黒い石床にはノアの洪水神話が彫刻されている。僕にはヘブライ文字は読めないが、所々の図柄から神話の内容を辿ることができた。オリーブの葉をくわえた鳩の図の先には、夜を模した人工庭園がある。

「待ち人、来るか」

庭園の中央にいた女性が、静かな身振りで僕らを向かい入れた。

立方ラタ、そこは博物館にあって最も特異な場所だった。命と名の収蔵庫でありながら、この庭園には息吹を感じさせるものが何一つない。ラタとは世を睥睨する仏陀の車輪、石切場のような庭に埋め込まれているのは六十個からなるテレビジョン、その画面は不規則に脈絡のない映像を映しては消していた。北極圏の流水、都市の交通、ゴビ砂漠の蜃気楼、珊瑚礁と熱帯魚、そして僕の姿。

「これで飛行船が見られるのでは」

「さてね、映ってはいないようだ」

「現在政府があなたをないがしろにしているからですか？」

「子は親を、人は神を、科学は哲学をないがしろにしてきた。不思議と、この件に関しては何も感じていないんだ。それよりも君との会話が楽しみで、アップルパイと氷水を用意して待っていた」

彼女は真鍮製の小さな円卓にそれらを置いて、僕とアルコールを歓迎した。館主の出す菓子はとても美味しいが、どこで調達しているのだろうか。案外、手作りではないかと僕は睨んでいるけれども。

「予知ですか？」

「そうだね。虫の知らせだよ。私は暇だし、何度も言うようだが君と話すのは楽しい」

「囚人みたいです」

何気ない言葉に、食器を並べていた館主の手が一瞬止まる。

「私は籠女かもしれない」

自嘲する彼女の顔は黒髪に隠れていた。

だけど、その姿に影よりも色濃い闇を感じ、僕の視線は固定されたままだ。秀麗な眉目が歪むわけでもなく、心情は押し量れない。それなのに何一つ不備のない境遇には、ピンボールの俵ならなさがあるようだ。

縦横無尽に動きながら箱だけに限定された銀の玉。

「アルコールは君の役に立っているかい？」

館主はことあるごとに尋ね、頷くと、嬉しそうに表情を緩めた。

彼女はアルコールに自分を仮託しているのかもしれない。画面の蝶を追う少女人形を、ベンチに腰掛けて見守る。館主がどうして今の地位にいるのか、どこで生まれ、何を学び、どのような思想哲学を持っているのか、誰も僕も知らなかった。尊ばれているのに謎多い存在。僕には、彼女がそういう役割を演じていることに飽いているようにしか見えない。

館主は水筒を傾けて、僕にライムの香りのする氷水を振る舞った。

「アルコールは良い娘です。僕には不釣り合いなくらい」

「そうか」

複数のテレビが極西ユーラシアの巨大死都を映し出す。

自らの国に中性子爆弾を使うのは、大投棄時代に最も流行した「投棄行為」だった。景観を損なうことなく放射能で汚し、聖地として崇める。当然、巡礼も流行った。沈黙の都市へ行った者は例外なく命を「投棄」することになったが、あの時代では美德とされた。

他者を殺す刃によって、自らの命をも捨てるのは人の不条理があればこそ。喪失は素晴らしい。そういう夢に僕らはいて、醒めつつはあるが未だ浸ったままだ。

君は良くやっているよ、と館主が慰める。

「僕は捨てすぎました」

「知っている。私も色々なものを捨ててきたから」

我が子を遺棄した母親を褒め称える時代のありように、僕は口を閉ざして、これ以上の回顧を拒否した。アップルパイの甘みが記憶の苦澁を中和させるのを待って、

「今日は、なぜ僕が来たのかも、あなたは御存知なはずだ」

と話題を変えた。

「ようやく本題に入るようだね」

「白亜堂会社の広域支配人が、あなたと会いたいそうです。理由は、あえて話す必要もないでしょう」

「公を司る彼らだ。さぞ高みに立った物言いをしてくれたのだろうね。そういうものさ。西暦の劇作家は上手い言い回しをしている。下種な盗賊ほど手前勝手に聖書を引用する、と」

白亜堂会社と起源種博物館の齟齬が、館主をして辛辣な言い方をさせる。ただ、それは大義名分を得た上での演技で、実際は限られた人間以外には誰に対しても冷淡だった。ほら、僕が出向いても無駄だったでしょう、と今この場で広域支配人を笑ってやりたくなる。

しかし、館主は少し思案するように目を閉じると、

「会うことにしよう」

と呟いた。

僕は慌てた。

「僕が広域支配人に依頼されたのは会談の申し込みだけで、その成否までは与り知らないことです。だから言いますが、彼と会うのは賢明とは思えません」

「私は愚かか？」

「そうとまでは……」

白亜堂会社の汚さは銅貨五枚の日当で肉体労働に従事させることから瞭然だが、現在政府の意向だとか、ありもしない権威を背景に無理を通そうとする姿勢には心底うんざりさせられる。起源種博物館と館主にとっては何一つ益のない申し出。それを受けようとする真意が解らなかったが、彼女は心配する僕の眼差しを見詰め返すばかりだ。

広域支配人とやらの、強者の理屈が紙屑よりも簡単に破られると教えればよいのだろう。アルコールに人の理を伝えるよりも簡単だ。少女人形はテレビが映す皇帝ペンギンに興味を示していた。それを指差し、虫にとって蠅螂は脅威だが、我ら人にとっては踏み潰す対象でしかない、と言いつつ。

「それに、君の顔を潰したくはない」

「ありがとうございます」

「うん？ 私が君のことを気にかけると、今気付いたかのようだね」

円卓に両肘を載せて、館主は微笑んだ。烏肌が立つほど美しい。

「僕はいつもあなたを敬っていますよ」

立法ラタのテレビ画面が春の景色に変わっていった。もう季節は夏なのに、視界が春も盛りというのは居心地悪い。テレビは手が届くのに、手に入らないから面白い、と館主は楽しげだった。千年前の恋愛劇が今この時にも再現されるのは、擬似に擬似を上重ねる鑑賞以上に、身を焦がすことなど経験できないからなのだ。

僕はもう一度、館主は囚われているのではないか、と思い、それから過去のことが脳裏に蘇った。

たとえば、夢や、記憶、もっと大切な、何か。

「昔のことは、まだ思い出せますか？」

「もう、ほとんど忘れてしまったよ」

「そうですか。僕はまだ覚えています。時々、嫌になるくらい」

溜息を吐く仕草が様になっていると、館主に指摘され顔を赤らめた。

「カフェで水煙草を蒸かすのは良い趣味と言えるけれども」と館主は言った。「パロ・トロームの主人はどこでフレーバーの知識を得たのだろうね。物書きや知識人が出入りする店に縁があるとも思えないが」

「彼は昔、船乗りだったのです。船乗りは海では紙巻煙草を、陸では水煙草を愛すると」

「なるほど、それで得心いったよ。トルコ式の水煙草を用意しているのが、いかにも変だったからね」

外の世界に興味はあるようだ。

アイスクリーム商の話もあって、僕は少し安心した。

「たまには博物館の外に出たらどうですか？ 付き合いますよ」

「すまない」

館主は申し訳なさそうに呟いた。自らを「籠女」になぞらえる彼女は、この博物館で何を務めとしているのだろう。館主が来る前の十年間は無人であったし、ここに居続ける理由もないように思えるのだが。

僕は心を見抜かれないために長椅子から立ち上がった。壁に穿たれた丸窓の一つから、青空に覆われた丘が夏風に草揺れているのを眺めた。舟などを数えていたアルコールが、テレビジョンよりも清々しいですね、と口にする。立方ラタには命あるものを排除しているから退屈なのだ、と館主が呟く。アルコールは人形だった。自然と生き物に興味を抱くのは、自らにないものを求めてのことかもしれない。

私はどこにいるのだろうか、と館主は確かに呟いた。

キリストの祈祷工場ではミサと称する乱痴気騒ぎで日が暮れて、煙草を蒸かす拝火教徒は地下酒場で金がなくても哲学談義。館主は肩を竦めた。記憶の糸を手繰ってみても、ガラクタしか取り出せない。その表情は諦めに染められていて、背広姿に良く似合う。

「でも、面白い詩文ですね」

「これは君から教えてもらったものだよ」

唐突に、館主の言葉が僕を振り向かせた。

「.....覚えていません」

「君も、言うほど記憶力が良いわけではないのかな。万智と讃えられる者の限界がこれだから、誰でも同じだろうけれども。まあ、いい。白亜堂公司是君に化石魚を与えたのだろう。捨てるなんて勿体ないことせずに、私に売ればそれなりの値段を付けてやったものを」

館主は広域支配人の置き土産だった矢魚の化石について、僕がそれを捨てたのをつぶさに観察していたようだ。立方ラタのテレビが僕を映している。プライバシーについて、館主に一言言っ

てやりたい気持ちになったが、彼女の娯楽を責めるのは無意味だとも思った。

結局、僕も館主の視線を感じた上で動いているのだ。

「今からでも、探せば落ちているかも」

「施しで得た金より、高貴に餓えることを僕は選択します」

「人から貰った物を投げ捨てるなんて、感心しない」

その言葉には、時代に対する侮蔑の情が入り混じっていた。

「時々は、僕も投棄主義者に。でも、親愛なる人には譲渡したいと」

「良いものかな？」

「それは難しい。価値は人それぞれでしょう」

僕は館主にオルニトミムスの顎骨を手渡す。今日、立方ラタで食べたアップルパイを百とすれば、こちらは一くらいの価値しかなさそうだが、彼女は両手で顎骨を包むと一言「ありがとう」と呟いた。

その小さな嘆息は消えてしまう。アルコールを連れて出た後、起源種博物館を振り返り泡のような感謝の言葉を反芻した。

日傘を差す喪服の少女に微笑みかけ、

「あそこは良い場所だ」

と言う。

「館主様は優しいですね」

「僕とは違うだろう」

畦道には夏草がまばらで、白い花々が舞い散り、目と季節感を楽しませてくれる。日傘の影を凝視したアルコールは、円周率計算を繰り返しているようだった。

そして、おもむろに僕へ視線を移す。

「違います」

僕はハッとしたけれども、それは単に個体差を答えただけのようだ。人形の言葉を解釈しても仕方ないだろうに、僕は軽い腹立ちを隠したくて日傘の後ろに下がる。

古寂びた家の建ち並ぶ通りでは、僕ら二人の姿を見掛けた人々が声を掛けてきた。その一人一人に挨拶をする少女人形に、自分も見習うべきだった。アルコールは丁寧な受け答えをするし、物憂げな眼差しと喪服を身に纏っていても。媚びることしか知らないから、周囲に融け込むのも早いのだろう、例えそうだとしても。

そういえば、ヨナはもう仕事を終えて家に帰っているかもしれない。

「アルコール」

「はい、何でしょうか」

人前で御主人様と言わせないように心を砕いたが、その成果はあった。

「お前は夕食の用意をするんだ」

「魚料理がいいですか？ それと温野菜のスープが？」

「そうだな。温野菜のスープにしようか」

恭しくお辞儀をして帰宅するアルコールを見送り、僕はヨナの家に足を進めた。発掘現場から帰る途中の男たちは、角打ち酒場でサイコロ遊びに興じたり、新聞の見出しを解説したりと忙しそ

うだ。流通とインクの乾き具合の関係で、新聞は丘に二日遅れで配達される。それでも酒の肴には丁度良いというわけで、当たり障りのない主張を、事情通の秘密情報に見せかけるために使われた。

僕も新聞配達夫の自転車に視線を送り、「密輸団」という見出しの単語を読み取る。そこでシチリアの密輸団はピストルの代わりにバナナを運ぶ、という話を思い出した。バナナ、というのは裏社会の隠語ではなく、南洋の島で栽培される黄色い果物だ。ブーメランのように反っているが、狩猟には使われず、主に病人への見舞いとして贈与される。ピストルは当局に捕まれば縛り首だが、バナナだったら説教だけで済むし、旧態依然とした流通と不親切な関税は密輸バナナに相応しくない利益を生むのだ。

バナナの皮を八つに剥いて、海賊ごっこのフェンシング。かつては誰もが口遊んだギター弾きの名曲を、節を外して歌っていると、寂れた街角も呼吸の量だけ華やかになるようだ。所々、臍に灯る街灯を頼り、集落の外れに辿り着く。

ヨナは僕が来ることを知っていたのだろうか、家の前で立っていた。

「僕らは似ていると思わないか？」

「さあ、どうだろうね。正反対だと思っていたけれども」

肩を竦めた僕にヨナは微笑んだ。

彼の母親はもう眠っていた。健康を心配したけれども、そういうことではなく、昔の人は日暮れと共に横になるらしい。二人で近くのベンチに腰掛け、ヨナはポケットから紙煙草を取り出した。

最近吸っているんだ、とヨナが言い訳をする。紫煙を肺に溜めて眼を細める姿に、労働に疲れた男の影が覆い被さる。僕は彼に化石貝を渡そうとした。フェニキア銅の価値しかないが、それでも生活に苦しむ人間にとっては癒しになるだろう。

「受け取れないよ」

「ヨナ」

「この程度の関係なのか？」彼の言葉は僕の心に突き立った。広域支配人のことを思い、化石貝をポケットに戻す。「それよりも、話は聞いているよ。可愛いお客さんがいるそうじゃないか」

空の星々を見上げつつ、ヨナが呟いた。

「アルコールの？」

「良い名前じゃないか。君に親戚がいるとはね」

家族は大切だし、良いものだ。母親想いのヨナは、僕に「家族」の共通項ができたことを喜んでいた。

その彼にアルコールの正体を明かせば、どういう顔になるだろうか。煙草を蒸かす彼のどこを見ればいいかわからないまま、姪としてのアルコールの物語を話した。沿岸の新都市で貿易商を営んでいた弟が死に、唯一の肉親である僕が引き取ったという馴染みの内容。もう何度もしていたので口が覚えていたけれども、虚偽に恥ずかしさが強まり空気を深く吸い込んだ。

紙巻き煙草の香りに心が落ち着く。

そうじゃない、と僕は告白した。

「アルコールは、自動人形だ」

「そう」

返事が素っ気ない。自動人形なんだ、もう一度言うと、驚いたよとヨナが微笑む。彼は彼なりに、僕を考えてくれていた。

館主の気紛れが君に向けられるのは、喜劇か悲劇か。真相の半分を言い当てられてしまったのは、僕も苦笑するしかない。人に対する見方を引き算していかないのが彼の素晴らしさだった。血が家族の必要条件ではないと、言われて気付く。アルコールが余興で、さらに煩わしくあったとしても、今では日々を表す字画の一つだ。

僕はどうしてしまったのだろう。

今のエルビンは表情が豊かで、以前とは違うようだ。アンモナイト礁の魚、浜辺に沈む二枚貝のように、心を凝り固まらせていた。墓銘碑に生年月日しか記されない男、かつてはそうだった。アルコールの世話を焼いている今は、誰の目からも呼吸を確認できるのかもしれない。

それは素直な驚きを僕にもたらした。

差し出された紙煙草を口にする。咽奥に通る涼しさが、水煙草に慣れた僕には渋い。

「昔、僕は史家を目差していた。あの頃は未来に純粋な希望を抱いていた。過去を識れば、未来に役立てる、そう信じていたんだ。馬鹿馬鹿しい」

「エルビン」

「僕の思惑なんて、煙みたいなものだ。移ろい薄れて消えてしまう」

大投棄時代で終わった僕は、目を閉じ、口をつむぎ、耳を塞いだ。まどろみの風が吹く土地は死亡ごっこに適していたから。柔らかく否定される。夢や希望がなくなったとしても尊敬に値するとヨナは呟いたが、その意味は計り知れない。

僕などは、君の足下にも及ばないのに。

「自分を卑下するなよ。エルビン。飛び魚を鳥と見なす漁師や、小教区信者と枢機卿を区別できない教会関係者はたぶんいないぜ」

「僕は、ヨナが羨ましいとずっと思っていた」

「ああ、意外に疲れるよ」

「観てれば分かるさ」

僕らは意思を疎通し、夜の密かな楽しみとして、新たな約束の再確認をした。創作に関する限り友人は邪魔者でしかない、と一世紀前の映画監督は恨み言を残したが、創作以外では慈雨のようだ。慈雨は枯れた大地を潤し、地下に眠る種を芽生えさせる。ヨナの存在は一桁の足し算だった。間違えることもなく、安心して回答できる、気分はそれと同一だ。

親友は慈雨であり、足し算であり、親友は親友だ。

まだ話したいという申し出を快諾して、僕とヨナは目的もなく歩いた。無目的に疲れると、人のより少ない飲み屋を探すことにした。塩の丘で中毒性の吐き気を提供してくれるのは、噴水近くの『ポーポー』と『地下寺院』、それに『ロミ』。しかし蒸留酒を注文して金を払うのは、今夜のテーマに沿わないと思った。そのための方法を熟知していたので、ヨナを閉店間際の薬屋に誘う。

薬屋とは缶詰工場との遣り取りがあって、

「来たか」

と一言言うと、僕らを店内に通した。

「薬屋にも良い物があると聞いたんでね。一人じゃないけど、構わないかな」

「母親想いのヨナなら特別だ」

レジスターの下に隠した薬用リキュールが振る舞われる。遠慮するなと薬屋がグラスに並々と注いでいった。芹科アニスの香油に甘草を加えた蒸留酒も珍しく、酔いはワルツの足運びで忍び寄る。「俺、お前」の関係であれば、薬屋は愛想が良かった。そこで僕は裸の女についての興味深い仮説を論じ、薬屋の主人はそれを医学的に否定してみせ、ヨナの得意なトイレを巡る笑い話で盛り上がる。

白羊歯の集合住宅に着いたのは、十二時も過ぎた頃だ。

アルコールの出迎えを期待していたけれど、部屋には誰一人いなかった。テーブルには温野菜のスープが置いてあったから、迷子になったわけではないようだ。

また、月夜の舞踏を楽しんでいるのだろうか？

リキュールで強かに酩酊していたので思考も長くは続かなかった。とりあえずシャツのボタンを外し、アルコールが作った温野菜のスープを食べることにした。最初の内は、料理に石鹸や絵の具、それにチチュムーとかを入れていたが、今は安心していられる。人が食べる食べられないの区別よりも、僕が好きな料理を教えることで難問を一つ解決したのだ。

温野菜のスープにはカボチャ、タラ、山菜、豆が入っていた。家庭料理にしては豊富すぎないか、と味わいながら不思議に思ったが、つまりこういうことなのだろう。部屋にスープの材料がなかったので、アルコールは他の部屋を回ってこれらを仕入れた……と。

そういえば、食料品店で下の階に住む男がタラを買っていたな。

「部屋……こんなに広かったか？」

僕はスープを食べ終わると、皿を洗い、化石魚の部屋に入った。アンモナイト礁で手に入れた化石は貝殻なら六十一種、魚類なら三十八種、それらが全て僕一人の心の海にいる。

海に潜る儀式のため、床に置いた肺魚の化石の背中を慈しむ。トルム、それが丸々した化石魚に与えた名だった。魚でありながら陸地を恐れない肺魚には、昔から「線を越える」ための呪力が備わるとされてきた。生死、善悪、今昔、夢現、部屋に花散る架空の海が、求めに従い変容するを待ち続ける。

化石魚に話しかける。かつて日課としていたように。僕は毛布にくるまり海洋を漂うことにつ



いて考えた。水死体になりたいのかもしれない。死んだら海に流してもらえるように、各方面へお願いしておこう。魚のエサになるのもいいし、海底で眠り続けるのも素晴らしい。

そういうことを考えていたからなのか。

次の日、僕は水死体を見た。

朝、浜辺に打ち上げられていたのは、白亜堂会社の広域支配人だった。

死体の第一発見者は発掘現場に向かう男たちだ。発掘現場へは浜辺近くの道を通らなければならない。水死体は年に何度か上がるので珍しくないのだが、折り目正しい服装の死体は別だった。不埒者が金目の品を得ようとして、死体が白亜堂会社の関係者だと気付いたらしい。

襟元の蚩尤の印章も身元の確認には役立つが、身を護るまでには至らなかったのか。

そういう経緯をヨナから聞いた。

「会社の社用車が崖下から見付かっている。死体に負けず劣らずグチャグチャだ」

「自動車も空に飛ばそうとしたのかな」

「エルビン……」

「冗談だよ。小説だと、こういう場面では、まず不謹慎な冗談を言って場を和ますだろ？」

僕とアルコールは散歩を楽しんでいた。浜辺の死体に遭遇したのは偶然で、騒ぎを見掛けたアルコールが僕の制止も聞かずに行ったのだ。あの男は嫌いだったが、死体を見たいとまでは思わない。彼の肉体は半分が無残にも失われていて、色を失った顔は恐怖でさらに醜く歪んでいた。

何をしているのでしょうか。アルコールの疑問に僕は答えた。たぶん途方に暮れているのだろう。

生活圏に海があると、腐臭にも慣れてしまう。

ただ、気になるのは……

「エルビン、これはどう思う？」

ヨナが問い掛けてきた。

皆の困惑は「広域支配人が死んでいる」ことよりむしろ「広域支配人の死体がここにある」ことに原因があるようだ。塩の丘をあの男が訪れているという情報を、誰も得ていなかった。それは右往左往する三下の現場監督を見ても明らかだ。彼の目的は塩の丘にはなく、白亜堂公司にしても秘密裏に進めたい事案だったに違いない。

塩の丘に白亜堂会社の広域支配人が来ていた、というのは極めて限られた人物しか知らないことだった。おそらく三下の現場監督には知らされていなかったのだろう、それは右往左往する姿を見ていれば分かることだ。

僕と、アルコール、そして館主くらいか。

起源種博物館での館主を思い出す。強者の理屈が紙屑よりも簡単に破られる。確かに運命は誰にとっても平等で、非情だった。これほどの地位と高級服に飾られた人間が、無惨にも死体となって皆の晒し者になるのだから。

「夜中に車を運転していて崖から転落、辛くも海へと逃れたが、鮫に襲われた。そんなところだろうな」

「この海に鮫はいないよ」

「知らないのか？ はぐれた鮫ほど凶暴なんだ」

アルコールは死体に興味がないのか、海の方ばかり見詰めている。

「喪中」のアルコールを前に、死体をそのまましておくのは不見識だ、ということで毛布が被せられた。烏羽日傘の少女が死体を見て気を失う、そういう心配をしてくれた皆の気遣いがあった。僕はアルコールが死体を弄ぼうとするのではと戦々恐々だったからだ。

僕の横に控えるアルコールに、ヨナは始め自分の家族に対するように、次に物珍しい置時計を見るような目をした。少女人形の話は僕から教わっていたが、好奇の念がより勝ったみたいだ。

「君が、アルコールだね。エルビンから君のことは良く伺っているよ」

「はい。エルビンの姪のアルコールです」

ヨナは僕を見て微笑んだ。

「いや、君のことはもっと詳しく知っているんだ」

「そうですか。御主人様との約束で、私は人前では姪として振る舞うようにしているのです。宜しければ、もう一度自己紹介させてください。御主人様の忠実な僕、自動人形のアルコールです」

「ヨナだ。日雇い労働者、エルビンの友人、それだけ知っていれば十分かな」

「母親想い」

「それもあった」

アルコールの手袋に包まれた指先に触れる。

「生きていないとは思えないほど精巧だね。あの館主の趣味がどういうものか、俺にも少し分かったような気がするな」

「背德的だろうか？」

「さあ、難しいことは分からないよ」

そもそも背くような徳があるのか。美談なんてラジオが垂れ流す政府公認のものしか知らないし、その逆は新聞の紙面では収まりきれないくらいだ。ヨナが呈した疑問に、死体なんて埋めるか焼くかエサにするかの三通りしか使い道がないのに、と付け足す。ようやく現場に到着した白亜堂公司の関係者が広域支配人を運び去っていくのを、白々とした視線で見送った。

罰当たりな行為は控えるべきだ、と誰かが呟く。冗談かと思ったが、どうやら本気のようなのだ。考古学者は呪われた職業だが、殉職率が軍人に及ばないのは、死者の祟りというものが機関銃掃射や焼夷弾爆撃よりも効き目が薄いからなのに。

現実を直視すれば、人は生き物のルールに従い、呪いより空腹を避けようとする。

パロ・トロームの主人が海岸の缶詰工場を買い取ろうと考えている、そのような話をヨナがした。あそこのオイルサーディンは素朴な味わいで、経営難から無人の廃工場になった今でも懐かしむ者がいる。採算が見込めないだろう、と僕などは思うけれども、道楽だから構わないとパロ・トロームの主人は吹聴しているようだ。見かけによらず大胆なことだ……と言おうとしたところで、僕はアルコールの姿に気が付いた。僕らの話に飽いたのか、波打ち際を一人目に映る鳥の名を歌いながら歩いている。

「何をしているんだろうな？」

「僕に訊くな」

ヨナは大きな声で呼びかけた。

「巨人さんを探しているんです！」

と、アルコールが応える。首を傾げたヨナは、僕のほうを向いて、それから塩の丘の伝説を閃いた。

「巨人って、あの巨人か？」

「目が良いと、今でも巨人が見えるって教えた」

「嘘だろ？」

「嘘だ」

軽く僕の肩を叩く。ヨナは楽しそうだった。波打ち際のアルコールに、巨人がこちらに手を振っている、と告げる。

「本当ですか?!」

アルコールの声が弾んでいた。

まずい。このまま一日中でも巨人探しをしそうな雰囲気だ。

僕はアルコールの手を引いて、浜辺からどこかに行くことにした。白亜堂公司の人間がちらほら増えているし、死体もすでにないので、ここにも仕方がない。それに僕の頭には起源種博物館があった。館主には、僕のために容れてくれた会談が流れたと、きちんと報告しておかなければならないだろう。

その上で、また再び白亜堂公司が来れば今度こそ断る。

Aと言われればBと返すよりも簡単だ。何を言われようと否定文を返せばよいのだから。

石造りの家々は太陽に照らされて焦げ付き、破碎タイルを塗り固めた屋根は輝くばかりで、アルコールは日傘を目深に差した。枯れた噴水の広場から起源種博物館への緩やかな上り坂を歩く。汽車が見えた。二両編成の機関車は、塩の丘に規則上停車し、誰も乗せず、誰も降ろさず北へと去った。

「どこへ行くのでしょうか？」

「針葉樹林帯を経て、海沿いの新都市を転々とするんだよ。海塩の生産地とタラの漁港を巡るのが、あの汽車の役目なんだ」

かつて塩の丘はイワシ漁の拠点だったが、北方のニシマダラやニシンの塩漬け肉が流入することで衰退した。大投棄を乗り越えた産業も、経済原理には太刀打ちできない。オリーブ油に漬けたイワシの缶詰を懐かしむ声は、今も海沿いを歩くと聞こえてくるけれども、食材にも「格」があり、イワシよりもタラやニシンが喜ばれた。

「昔の人はね、南で塩を作って北に運び、北で獲ったタラを塩漬けにして南に送ったんだよ」

「どうしてそのようなことを？」

「食べるためさ。塩とタラの関係、と言えば婚約を意味した」

僕は言い終わった後で、アルコールにそういうことを話しても仕方ないか、と溜息を吐いた。婚約だなんて愚かすぎる。

だが、アルコールは、

「私たちも、婚約できたら……素敵」

と呟いた。

「え？」

「あら、博物館は閉まっているみたいですね」

日傘をクルクル回しながら、アルコールが鍍鉄の格子扉に手を添えた。僕は訳知り顔になって、これを使わないと開かない仕組みになっているんだ、とシリンダー式の認証機にトークンを入れてみたが、反応がない。

二度三度と繰り返してみても結果は同じだったので、アルコールと視線を交わし、照れ隠しに頭を掻いた。博物館が休みとなると館主に会うことはできない。つまり、広域支配人の死を彼女に伝えられないのだ。

しかし、博物館が休みとは珍しい。

自動制御で万事が整う起源種博物館は、館主の暇そうな姿を見るまでもなく、管理運営に手が掛からない。館主の存在がなくても、博物館は博物館の機能を果たすのだ。だから今まで、入館者が一人もいない日はあっても、博物館の格子扉が閉じられるということはなかった。

これはどういうことだろう、僕は地面に手を伸ばした。

「轍の跡……いや、自動車のタイヤ痕か」

自動車が凹みに嵌り、無理に抜け出た痕跡だった。

塩の丘で誰が自動車に乗るような人間がいるのか？

答えは、いた。

そいつは今、死体置き場で横になっているはずだ。自動車は崖の下に沈んでいる。砂利道と言っても踏み固められているから容易に痕を辿ることはできないが、推測に基づく方程式は心地よく回答を導き出した。館主と広域支配人が昨日の夜に会っていた可能性は、高い。少なくとも広域支配人は博物館の前まで来ていたようだ。

そして一方は閉じ籠もり、一方は死んだ。

からころという氷水の音を楽しんでいた館主は、今日のことも計算していたのかもしれないが、そうだとしたら恐れ入る。僕は葬祭神殿を模した建物を見詰めた。アルコールも、起源種博物館も、足下の影も死を色濃くして、生を謳歌する夏の太陽が飲み込まれてしまいそうだ。風が吹いて、汗が滲み、僕は水が飲みたくなった。

「今日はもう帰ろうか、アルコール」

「そうですね。私も日陰が恋しいです」

日傘で微笑みを隠すアルコールの仕草は、とても美しく可憐なものだった。

そう言えば、アルコールは昨夜どこにいたのだろう。問い質そうとして、問い質すのは止めた。気紛れというよりも、面倒だった。別の言葉に直せば、事情を話す機会は幾らでも、事情を聞く機会もまた同じ、ということになる。積極的になるのは明日の三時以降でも十分だ、僕はアルコールに同意を求め、彼女も頷いてくれたので気を楽しんで来た道に戻った。

白羊歯の集合住宅に戻ると、僕はまず井戸水を飲んで、シャツに滲んだ水分を補給した。

部屋では安らぎの表情を浮かべたアルコールが東洋茶の用意をしている。起源種博物館の館主が珈琲ばかり飲んでいる僕の健康を案じて、こういうものを届けたりしていたのだ。一人暮らしだと手間の掛かることは避けるから、今まで戸棚の肥やしになっていたけれども、アルコールが来て

からは家のことにも彩りが出てきた。

いつか起源種博物館で振る舞われたような、手順を踏まえた東洋茶の楽しみ方はできないものの、熱い飲み物で暑さを凌ぐのは心地よさそうだ。目分量なので味が濃いかもしれませんが、と自信なさげなアルコールに、僕は味の細かいところに疎くてね、と囁く。

咽を降る熱い茶に息を吐いた。

「丁度良いよ」

「はい。アルコールは嬉しいです」

憂いを基調にした造形が、顎の動き一つで変化するのは魔法のようだ。表情の和らぐアルコールの硝子目は、薄影の行き届く室内にあって鈍色の輝きを秘めていた。

今日は人らしいじゃないか。

喪服の紐が解けて肩が露わになる。少女人形は目を閉じて僕に全てを任せるように、足を伸ばした。蒸したタオルで身体を拭く。容易く手折れてしまうものを扱うのは苦手だ。ありえない肌の手触りと肩の曲線には、いつも感嘆してしまう。

西の海に消えた巨人を探すアルコールを、もっと自由に見守ってあげてもよかった。暖かな風が髪を揺らし、浜辺に足跡をつけていくのを一日中楽しむのも、悪くない選択肢だったと思い直す。海は僕とアルコールの数少ない接点だった。

海を空想する僕と、海に魅せられた少女人形。

「生活にはもう慣れたようだね」

「今も海に行きたいです」

「それじゃあ、化石漁に出ようか。まだ駕籠網を上げるのには早いけれども、舟遊びの気分で」

「ええ、エルビン」

不意に力が抜けて、僕は倒れた。

「アル……コル？」

床に置いた洗面器が転がり、床に水が広がる。半裸のアルコールが指先で僕の頬に触れたけれども、泥酔状態のように視野が歪み、感情が興奮の極みに達した直後、急降下して、そのまま意識が途切れた。

許してね、エルビン。

誰かが耳元で囁く。浮沈を繰り返す意識は、これが人為的なものと悟らせた。何よりも台所の床に転がる見慣れない小瓶が、東洋茶に盛られた薬の証拠だった。

耳に届く風音を邪魔するように、アルコールの唇が触れる。

海に、と呟きが残された。

烏羽が雨のように降り注ぎ、一つの場所へと集合していく。漆黒の翼片が染みのように世界を覆い、柔らかな大地が白く美しいものを生み出した。蔓草のように両腕を絡め、笑みを浮かべる少女、それはアルコールではなかった。

お前は誰だ、と問い掛ける。

これは夢の泡沫、と女は答えた。

バラバラに崩れていく形は言葉にし難い。そのまま沈まされた睡魔の淵から身体が起き上がると、辺りは暗く、時計は午前一時を指していた。薬のせいで足下が覚束ないが、それよりも何

が起こったのかを理解するのが先だった。

アルコールの用意した東洋茶を飲み、アルコールの身体を蒸しタオルで拭いていて……そのまま意識を失ったのだ。途切れ途切れの意識を辿り、台所に転がっていた小瓶を拾う。瓶に印された薬の名称は、奇妙な綴りで意味を得ることはできなかったけれども、向精神薬であることは間違いないさそうだ。意識を失うまでの状態から、バルビツール系の睡眠導入剤ではないかと推測した。

このようなものを誰がアルコールに与えたのだろう。

「畜生、バラバラ……にしてやるぞ！」

いや、ちょっと待て。

「今日はもう寝よう……」

そうじゃない、そうじゃないんだ。アルコールを探さないと。覚醒したといっても、感情は薬の影響にあって、どうにか安定を得ようと僕は部屋を出た。今が真夜中で助かった。誰かが僕を見れば、錯乱状態にある姿にすぐ取り押さえてもらうから。

ほとんど転がりながら井戸まで辿り着くと、水を大量に飲み、胃が空になるまで嘔吐した。古典的な方法だが、効果があるのだろうか。息を吸い、もう一度水を飲んだ。今日は水を飲んでばかりだな、と呟き、自然と込み上げてくる笑みを放置したまま思考力だけは取り戻そうとした。

簡単な計算式を解く。歴史の年号を呟いた。

大丈夫、それほど酷くない。

「まずは、まずは……何をするかを考える。考えるんだ。考えろ」

アルコールは、どこに行ったのだろうか。僕は灯りの漏れる窓を見上げた。

書き置きなどを残しているなら、まず目覚めたときに気付いていたはずだ。部屋には誰もいなかったし、床に伏せたとき洗面器の水を零してしまったが、それらの後始末はしっかりとされていた。昼を嫌い夜を好むアルコールが、部屋を抜け出して彷徨うのは以前から知っていたが、どこを彷徨っているのかは実のところ確かではない。

だが、見当なら。アルコールが自発的に行きうる場所といえば、起源種博物館と海のどちらかしかなかった。起源種博物館はアルコールが再び生を得た場所だし、館主は媚びることを教えた。ただ、より可能性が高いのは海のほうだろう。海を好む性質や、浜辺でのこと、それに意識を失う直前に届いた言葉。

「海に」と。

岐路に立った僕は海への道を選んだ。纏れた足取りも一マイルを過ぎれば駆けることも可能になった。道を仄かに照らす街灯を頼りに、夜海の浜辺を目差す。あそこには僕が化石漁に使う小舟が隠してあったから、必ずそれに乗って海に出ようとするはずだ。

知識のない人形が夜海に出てどうする。月は海面を照らして輝くけれども、潮風は舟をよろめかせ、波間に隠れた岩礁は容易く船底を突き破るのだ。化石漁を共にしたアルコールは海の優しい一面しか知らない。白亜堂会社の広域支配人が死んだように、そうだ、人形は命あるものが死ぬことを知らないから、危険も理解できない。

でも、死ぬことはなくても、壊れることはあるんだぞ。

「アルコール！」

僕は大きな声を出して呼びかけた。

草むらを駆け下りて、浜辺に辿り着いた。僕の思考は抑鬱状態を呼び起こす薬のせいで、ろくでもない想像しか浮かんでこなかった。アルコールの人工知能は海沿いの洞窟にあって、その宗教的な遺構の中で永く眠りについていて。化石漁に出たとき、あの少女人形は諸島に伝わる古い歌を歌っていた。今にして思えば、それらは自然崇拜と関係があり……傀儡は巫女的機能を帯びる。

茂みに隠した小舟は予想通りなくなっていた。部屋の窓から外を眺め、海に還りたいと呟くアルコールを、僕は忘れたわけではなかった。ただ、気にしなかつただけだ。もっと気にしていれば、今こうして走り回ることもなかった。

浜辺に残る小舟を引き摺った痕を追い、アルコールの名を呼びながら波打ち際まで着いた。

舟が浮かんでいる。月に照らされた夜海の波は風音よりも繊細で、黒鉄色の水面に浮かぶ小舟まで見通すことができた。

舟には誰も乗っていないようだ。もう、海に落ちてしまったのだろうか。僕は足が濡れるのも構わず舟へと歩いた。夏の海でも冷たいものは冷たいし、暖かな空気との差に鳥肌が浮かぶ。無人の舟は漂い、なす力がないように舳先が動いたが、その時、縁にしがみついた人影を見た。

それはアルコールではなかった。

「ヨナ！」

僕は訳が分からず親友の名を叫んだ。

なぜヨナが夜海にいるのか、それを考えるには余裕がなさすぎた。とにかく海水を掻き分けて、舟へと近づく。舟が沈んでいなかったのは幸運だった。ヨナの側にまで泳ぎ、身体に手を伸ばした。体温が低いけれども呼吸は保たれていて、僕の呼びかけに小さく反応する。

僕は小舟に上がると、ヨナの腕を掴み、力の限り引っ張った。

「ヨナ！ ヨナ！」

青白いヨナの顔を平手打ちする。口から水が溢れて、嘔せ返るように彼の身体が起き上がった。暴れようとする手足を押さえつけて、ヨナの名前を言いながら、もう一度殴る。

視線が合わさった。

「エル……ビン？ 何をしているんだ」

「それは僕の台詞だ！」

正気に戻ったヨナが、海を見詰める。

鮫狩りだ、と彼は呟いた。広域支配人の死体が半分喰われていたことから、それが鮫の仕業であると考えた人間が他にもいたのだ。ヨナはもちろん僕と冗談を言い合っていたから、本気にはしていなかったけれども、発掘現場の仲間の誘いを断ることもなかった。

断れば、皆も鮫狩りに出ようとはしなかつただろうに、と後悔の声色が咽から漏れた。ヨナは塩の丘の誰もが認める好青年だったから、鮫狩りを組んだ人々も頼りにしていたのだ。

そして、鮫は本当にいた。

漁師の出した舟に乗って、ヨナを含めた四人が網で鮫を捕らえようとしたが、逆襲されて海に投げ出された。ヨナたちは大破した舟の板材に捕まっていたけれども、鮫は力尽きた者から順番に飲み込んでいった。鮫は一滴の血を何マイルも先から嗅ぎつけて、列状に並ぶ二千本の歯の餌

食にしようとする。

岸へと逃げようとした者も、運命は一緒だった。平時であれば無謀な行為だと判断できたはずだ。しかし、恐慌状態に陥ると何が生死を別つのが分からなくなる。鮫は獰猛だが、人のような大型生物を好んで食べるわけではない。そのことを知っていたヨナは、板材に捕まり体力の温存に努めた。鮫が襲うのは一に傷を負った者、そして第二に抵抗する力を失った者だ。

「俺は、鮫が満腹になって狩りを止めるのを祈ったよ」

それは正しかった。最後まで生き残ったヨナを、鮫は食べようとしなかったからだ。ヨナは僕の舟に捕まり命を長らえ、僕がヨナを救出し……

「だとすると誰が僕の舟を？」

僕は周囲を見渡した。

アルコールなのか。アルコールがヨナの危機を察知し、僕に先駆けて助けようとした。

だとすると薬を盛る意味が分からない。

「……分からないだらけだ」

「ごめん、エルビン」

「何を言ってるんだ」僕はヨナに微笑んでみせた。「どちらかが窮地に陥ったら、お互いがお互いを助ける。忘れたってことはないだろ。当然じゃないか」

「じゃあ、ありがとう」

それでいい、僕は照れ隠しの舌打ちをして、夜海の波間を伺った。

千々に別れた月影の反射が水面を漂うものを照らしていた。櫂を手にする。鮫だ、とヨナは呟いた。七フィートを超える巨体が、プカプカと腹を上を浮かんでいる。

死んでいるようだ。

気を付けろ、とヨナが呟く。舟を漕ぎ、僕は鮫の間近に寄った。

「ああ……何だこれは」

頭部が無惨に抉れている。途方もなく強い力が、一撃で鮫を葬ったようだ。海には鮫だけでなく、そのようなものが潜んでいるのだろうか。

その時、ヨナが立ち上がった。

「歌が聞こえる……」

「歌？」

「沖のほうだ」

彼が指差す方向を僕も見つめた。

諸島の神歌が、細波の調べに運ばれて、舟に寄せ返る。夜海のことなら潮流から波頭のフジツボまで把握している僕とヨナが、そこにあるはずがない巨岩と、巨岩の上で歌うアルコールを見詰めていた。仄暗い海底から突然現れたとしか思えない。だが、少女人形の歌声は古から続く韻の響きを伴い、不自然な位相を正規なものへと変えようとしている。

「巨人」

月が照らす巨岩の正体を、僕は正確に言い表した。



現実を虫喰う白昼夢、白羊齒の集合住宅から海を眺めると、それと対面する。

あれは何だ。見慣れた景色に異物が一つ混じるだけで、認識力が大きく歪む。八月の海の紺碧が、巨大な塊を実像化させたようだ。巨大な塊は海洋の波を引き摺っている。塩の丘が「それ」を見たのは何世紀ぶりだろう、「それ」の話は良く知っていた。修道士ヴァルゴと丘の巨人、夜海の西に消えた巨人、塩の丘の最初の住人だ。

巨人は、アルコルの歌が呼び寄せた。

そのアルコルが消えて一週間が経つ。

『今日も一日が始まります。今と今と今に感謝を』

齒磨きをしつつ現在政府のラジオ放送を聴いていたのに、巨人の話題には一言も触れなかった。巨人は半刻に一步陸を目差し、もう浜辺近くまで到達しているのに。これはつまり、ラジオが政府の傘下にあることを強固に示している。いつの時代も都合の悪い情報は伏せられるものだ。

しかし、今日と今日と今日に感謝すれば、この現状を肯定することにならないか。

齒磨き粉と一緒にどうでもいい思考を洗面台に吐き捨て、簡易珈琲を飲んだ。際立たせた苦みに気を引き締め、ラジオから流れるポピュラー音楽を鼻で歌う。夜海から来る巨人に、僕の生活が乱されることはなかった。カーテンを閉めて心を化石魚に近付けなければいい。それよりも、アルコルの消えた穴を、僕は未だに埋められないでいた。

自墮落な自分が恥ずかしい。

僕は激変した状況からひたすら背を向けていた。ラジオが伝えなくても、巨人の噂は口から口へ、または新聞が面白可笑しく書き立てたことで、物見遊山のよそ者が四方から集まってきたのだ。騒々しさを嫌って、僕は自室での籠城を続けていたが、水が尽きれば井戸へ汲みに行かなければならないし、パンがなければ食料品店まで出掛けなくてはならない。

良い機会だから外に出てみようか。

僕は髪を整えると、久しぶりに外の空気を吸った。

外の空気は煙たく感じられた。現在政府の軍団やジャーナリスト、観光客らが集落を占領しているからだ。軒下に机を置いてチェスをしている老人が、これほど集落が賑やかになったのは十字軍以来だ、と話していたが、それは「見てきたような嘘」に属するものだろう。

歩行時の水飛沫と蒸気が巨人を白く霞ませていた。

光に照らされた巨人は青銅の甲冑に身を固めている。丸く、隙間なく表された文様、塔と見紛う高さ、巨人は世界に唯一人という存在感だ。長く伸びた両腕を海に垂らし、全体的に比較して不釣り合いなほど小さな足で前進する。それでも歩幅は二十ヤードを超えていた。

集落の人々は巨人の姿を「壺」と呼んだ。それほど個性的な外見なのだ。壺形甲冑に頭部はなく、胴体に両目と口を連想させる穴が開いている。甲冑の材質は緑青色から青銅のように見えるが、未知の合金である可能性が高い。そして装甲厚は二十インチを下回ることはないだろう。地響きを起こす強力と、圧倒する巨体は僕の見立てを簡単に超えてしまうような気がした。

全身の文様は、碑文回廊の韻音文字に瓜二つだ。

巨人が目差しているのも、起源種博物館だった。

「アルコルは、もういないのか」

夜海で巨人が現れたとき、アルコルの姿は神寄せの歌と共にいた。それが今は目視できないし

、声も聞こえてこない。少女人形のことには心配でならないけれども、海ではなく、もっと別のところにいると思う。

アルコールは賢いから、政府軍の攻撃に巻き込まれるようなことはないはずだ。

「謎の巨大生物が出現」の報を受けて現在政府は軍隊を塩の丘に派遣したが、上陸を阻止しようとした戦車三十両、自走砲六門による一斉攻撃は巨人に少しの損傷も与えることはできなかった。戦車の放つ砲弾は巨人の甲冑にことごとく命中したが、身動き一つさせられない。

だが、巨人のほうも攻撃をしてこないのです、一週間が経過して状況は睨み合いのままだ。

「千八百年ぶりに、巨人が家に帰るか」

今まさに上陸しようとする巨人を見詰めた。新聞は一進一退の攻防と報じているが、ここで観戦している限りにおいては長閑なものだ。最初の一斉攻撃が失敗に終わった後、軍が無駄な攻撃を繰り返そうとしなかったのは、無駄を無駄と知っている証拠だ。つまり、今まで巨人が一步進めば、軍が一步下がるという「攻防」が続いているわけだが。

起源種博物館はあれ以来門を閉じたままだった。大投棄時代を乗り越えた博物館も、巨人の帰還を防ぐことはできないだろう、というのが塩の丘の住人の一致した意見だった。隊によって外出禁止令が出されているけれども、誰も命令などに従おうとしない。要するに巨人の進行方向にいなければいいのだろう、と口々に言い合って、カフェや酒場で談笑に興じたり賭を立案したりと好き勝手に動いていた。

「百年続いた大投棄時代でも、これほどの危機が塩の丘に訪れたことはなかった」

「大投棄時代は百年も続いていないだろう？」

僕は食料品店の扉を開けた。

「せいぜい二十年くらいだ」

「珍しい客が来たな」

白亜堂会社の発掘も中止になっているので、店内は男たちで溢れるほどだ。僕が新聞と生ハムを買いに訪れると、丁度、塩の丘の将来についてが話し合われているところだった。寂れた博物館よりも巨人の住処のほうが、地域発展に寄与するのではないかと薬屋が主張するのを何人かが頷く。世界的に見て、巨人というものは非常に珍しいものだから、カルタゴ銀貨を払ってでも一目見たいと望む人間は幾らでもいるはずだ。いや、それよりも巨人と意思疎通を図ることが先決だろう、と今度はアイスクリーム売りが言った。

僕はそういう議論には参加せず、新聞とパンを手に入れた。

「ジュークボックスを動かそうか」

「巨人が好きな曲はあるかな」

「よせよせ、誘き寄せられて、俺の店が踏み潰されたらどうする」

主人の言葉に一同が笑うのに合わせて、僕も笑顔を作り、店から出た。

新聞の見出しには、現在政府が巨人対策のために白亜堂会社の共同歩調を取ることが報じられていた。広域支配人が塩の丘で死に、その直後に巨人が出現したのだ。白亜堂公司にとっても見逃せないものがあるのだろう。

広場では待機中の兵士が煙草を蒸かしている。上陸目前の巨人を前にしても、為す術がないと

いう面持ちだが、それも仕方ないだろう。他方、屋台式カフェの主人は笑いが止まらない様子だった。今日一日だけで一ヶ月分の売り上げだ、と彼が言うのを耳にして、集落の住人が巨人に好意的なものも領けた。塩の丘に巨人が戻ってどうなるかは誰にも分からないし、事態が大きくなりすぎて見守るしかないというのが正直なところだろうか。

今までで最も強い地鳴りがした。

「どうやら上陸したようだな」

話しかけられて振り向く。屋台式カフェの椅子に、パロ・トロームの店主が腰掛けていた。

「店は大丈夫ですか？」

「幸い、奴が歩いている方向とずれているからな。今は自主避難というやつだ」

「それは良かった。騒ぎが落ち着いたら、また魚を食べに行きますよ」

「ただ缶詰工場は駄目だろう。岩塩とオリーブ油で作る夜海のオイルサーディンも、完全になくなってしまふ。悲しいよ、ああいうのが破壊されるのは」

パロ・トロームの主人はそれだけ言うと、何杯目かの酒を呷って黙ってしまった。僕は彼に別れを告げて、自室に帰ることにした。丘を見ると巨人の上陸に興奮して、見物人らが大騒ぎしている。巨人が海から上がったときの力で、岸は高潮と塩水の雨が降っているようだ。

お前など嫌いだ、と僕は呟いた。館主は最後まで博物館と運命を共にするだろう。

助けることはできないか。起源種博物館が巨人の居城になるのは、史家になりたかった身として納得できないのはもちろん、館主を守るのは僕の使命のように感じられた。確かに彼女は困った性格の持ち主だったが、僕が助けなければ誰が助けるというのか。館主はアルコールの生みの親だし、僕にとって博物館の消滅はパロ・トロームの主人が缶詰工場を失うのと同じだった。

どうする。

ヨナに相談してみようか。

死んだ広域支配人が「困ったときはお互い様でしょう」と言ったのを思い出した。こういうときに知恵と力を貸してくれるのはヨナしかいない。白羊歯の集合住宅に戻り、買ったばかりのパンを一口食べると、僕は準備を始めた。背負い袋に思いついたものを入れていく。コンパス、ロープ、手袋、水筒、新聞紙をパンで包む、そして肺魚のトルム。何があるか分からないので、持っていったほうがいいだろう。

簡易珈琲を一口飲む。

その時、僕は机に置かれた封筒を見つけた。食料品店へ出掛けたときに、誰かが部屋に入ったようだ。僕は何か盗まれていないか周囲を確認しながら、封筒の中身を取り出す。

入っていたのは白亜堂会社の広域支配人が持つ蚩尤のカフスボタンだ。

カフスボタンは留め金が外されていた。何か意味があるとするなら、これは博物館に入るためのトークンだと閃く。館主か、アルコールか、もしくは白亜堂公司かが僕を博物館に向かわせようとしている。

やはりヨナに協力を求めよう。

彼が住む通信局は集落の外れにあるが、そこまでは片道で三十分ほどだ。白羊歯の集合住宅を出ると、青銅の壺形甲冑を鎧う巨人の姿が目に飛び込んできた。まるで文明以前の人々が信仰していた神のようだ。文様の鈍く光を走らせる様子に、僕は目を凝らしたが、巨人の歩行が衝撃

となって屋根の破碎タイルを落下させていたので、僕はヨナの通信局へと急ぐことにした。

ヨナは母親想いだ。母親想いの人間が、今この状況で、母の元を離れて僕を助けるだろうか。少しでも考えれば、そういう疑問に突き当たるのだが、巨人の視界下にいると思考するのも馬鹿らしかった。巨人見物の特別列車が止め処なく駅を出入りするのを横目に、誰もいない発掘現場を通過して、僕は通信局の前まで来た。

ヨナはいるだろうか。家は静かで、誰かがいる気配はない。

いや、音はしていた。肌に響く重低音が鉄塔から聞こえる。通信局は廃棄されて久しく、壊れているとばかり思っていたので、作動しているのは意外だった。

「ヨナ」

僕は名前を呼びながら、扉をノックしようとした。

鍵はしていないようだ。返事がないから、どこかに行ってるのかもしれない。例えば食料品店か、酒場か、もしかしたら巨人見物。母親は大丈夫なのだろうか。ノブに手を掛けた僕は一度躊躇ったが、家の中でヨナを待ってもいいだろうと思い、扉を開けた。

彼の家に入るのは今日が初めてだ。

部屋はヨナらしく質素なものだったが、通信局の機械が壁を作っていた。鉄塔の重低音と同じく、機械類も動いているようだ。生活感が薄く、床には通信文書が散らばっている。鉄塔が受信した信号を、機械が文字の形に直して紙に印刷しているのだ。文書には外国の文字が記されていて、僕には内容を読むことはできなかったけれども、馴染みのある文字列を見付けた。

これは「白亜堂公司」からの通信文だ。

発掘の現場責任者が僕を毛嫌いする理由、それはヨナと親友だからだと聞いた。変な理由だと思ったが、ヨナが公司側の人間だとしたら。視線を逸らすと、二階へ通じる階段があった。集落の人間はみな、ヨナの人柄と話だけで「母親想い」と言うが、誰が実際にヨナの母親と会っただろうか。

「いますか？ ヨナの友人です」

足を痛めた病気がちの母親に、僕は階段の下から声を掛けてみた。

「いたら返事を……」

返事はなかった。

僕は意を決して二階に上がった。通信局は他の家と大差なく、一階も二階も一部屋だけだ。階段を上がり、部屋の扉を開けてみると、そこは物置部屋のようだった。積み重なった木箱と粗末な寝具、机が置かれている。窓の近くには安楽椅子。

誰もいない。いたという痕跡も。

「ヨナ……君は何者なんだ？」

僕は呟いた。

母親想いで、白パンを母親に食べさせたいと願っていた好青年が、砂のように崩れていく。通信局に住んでいるヨナは、誰も知らないヨナだった。

「エルビンの親友だ」

背後から、答えが返ってきた。

振り返ると、そこにヨナが佇んでいた。左手には缶詰や野菜を入れた食料品店の紙袋、右手に

拳銃を握り、ばつの悪そうな表情を浮かべている。僕は微笑んだ。巨人が来たから、ヨナは大事な母親を親類縁者のいる新都市に預けたんだろ、と。彼は驚いたように僕を見詰め、それから笑った。

「そういう言い訳もあるよな」

「その場を取り繕おうとは考えなかったのか？」

「帰ってみたら誰かがいるんで気が動転していたよ」

「なあ、どういうことなんだ」

ヨナは拳銃をしまうと、階段を降りていった。僕も後に続く。紙袋を机に置いて、機械が受信した書類の幾つかに目を通しながら、僕のために紅茶を入れてくれた。鍵を閉めなかったのは大失敗だった、とヨナが言い、良くあることだと慰める。以前、ヨナの通信局に行ったときや、夜海でヨナを助けた後に気付く機会があったのに、僕や集落のみなを騙し続けたのは凄いことだと思う。

でも、この際、秘密はなしにしてほしいと僕は言った。

「エルビン、俺は白亜堂会社の代理人なんだ。連絡係、監督者、言い方は幾らでもあるが、地域に駆け込み会社と地域住民の融和を図るのが仕事、と言えれば分かってくれるだろうか。ここの広域支配人が死んだから、今はその地位も受け継いでいるけれども」

ヨナは小箱から包み紙を取り出すと、中身を僕に見せてくれた。

白亜堂会社の蜚尤のカフスボタン。

彼は僕の目を見詰めた。

「君が来た理由は見当がついているよ。だから、俺にも手伝わせてはくれないだろうか？」

二杯目の紅茶をヨナが注ぎ、僕は爽やかな湯気を吸った。紅茶は白亜堂会社の支給品らしい。茶葉は発酵の具合によらず東洋のものが一番だ、とヨナは言う。それも一理あるだろう、僕は熱い紅茶を啜ると、溜息を吐いた。白亜堂会社の代理人は、原則的に身分を偽らなければならない。それが良心に反しているとヨナは苦しんでいたらしい。

白亜堂会社と起源種博物館の反目もそうだ。彼は博物館に対する働きかけをする立場ではなかったが、理よりも威を示したがる会社の上層部と、嫌悪感を露わにする館主や僕の板挟みになっていた。それも全てが明らかになって、重荷ではなくなかった。

もっと早く話せばよかったよ、と口にしたヨナは恥ずかしげに俯く。

白亜堂会社は巨人の存在に興味を示していて、ヨナに詳しい報告を求めている。白亜堂会社も現在政府も、起源種博物館が巨人に破壊されてしまうことを望んでいない。会社には、自然科学的な知識の宝庫である博物館を奪われたくないという思惑があるし、現在政府も巨人は不確定な状況を招くと認識しているのだ。僕は館主を助けたい、会社は博物館を守りたい、そこで両者の利害が一致した。

「対策を考えよう。エルビンには、何かあるんだろ？」

「……起源種博物館に行こうと思う」

「しかし博物館の門は閉じられている」

「ところが、ゴマの呪文が僕らにはあるのさ」

部屋に白亜堂会社のカフスボタンが置かれていたことを話した。留め金のないボタンは、トークンと同じ形をしている。シリンダー式の認証機に入れれば博物館の門は開くはず、というのが僕の考えだった。

ヨナは上手くことが運ぶか疑わしい、という表情だったが、招待されたのだから行けば何かがあるのは自明の理だ。巨人の針路に博物館があり、そこに館主がいる以上、事態を打破する可能性があるのではないかと説明した。

「名案だな」

ヨナは提案を受け入れてくれた。

集落の外れでも地響きは感じられる。実際、僕らができることは、可能性という不確かなものに賭けるしかなかった。まだ塩の丘までの距離はあるし、巨人が走るでも飛ぶでもない限り時間的な猶予はかなりあるはずだ。帽子を被ったヨナと家を出ると、起源種博物館へと向かった。

「列車に揺られて、投棄主義者も塩の丘に集まりつつあるらしい」

「投棄主義者が？」

「巨人に踏まれたがっているんだと。笑えるだろ？」

それは笑えるかもしれないが、黒いことこの上ない。

ローマ時代の哲学者セネカは自殺を自由人の最後の行為と言ったが、巨人に踏み潰されることに意義があるとは思えない。投棄主義は愚かだが、このような愚かさを賛美する風潮に、長らく世界は踊らされていた。これが終われば、何かを作ることに情熱を燃やしたい。

将来のことを語った僕に、ヨナが紙巻き煙草を僕に手渡した。それを蒸かす。紙巻き煙草は東

洋のものではなく、食料品店で売られている駱駝印のものだった。

僕には強すぎて、少し噎せ返る。

「ヨナ、これはきついよ」

「思いっきり吸い込んで、大きく吐くんだ。そうしたら楽になる」

そういう話をしながら、起源種博物館の前まで来た。

シリンダー式の認証機に蚩尤のカフスボタンを入れる。僕とヨナは顔を見合わせたが、シリンダーが正確に動く音を耳にした。定められた仕組みが作動して鑄鉄の格子扉が開く。

「やったな」

「ああ、後はもう成り行き任せだ」

強く握手をした僕とヨナに、壺形甲冑の巨人が視線を注いでいた。

知識上のどの塔よりも高く、内面を垣間見せない甲冑には不気味さが漂う。気にするな、と格子扉を潜ったヨナが言い、僕は胸の靄を払うように頷いた。アルコールの歌が海から異形の巨人を呼び寄せ、それは塩の丘を目差している。何が目的なのか、どこにいるのか、今すぐでも問い詰めたい。

でも、アルコールのことは後回しだ。起源種博物館に入った僕らを常設展示物が出迎えた。空気がいつもと違うことに、ヨナも気付いたようだ。海からの風が巨人に遮られているためか、蒸し暑い。彼は拳銃を手にしたまま、率先して僕の前を歩こうとした。

「そんなもの必要ないよ」

「分からないだろ。いや、気休めだ」

ヨナは草食恐竜の肋骨アーチを見上げながら、呟いた。僕らは竜の巢に忍び込んで財宝を盗んだ小人と変わりがない。武器は必要ないし、武器がいるような事態になっても、拳銃では役に立たないだろう。塩の丘の住人は博物館に入る機会が多いけれども、具体的にどういう建物かを知る人間はいない。彼も本質的には同じだったから、知る限りでの説明をした。

「博物館は大きい。その特徴は三つの区画に別れているということだ。僕らがいるのは『歌花の座』で、上層には『智王の座』が、地下の陵墓部分には『機械の座』がある。館主はこの内のどこかにいて、僕らを待っていると思う」

「つまり、入場料金を払って見学できたのは、博物館の一部分でしかないということか」

「頼りにしているよ、ヨナ」

彼は苦笑した。

白亜堂公司是起源種博物館について、どれだけ把握しているのだろうか。実際には無知に近い、というのがヨナの答えだった。現在政府を経由して、西暦の末期に博物館が建てられた理由や資料、それに設計図などを集めようとしたが、有益なものは見付からなかったらしい。

謎、と彼は博物館を表現した。

「どうも現在政府も起源種博物館の扱いには苦慮しているらしい。特に、今の館主が着任してからは、統制からも外れている。博物館は博物館だから、大局的な視野からしてみれば端の存在でしかないけれども、今はラジオ放送でさえ現在政府の傘下にあるのに変だと思わないか？」

「館主の性格を思えば、変でもないさ」

「君は彼女に近いからな。白亜堂公司は起源種博物館が建てられた目的に、とても強い関心を寄せている。公司は博物館を、西暦の一大事業だった遺伝子解析の情報集積地と見立ててもいる。もしくは遺伝子工学の工場とも。どうかな、俺には不思議なことが多すぎるように感じられて、上の思惑とは距離を置きたいよ。例えば碑文回廊とか」

肋骨アーチの終着点に立ち、問題の場所に視線を送る。

朝は四本、昼は二本、夜は三本で歩く動物は何か。博物館は謎掛けをする怪獣スフィンクスと同じだ。今はもう砂と化したエジプトのそれを思いつつ、回廊に足を踏み入れる。木漏れ日と反射光のモザイク、石版と韻の道が神秘の煌めきを見せていた。ヨナが手で触れると、韻が波紋のように伝わる。

生命の不確かさを内包させるために、先人は四十二の韻を創造した。

「遺伝子は専門ではないけれど、基礎詩が表しているのがそうでは？」

「遺伝情報は長大だが、これほど複雑ではないよ。デオキシリボ核酸もリボ核酸も、塩基配列は四種類しかないし。なあ、エルビン、巨人が博物館を目差す理由も、この訳の分からなさにあると思う」

「訳の分からなさ」

「ああ」

スフィンクスのようなものだ、とヨナは帽子を被り直す。お互い、同じことを考えていたようだ。

階段を上る。針金のような立像彫刻が両端に並ぶのは、視覚を困惑させる効果があり、閑散とした館内では退屈を拭うことができた。昆虫や貝類の展示室から始まる歌花の座には、十八の部屋と四の広場がある。見るべきものは多いけれども、誰もが目立つものに目を奪われている、とヨナは言った。まあ、そうだろう。

アルコールがいれば、居場所も勞せず分かるのに。舌打ちをしたが、今は時間を掛けてでも捜さなければならない。入館できて館主から出てくるという甘い期待はなかった。彼女はどこかにいて、僕がいることにも気付いた上で、見付けてもらいたがっている。

付き合いが長いからだろうか、館主の思考が僕には想像できた。

「まるで童話の世界だな。姫君を助け出す騎士なのか、僕は」

「どちらも掛け離れているぜ」

ヨナが笑う。

「笑うなよ」

「いいじゃないか。中世的だが、姫君と騎士、良い例えだと思うよ。だとすると、館主は君に特別な感情を抱いているんじゃないのか？」

「馬鹿な……」

声を低めた僕に、ヨナは笑顔を浮かべたまま肩を竦めた。

遠くからだ、お前らは恋人にしか見えない、とからかわれてしまう。皆にそう思われていたのか、という問い掛けに、何度も頷かれてしまう。館主がどういう感情を抱いているのかは知らないし、親友として以上の付き合いはない、と断言したが、声の調子は少し狂っていたように思う。



関係ない。館主が僕に好意を抱いていたとしても、今は緊急事態だ。巨人が博物館への前進を止めるのは、その場でタップダンスを踊りだす可能性よりも低い。自分を「籠女」と考えている理由はどうあれ、起源種博物館と運命を共にするのは、巨人に踏まれたがる投棄主義者と同じ程度に愚かしい。

パピルス紙や羊皮紙を硝子板で貼り合わせた展示物が、円形列石のように配置された幻獣資料展示室の先は、水甕と銀砂の休憩室になる。存在を許されないものに形を与えるのが人の特徴と、入口の説明文には記されていた。奇妙な獣を生む想像力はどこからだろうか、それを考えるだけでも面白い。起源種を巡る思索には架空の生命も含まれていた。

天使が鍵を手に竜を打ち据える図を前に、ヨナは何かを考えていたが、意を決したように向き直った。

「エルビン、二手に分かれよう」

館主を捜すのなら、手分けをしたほうが効率的だ。

でも、僕は首を横に振った。二手に分かれれば、計算上は館主に辿り着くまでの時間が短縮されるけれども、連絡の手段がない。博物館で迷子になるのは極力避けたかったし、智王の座へは一度行ったことがある。ヨナと別れるのは最後の手段にしておきたかった。

歌花の座の展示室を一通り歩き、鯨漁のキュビズム壁画の広場に出た。以前、館主が僕にして見せたように、壁画の一つに手を当てる。そこは鯨の目だ。鯨の目は丸石になっていて、ダイヤルのように廻すことができ、口の部分に隠し扉が出現した。

鯨に飲み込まれた聖人は苦勞の末に皆を救うというのが、これは意味があるのかな。歴史は繰り返す、僕はヨナに史家らしい助言を与えた。ここから先は智王の座。紙本通路を照らす裸電球の淡い光。

ヨナは口笛を吹いて、白亜堂会社がこれを知れば軍隊を差し向けるだろうな、と感嘆を漏らす。壁棚に収納された紙や書物は、無秩序に積み重ねられていて、彼は何枚かを折り畳んでポケットに入れた。これだけで給料分の働きになるという言葉でヨナを一瞥する。

「ヨナ、白亜堂会社は本当に……」

「俺が言え、もしかしたら」

冗談だと気付くまで時間が掛かったけれども、僕は安心した。ヨナが白亜堂会社の人間であっても無道なことはしないだろうし、彼なら博物館と会社の間を如才なく取り繕うはずだ。

「死体相手の発掘作業は得意でも、相手のある交渉が白亜堂会社は苦手だからな」

「でも、現在政府とは良い関係なんだろう？」

「打算だよ」

こともなく言い切ると、紙本通路の奥で昇降機を作動させる。

僕らを乗せて昇降機は黍園へと昇っていった。滑車の音が面白い。鋼材と石材の絡み合う斜線が上へと伸びて、博物館の上層に刻々と近付く。背負い袋を降ろした僕に、特に荷物を持っていないヨナが問い掛けた。

「エルビン、背負い袋に何が入っているんだ」

「大したものを持ってきていないよ。ロープ、手袋、水筒、コンパス、それと……」

「化石魚じゃないか。役に立つのか？」

「念のためだよ。ヨナだって、拳銃を持っているじゃないか」

拳銃と化石魚では比較の対象にならない。ヨナの表情はそう語っていたけれども、安心の方法は幾らでもあると納得したようだ。肺魚は水と陸の境界に住むことから、生者と死者の橋渡し役として信仰されていた。信仰されるものには幸運の御利益が期待される。トルムについての話に興味深く耳を傾けていたヨナは、僕が史家の心を持っているのに唯物論的ではないのが意外だったみたいだ。

唯物論はソ連と共に滅びた。迷信が幅を利かせる塩の丘で、しかも神話上の存在だったはずの巨人が博物館に向かって歩いている状況では、神頼みにも一定の効果があると思いたい。

昇降機が黍園に到達する。

「綺麗だ」

と、ヨナは言った。

智王の座も、歌花の座と同じだけの規模があるはずだが、僕が知っているのは黍園と館主の私室くらいだ。温度を調節する機能と、品種改良によって庭園の黍は一年中葉を生い茂らせている。蒸し暑さに帽子で顔を仰ぎながら、僕は先に進んでいった。外から眺めたときの博物館を思い浮かべた。智王の座は塔を頂点にして、幾つもの空中庭園が造られている。

館主が生活する区画と言っても、一人では持て余すほどの広さだから、実際に使用されている部屋や庭園は半数に満たないと思う。振り向くと、ヨナは黍園を流れる水で咽を潤していた。冷たそうだ。地下の奥深くから水を汲み上げて、智王の座から機械の座まで水路を巡らせているのだろう。

「不思議な女だな。ここで何を思って生活しているのやら」

「本人に尋ねるしか」

黍園の奥にあるリフトを使い、館主の私室に入る。

誰かがそこにいることを期待したけれども、館主の私室は無人だった。アルコールが囲われていた部屋は家具も調度品も僕が来たときのままだ。天鵞絨のカーテンを捲り、奥のベットに腰を下ろした。現在政府の指導部や、白亜堂会社の幹部であっても、こういう生活はできないだろう。ヨナはそう言うと、紙巻き煙草に火を点ける。

「あまり煙草は吸わないほうがいい」

「吸うためじゃないさ。空気の流れをみたいんだ」

紫煙は漂い、風景画の下に流れていった。壁は漆喰塗りだが、その部分だけ石壁が露出していて、注意深く見ると隠し扉になっているようだ。僕とヨナは顔を見合わせると、隠し扉を開けるための仕掛けを探した。机に置かれた地球儀や、引き出し、戸棚、天蓋付き寝台の下。

仕掛けは風景画の裏にあった。

石に偽装した隠し扉が開く。そこは芝生の中庭になっていた。強烈な日射しに目が眩む。

「樅の木だ」

ヨナが呟き、僕は言葉を失った。

樅の枝に紐を括り付けて、館主が首を吊っていたからだ。

立方ラタで砂漠を見詰めていた館主が、歴史の意味を尋ねた。過去を知ることと、歴史を学ぶことに違いはあるのか。自嘲的な史家の一派は歴史を学問的な装いをした物語だと考えた。東洋の優れた史書『史記列伝』には、作者の価値観に応じた個人史が記され、ヘロドトスの大著『歴史』ではペルシャ戦争でのギリシャの勝利という結末に至る、実用的な教訓が語られた。西暦の政治学者フランシス・フクヤマは主張する。資本主義的な自由民主主義がマルクスの社会主義を打倒したことによって「歴史は終わった」と。

啓蒙的なものとして歴史を考えるなら、人類は人類がしうる行いを全てした。百回、暗黒の中世が繰り返されても、いつか来た道として解釈されるだろう。行為が、結果として絶滅をもたらしても、それは単に「運が悪い」だけだった。過去の事実はこれからも増え続けるが、それはクイズの出題者の助けにしかない。

「歴史は現実存在を語るように出来ているが、科学のように本質存在へは迫れない」

「キリストの祈禱工場ではミサと称する乱痴気騒ぎで日が暮れて、煙草を蒸かす拝火教徒は地下酒場で金がなくても哲学談義」

「何だい、それは？」

「歴史について、歴史上、最も信頼のおける人物による定義ですよ」

僕の言葉に微笑む館主は、人知れず悪魔的な作業に従事する技術管理者のように思えた。

一年も前の出来事だ。

そして今、僕は走っていた。

木陰が一点に絞られた窪みのような、館主の姿。彼女が吊り下がる樅の木は風で緑葉が揺れていた。ヨナが蹴り倒された台を使い、首に巻き付いた紐を解く。重力の鮮やかな見本として、芝生に落ちた館主の身体を抱き止めた。

脱力した嫌な重さ。

腕に伝わるのは、体温のない物体としての重量だ。わずかな可能性……つまり隠し扉を発見する直前に首を吊った……に賭けたけれども、呼吸を止めた身体は呼吸を再開する力をすでに失っていた。そのときに初めて、存在の冷たさを知った。

死が、館主の時を止めている。

「なぜ」

自然に零れた言葉が一つだけ、館主の閉じた瞼を伝い、土に落ちた。挨拶もなく呼吸を止めた彼女の頭を抱き、最初に溢れ出したのは怒り、次に意味不明な笑み、そして枯れ搾るような悲しみが舞い降りた。何が自殺に値する罪になるのか、ようやく問い掛けることができたが返事がない。ヨナのほうを振り向いたけれども、返事はなかった。

全ての問いに答えが用意されているわけではないと、かつて思想家の言葉を引用したにもかかわらず、無言のままでいられると耐えきれない。僕は館主を抱き締めたまま、問い続けた。ユダヤのラビやラマ僧のように、真理には到達しなくてもいいから、このような真似をした答えを。僕が納得する答えを。

答えを。ヨナが名前を呼ぶのも聞こえない。

「なぜなんだ！」

僕は叫んだ。

「エルビン！ エルビン見ろ！」

大声を出したヨナが、僕を正気に戻すために拳銃で空を撃った。

屋根に羽を休めた海鳥が一齐に飛び立つ。僕はヨナの顔を見たが、それよりも館主の死体が抱き締めた力で壊れたことに気付いた。眼球が滑り落ち、肩から左腕が外れかけている。僕は息を飲んで彼女から離れ、ヨナは眼球を指で触った。硝子眼だ、と彼は言い、意を決したように背広のボタンを外していく。

これは……

何も言葉が出ない。

あまりに酷いものを、言い表す術がなかった。

縫合痕が胸から下腹部にかけて、幾筋も走る肌に絶句する。左手と右足は精巧な義肢だった。痩せ衰えた肉体には機能不全に陥ったときに見られる死斑が浮かび、黄色い液体が傷口に当てられたガーゼを汚していた。彼女の美しい顔も化粧と黒髪によってカモフラージュされたものだ。ヨナは冷静に、人が生きていくためのものが何もない、と言った。

「どういうことだ」

点滴と人工器官で生かされた老人みたいだ、というのが答えだったが、ヨナには館主の身体について思い当たるところがあるようだ。首を横に振って、その考えを否定しようとしたが、無理だと悟ったらしい。現在政府は元々、投棄主義者の集団だった、と彼は前置きした上で、権力層の悪魔的風習の話をした。

「……かつて現在政府では、肉体の放棄が栄達に繋がった。政府が投棄主義から距離を置くようになって、そういうのも悪い噂だと思っていたのだが」

「でも、生きていたじゃないか！」

「事情がどうあれ、死んでいるのは確かだ」

失望感がヨナの口調に表れている。館主の死は巨人よりも破壊的だ。これで白亜堂会社が起源種博物館と共同歩調を取ることがなくなったのだから。しかし、これで良かったのかもしれない。会社と博物館は水と油の関係だったから、当事者がいなくなれば、話も纏まりやすくなる。算盤を弾くのは簡単だよ、と僕は生臭い話を打ち切った。

これからは？

ヨナは紙巻き煙草を燻らせている。

埋葬しようと思う、と答えるのが精一杯だ。ヨナは良いとも悪いとも言わず、ただ頷いた。ありがとう、気を遣ってくれて。彼は名前を口にして、俯くと、ことさら白亜堂公司の手先ぶりながら、打算だと繰り返す。

「ごめん、ヨナ」

白亜堂公司と君の期待を裏切ってしまった。

館主を失った今、博物館が危機的であっても阻止したいという気持ちは薄れた。嫌いではなかったし、好きだったのかも。でも、それを伝える方法はなく、自殺を許すこともできない。

「結局、何も進展はしなかったか。だが……」

ヨナは空を見上げた。

中庭を影が覆っていることに気付いたのは、彼の視線の先にあるものを見る前だった。私室から中庭に出たときは強烈な日射しに目が眩んだのに、それがない。何か、とてつもなく巨大なものが、起源種博物館の上空にあった。最初、それが雲かと思ったけれども、白地に描かれた墨の文様に正体を掴んだ。

大型飛行船『饕餮号』。

「ここからは別行動だ」

涼しげな眼差しを飛行船に送りながら、ヨナは中庭を出ようとした。僕は引き留めようとしたけれども、白亜堂公司の人間としての役割が彼にはあるのだ。

起源種博物館が蓄積している知識を、公司は決して諦めない。巨人が割り込もうというのなら、実力で阻止するまでだ、とヨナは立場を代弁した。彼はある程度の予測を立てていて、通信局の住まいから饕餮号を呼び寄せたのだろうか。悪巧みが得意だと、敵役らしくて面白くなるだろう。そういうことをヨナは視界から消える間際に言い残した。

これで中庭に館主の死体と二人だけになった。

櫛の木の幹に横たえると、蓋をされたような空に声を漏らした。地上には巨人、空中には大型飛行船、僕は塩の丘の博物館にいるが、消えてなくなりそうな存在感だ。でも、それが本来の僕だから、これ以上の何が出来ただろう。

館主の長く伸びた黒髪に手を伸ばした。アルコールにしてあげていたから、手串に慣れている自分に気づき、生きている内にこういうことをする機会があれば、結末も随分変わったものになったと思う。館主が僕にどういう感情を持っていたか、知る術は断たれたけれども、教えてほしい。

このまま巨人を待とうか。

起源種博物館は陵墓の上だから、このまま瓦礫になっても「埋葬」になる。ヨナには悪いが、白亜堂公司の飛行船が巨人をどうにかできるとは考えていなかった。砲弾も弾き返す青銅の壺形甲冑の前では無用の長物だ。ヨナが崩壊に巻き込まれなければいいが、それ以外はどうでもよく思える。

もう一つ、心残りがあった。

「アルコール」

僕は少女人形の名前を呼んだ。

館主が博物館から出ることはないし、ヨナは白亜堂公司との関係を秘密にしていた。だとすると消去法で考えれば、僕の部屋に蚩尤のカフスポタンを置いたのはアルコールということになる。アルコールは僕に薬を飲ませ、小舟で夜海に出ると巨人を呼び寄せた。考えてみれば、様子が変わったのは公司の広域支配人が博物館へ向かった夜からだ。

館主はアルコールをどうしたかったのだろうか。彼女が少女人形に自己を仮託していたのは、立方ラタでの会話や様子の中でも気付いていたが。

アルコールはもう、アルコールではないかもしれない。

そういう思考が頭に閃いたとき、芝生に黒い穴が開いた。ベル・エポック調の鳥籠型昇降機が穴から現れる。自動制御された博物館は、主人がいなくても変わりなく機能するのだ。

鳥籠型昇降機には人が乗っていた。

いや、人形が。

「邪魔者もいなくなり、ここは二人になりましたね」

意図的に感情をなくした声が耳に届く。

「アルコール」

鳥籠の中にいる姿は、館主が言う「籠女」そのままだったが、檻が開き芝生に足を乗せた。十二条の革ベルトで身体を拘束する喪服を纏った少女人形は、いつもの憂いに満ちた視線と媚びた微笑みを浮かべていたが、僕の知らない何者でもあるようだ。

櫛の木まで歩み寄ると、アルコールは館主の顔に両手を添えた。

「可哀想な女、可哀想な女、死なないと想い人と寄り添えなかった。勇気がなかったのかしら、それとも頭が良すぎたから、たった一步が踏み出せなかったのかもかもしれません。このような身体だから、恐れたのかしら。お喋りで時間を費やし、本当に話しあうことがなかった」

アルコールは館主の唇に唇を合わせていった。赤い舌が死体の口をこじ開けて、口移しに死者の形見を奪い取る。

それはオルニトミムスの顎骨だ。

僕が館主に手渡した化石の欠片を、アルコールは舌の上で転がして飲み込む。

「このようなものを、心の支えにするほど精神は荒廃していた。御主人様、アルコールにさせていただいた恩寵を、この可哀想な女にもしてあげれば良かったのに」

「僕はお前の御主人様ではない」

少女人形は微笑んだ。

「そうでしたわ、エルビン」

「お前は何者だ？」

警戒心を露わにしてアルコールを睨む。

姿形が同じでも、僕の知らないアルコールだ。媚びしか持たないアルコールは、別の言い方をすれば、無垢だった。それが目の前にいる人形はどうだろう。魚と鳥よりも隔たりがあるように思えた。生きてるとしか見えない、情念の渦巻く瞳。

薬を盛られて、意識を失いかけたときの呼び声。

「私は、あなたの姪です」

「アルコール」

「『エルビン』が良いですか？ 私は『御主人様』が好きなのに」

殺意が一瞬にして輝き、僕はアルコールの首に手を突き出した。指で締めようとし、歯を食い縛る。

目を見開いた。人工皮膚に宿る熱が伝わり心を激しく揺さぶったのだ。アルコールの形は両手で手を掴むと、簡単に首から引き離し、薬指と中指の爪を嘗めていく。歯車で動いているくせに、悩ましさの濁りに湿らそうというのか。

館主は智王の座に相応しい人物であったが、身体は衰弱し、心は荒んでいた。起源種博物館は彼女を囲う牢獄でありながら甲冑、彼女を守る砦でありながら鎖。アルコールは館主を哀れみつつ、劣るように身体を撫でた。可哀想、可哀想と呟く、その瞳は涙に濡れているようだ。

漆黒の瞳。

博物館の君主は最終的な解決策を考案した、そう囁く。

「そんな、館主……なのか？」

違います。アルコールは首を横に振る。

「アルコールはアルコールです。館主様は血と肉と五臓をアルコールの身体に与えてくれました。不自由な身の上を嘆きながら、エルビンに愛されたいと始終口にしていましたわ。アルコールは御主人様と一緒にいて、とても幸せでしたけれど、館主様の餓えも良く分かります。館主様は幸せですか？ 館主様の目がエルビンを見詰めているのですよ。館主様は幸せですか？ 館主様は……」

「アルコール、正気に戻れ。家に帰るんだ」

僕の言葉に少女人形は妖艶な微笑みを浮かべた。それから、左右の眦から体液が染み出すのを、隠しながら跪く。その時、風を巻き込む轟音がして、上空の飛行船が移動を開始した。いよいよ壺形甲冑の巨人と飛行船『饕餮号』の戦いが始まるのだろうか。一瞬、僕は注意を空に奪われた。

アルコールの身体が覆い被さり、芝生に押し倒される。

「ここは私の城。誰にも、誰にも、誰にも渡さない……」

「アルコール、正気に戻るんだ。巨人を夜海に帰せ」

「うるさい黙れ！」

アルコールの唇が僕の唇に密着した。

鉄の味が舌に流れ込む。血液の味に、館主が自らをアルコールに与えていった方法を悟った。つまり食わせていたのだ。怖気が走る。真夜中に部屋を出ていた少女人形を、館主は博物館に誘い出して、眼球や四肢や内臓を食べさせることで、同化を果たそうとした。

それは科学と言うよりも呪術の世界だ。人肉を食べることで、魂の力を得ようとする思想が、かつて南洋の島々にはあったというが。アルコールの両目は風洞のように、光を吸い込んでいく。理性と知恵に富んだ女の眼球、それが狂気にとろけていた。本当に同化しているのかはともかく、アルコールが別のものになっているのは確かなようだ。

唇が柔らかいですね、と囁く。

「愛しくて、大好きです。エルビン、もっと早くに言うべきでした。館主様は毎夜のように怯えていました。醜い、醜いと。私は御主人様と一緒にいたい、館主様はエルビンと一緒に死にたい、私はどうすればいいのですか？ 館主様は幸せでした。ここは墓場です。ならば命の意味を知って今死にたい……」

胸元に額を押し付けていたアルコールが、僕の肩に歯を立てた。

滲み出た血を、丹念に嘗め啜る。その痛みに声を漏らした。機械の座に行きましょう。アルコールは囁いた。機械の座に、人の基礎詩があって、館主が僕を招きたがっていると。血に汚れた唇と、白く整った歯並びを見せて、少女人形は鈍く微笑んだ。

鉄筋の蜘蛛の巣を縫う。

黒金の壁に曲線を描くレールを伝い、鳥籠式昇降機は降下した。丸みを帯びた外壁が奇妙で面白い。これは原子力潜水艦の外殻壁だという。博物館には兵器や武具といったものまで收藏されているのか、という問いに、アルコールは「人のものなら全て」と答えた。高度な情報化社会と、有り余る富がこのような建物を出現させたが、館主の他は誰もその価値を見出せなかった。

甘えるように視線が首筋を噛むようだ。背負い袋に入れた肺魚を思い、僕の気持ちは昇降機と共に沈んでいった。自分の身が危うくなれば頼る場面も出てくるだろう。そのために持参しているのだから。でも、そうなる僕も白亜堂公司と同じ程度の人間になる。ヨナは歴史家ではないから許されるが、僕はどうか。

「何を考えているのですか？」

アルコール、不思議なのは君そのものだ。

「お前を殺す方法を考えていた」

「そのときは、一緒ですよ」

枝を手折るよりも簡単だと言いたげな、弾むような声に僕は苦笑する。

レールは原子力潜水艦の外殻壁から超長距離を砲撃する多葉室砲の砲身へと移った。頭上には複葉機、周囲には戦車と自走砲、これら戦争の道具に埋め尽くされているのは、いつか使う機会を考えてのことなのか。核ミサイルもありますと冗談めかして言うアルコールは、兵器と調理具の違いも理解できていなさそうだ。技術の変遷は武器の発達に注目すれば、あらかたが分かると大学で学んだが、殺人技術の向上は行き着けば結果は灰燼だ。

大投棄時代のような悪夢は賢愚の別なく起こりうるのでは。鳥籠式昇降機は化石収蔵庫へ降りていった。恐竜は自らの意志で滅びたわけではないが、恐竜が滅び、他の生物が生き延びた要因は求めることができるだろう。万物には軀があり、人は理性と叡智をして超越したとされているが、反証は裁判官を圧死させるに足る質量を持っていた。

博物館を風に吹き曝したままでいたことが、理性と叡智を軽視している証と言えるか。大投棄機も。この収蔵庫の設計者のように、人は守るべき規範から外れるのが大好きだ。狂気の沙汰、僕は収蔵庫を見て、そう思った。樹花を模した柱列が支える空間は、「森」としか表現できない幅広さと重厚感だからだ。

彫刻と化石生物の区別が難しい、と思っていると、微かな振動が砂埃を降らせた。巨人だ。その歩みがいよいよ塩の丘に差し掛かったのか。しかし、アルコールの顔を覗くと巧みに表情を隠していたが、苛立ちのを抱えているようだった。意図通りなはずなのに。そういえば白亜堂公司の飛行船はどうした。僕は不意にヨナのことが心配になる。

無事ならいいけれども。

石の大森林を昇降機で降りていくと、外国の友人を想う気持ちに似てきた。大投棄時代以前から、様々な文物が持ち込まれたのだろう。その頃は「博物館」でもなかったかもしれない。この様子を見れば、巨人も自分が住むだけの余裕がないと気付くかも、と僕はアルコールに言ったけれども、あまり良い反応は返ってこなかった。それは予想通りだ。

「博物館は化石を蒐集して、神に比するものを創造しているらしいが」

「そこまで大胆ではありません」



「じゃあ、何のために化石を蒐集しているんだ？」

「さあ、私には図りかねます」

都合の良いときだけ、少女人形は素顔を出した。

人の基礎詩に案内する、そうアルコールは言った。七の聖韻、十二の舟韻、十五の葬韻、八の龍韻、韻は四十二種類あり、文章として複雑に構築される。遺伝子が四つの塩基配列からなるとして、碑文回廊の基礎詩を見ると、情報量は単なる生物学的なもの以上だった。

起源種博物館は命名を司る。しかし、司るのは生命全てのようにも思える。

あれが北の永久凍土から掘り出された冷凍マンモスです。アルコールが収蔵庫内を一つ一つ案内していった。西暦の最盛期には恐竜やマンモスなどの絶滅種を、クローン技術で再生しようとする計画が進んでいたというが。小説なら可能でも、技術的には困難な問題が多かったようだ。

なぜ、今まで人の基礎詩がなかったのだろう。僕は根本的な疑問を、アルコールの中の館主にしてみた。少女人形は思わせぶりの表情をして、自らの名を持つものを展示するわけにはいかないから、と答える。「アルコール」という名前を与えられた人形は博物館を去り、館主は名前を持たないから博物館に居続けた。

館主の名前。

僕は知らない。名が真の意味を持つのは、命が尽き果ててからだというのに。

エルビンが墓銘碑に生年月日しか記されない男でも、それでも墓は建つ。名前があるからだ。名前がなければ、誰が館主とパロ・トロームの主人を区別するというのだろう。名と墓銘碑があれば、生命は死を超越できる。碑文回廊の基礎詩は、つまり失われた命の墓銘碑ではないのか。遺伝子情報の集積地という白亜堂公司の考えとは、真逆のものだ。

碑文回廊の石版は墓、基礎詩は墓銘碑。古代の陵墓、葬祭神殿を模した建物、化石や剥製、人の手を必要としない管理機能。館主は立方ラタが生命を排除していると言ったが、それは博物館全域に言えた。生よりも死、基本的に博物館は死を展示している。

「素晴らしい推理力ですわ」

「ありがとう」

暗闇の度合いは鳥籠式昇降機の中に居続けるほど濃く、黒くなっていき、カンブリア紀の生物と珊瑚樹の石組みが影と光の合間に見えた。地階に降りると化石は大型生物から小型の、そして原生生物へと転じていき、反比例的に機械装置は増えていった。凹凸が付けられた金属壁は、番号錠を内側から見ているようだ。

アルコールは単純に「歯車」と表現した。

「ここからが『機械の座』です」

「歯車というのは、つまり……」

表現するところの意味を察し、僕は目を円くした。十段の垂直に連なる階層の一段一段が、歯車として回転する巨大機械なのだ。智王の座まで汲み上げられた水が、ここでは枝垂れるような滝になって流れ落ち、各階層の床を濡らしている。アルコールは昇降機に備え付けられた傘を広げた。雨は太陽が隠れるから嫌いではないのですが。お前は身体が濡れるのが好きだから、とアルコールの呟きに言葉を繋げた。

昇降機の真鍮掲示板には「王国」という文字が出ている。

「カバラの世界だ」

「そのようですね。起源種博物館の設計には、多くの神秘学者が関わっていましたから。でも、こういうものは、神秘的な装いを博物館に与えるためだけのものですわ。数学であろうとも神学であろうとも還元主義的な思考は、普遍を求めようとしますが、結局は本質に迫ることなど不可能なのです」

「唯名論的じゃないか」

「だから博物館は基礎詩を書き続けるのですよ」

アルコールは屈託のない笑みを浮かべた。

物理学の究極は十次元にある輪の存在を提示したが、それはすでにユダヤ神秘主義の書『ゾハール』のセフィロト理論に記されていた。神が造る世界の頂点には「王冠」があると。本質を求める人間の思考は、無意味から意味を見出し、また無意味に戻る過程のようだ。

円は実在するどのような円も少し歪み、本当の意味での円は存在しない。点はどんなに微少な点であっても面積があり、一次元を構成する点などはない。本質は本質として、あるいは存在するかもしれないが、世界は本質的ではない個々のものから成り立っている。その思考を推し進めていけば、普遍的なものは便宜上の名前でしかなく、個々は因果と必然性によって存在することになる。

歴史の意味を巡る、館主との会話を思い出した。

「史家も普遍的なものを求めていたが、結局はそれを放棄した」

「どうしてですか？」

「さあ、歴史理論は自己否定に繋がると気付いたからかな」

博物館で館主ではなくアルコールにこの種の話をしている。白羊歯の集合住宅では他愛ない喋りばかりだったのに、中身の違いは仕草や眼差しまでも変えてしまうようだ。館主の臓腑を取り込まれたことで、黒水晶は媚びるアルコールではなく別のものに変わり果てていた。僕との生活で育んだものが、記憶としてでしか残っていないのが悲しい。

鳥籠式昇降機の終着点は、階層の最深部よりも下にあった。

自分がエアシューターの化石みたく、どこまでも降りていく。このまま地球の裏側まで行くのかもしれない、そのような気もしたが、レールは墨が溶けた色の中心で途切れていた。機械の音がなくなり、鳥籠の鉄柵が開く。空気の澱みが肺を黒くするような感覚。暗闇の覆いは目隠しをしていたけれども、ここが陵墓の玄室だと気付くのにヒントは要らなかった。

アルコールの髪が微かに揺れている。

「風？」

「空気を流しているのです。普段は人が来る場所ではないので」

「ここからは死後の世界ということか」

「はい」

「陵墓の玄室なのか？」

「かつてはそうであったと。今は、さらなる深みに通じる大穴に浮かぶ、吊り舞台です」

「穴の底には何が？」

「機械です」

「曖昧な答えだな。それで、ここが玄室でなくなったとして、目的の場所はまだまだ先なのか？」

「いえ、ここで終わりです。ここが人の墓、人の基礎詩がある場所です」

手を翳した動作に反応し、細やかな光の数々が瞬いた。プラネタリウムだ。漆黒の宇宙空間を流れる天の川が、足下から吊り舞台まで導く通路を照らしていた。闇が薄れると、今度はとてつもなく大きなものの輪郭が、心を押圧する。僕の瞳は輪郭の正体が認識できず、汗のでない不快感に下唇を噛んだ。何かがある、と呟いた言葉が零れ落ち、大穴へと吸い込まれていく。

起源種博物館は獅子の身体と女の顔を併せ持つスフィンクス。怪物の心臓に僕は立っているのかも。スフィンクスは旅人に謎掛けをし、答えられない者を食べたという。スフィンクスは博物館そのものであり、アルコールはその縮小された姿だ。館主は間違った答えによって自ら贅となり、僕と同じ運命を辿るのか。白亜堂会社の広域支配人が、浜辺に捨てられていた光景を思う。

足下に気を付けて、と少女人形が館主の口調を真似た。

「良く見えない」

「目を暗さに慣らして。あれが機械の座の中枢です」

恭しく僕に囁きかけるアルコールは、通路の先にある四本の円柱を指差した。歪んだ背骨のようだな、と暗闇に浮かぶ輪郭から思ったが、あながち間違いではないようだ。円柱は何段も積み重ねられた状態で頭上へと吸い込まれていた。通路の光に反応して、左右の円柱の表面を埋める文字が彩られる。

基礎詩、僕は呟いた。

アルコールが頷く。

「四連四十二段回転碑文板を『人の基礎詩』としたのは館主様です。元々は、地球規模の気候変動や社会経済、未来予測をするための位相幾何学機構。かつて、世界の海を支配した多国籍複合企業体によって、博物館を隠れ蓑にして建造されましたが、大投棄時代の到来以前に本来の意味を失っていました。館主様が来るまで、これは博物館の自動制御という端役に甘んじていたのです」

「四連四十二段……韻の数と同じだな」

「館主様は投棄主義を憎悪していました。花が散るのは自然の摂理でも、花を枯らすのは自然に逆らう行為だと。でも、それならばどうして館主様は自分を殺したのでしょうか。投棄主義に対する憎悪に勝る、現実への絶望が私めを狂わせる道を選ばせたのです」

悲しげな少女人形の声。

「館主は、君の中にまだいるのか？」

「館主様の情報は血と肉の味以上に、記憶されています。エルビン、私の愛おしい……」

声が音階を移動していき、低く落ち着いた物腰へと変わった。それがとてもおぞましく、僕は顔を背ける。先を急ごう、僕は言った。

回転碑文板の真下、銀砂を敷き詰めた円形舞台に辿り着いた。四柱の碑文板の境目から、想像を絶するほど巨大な歯車が垣間見える。地下のさらに深くから汲み上げた水を、上層へと供給するための歯車。水は常に流れ続け、熱を冷ます。

舞台の中央には石櫃が置かれていた。アルコルがその側に立つ。石櫃に装飾的なものではなく、悠久の時間を経て風化した、老成と古寂が表面を滑らかにしているようでもあった。四本の回転碑文板が『人の基礎詩』なら、これは『人の枢』なのだろうか。史家として、石櫃の中身を知りたいと思ったが、見たいとまでは思わない。

「懐かしいですね」

アルコルは蓋に手を伸ばし、開けるとも撫でるともつかない仕草を見せた。海岸の洞窟でアルコルの枢を見つけた御主人様は、どうして開くことができたのでしょうか。魔法から目覚めなければ、まどろみは今も続いていたのに。「Quo Vadis Domine」少女人形は囁いた。笑顔を浮かべ「星降る海へ」と今一度呟く。

「右へ廻せば滅び、左へ廻せば始まりへ」

「それは、どういう意味だ」

智王の座で館主が戯れで言った言葉を、アルコルが繰り返す。

僕は周囲を見た。玄室を縦貫する四柱は「回転碑文板」と名付けられていながら、回転していなかったからだ。今現在は停止している回転碑文板が回転すればどうなるのだろう。右へ廻せば滅び、左へ廻せば始まりへ。それが答えだったとして、どういう意味か。

「その選択権が僕にあると？」

アルコルは頷き、口を開く。その時、爆ぜた音が僕の身体を前へと突き飛ばした。

「エルビン！」

少女人形の叫びが、通路を転がった僕に向けられる。撃たれた。その感覚だけがあり、僕は背後に立つ男を睨んだ。拳銃を握る男、こうなるとは少しだけ考えてもいた。鳥籠式昇降機で降りていたときの振動、あれは巨人ではなく、無理矢理機械の座に降りようとした彼の仕業だったのか。

ヨナ、どうして。

たぶんヨナは、その疑問には答えてくれないだろう。

舞台に敷かれた砂を握り、息を途切れ途切れに吐いていく。

結局、何が幸運をもたらすかは神の差配によることを、僕は思い知らされた。通路に伏せた僕は、銃撃を受けながらも奇跡的に無傷であることに気付いたのだ。弾丸は背負い袋に当たり、そこには新聞紙に包まれたパンと……肺魚の化石があった。背中感触だとトルムは碎けてしまったようだ。これを側に置いていた理由を思えば、物悲しい。

ヨナは拳銃を構え、今度はアルコールに狙いを定めていた。僕は倒れたままの状態、白亜堂公司の手先を睨む。彼は今の銃撃で、僕が瀕死の重傷を負ったと思っているに違いない。だから不死身の勇者を気取るのは得策ではなかった。倒れたままでいよう、森を歩いていて灰色熊と出会ったときのように。

だが、アルコールが僕の身体を揺すった。

「エルビン！ エルビン！」

半狂乱になって名前を連呼している。アルコールは僕をここまで慕っていたのだろうか。館主に身に宿す少女人形は、狂気に囚われた怪物だったが、取り乱した姿には驚いた。僕はヨナではなくアルコールに殺されるのではないかと思うほど。

慟哭が、アルコールの咽から絞り出される。

「お、お、おのれ……」

ヨナは、拳銃を構えたまま身動きできなかった。少女人形の殺意が両眼から迸っているのを直視したからだ。喪服は禍々しい悪魔の衣装、まるで地獄の魔犬みたいだと思う。

「動くな！ 動けばエルビンを撃つ！」

「おのれ、白亜堂公司の下郎……！」

「生きてるか、死んでいるか分からんが、とにかく撃つ。人形のお前を撃つよりも効果がありそうだからな。こんなことをするのは俺の主義に反するが、躊躇はないぞ」

崖を転がり落ちる岩のように、破局が迫った。ヨナは僕よりも白亜堂公司のほうを優先したのだろうか。質問してみたけれども、勘違いするなと笑われる気がした。俺はいつでも白亜堂公司を優先する、そう答えるはずだ。どちらかが危機に陥ったとき、どちらかが助ける。そういう約束もヨナは友情と一緒に捨てた目をしている。

彼の変わり様は悪夢めいていた。「母親想い」と言われていたのに母親はいなくて、銅貨五枚の日当で働く肉体労働者の正体が白亜堂公司の人間であったとしても、ヨナがとても良い奴だというのは動かしようのない事実だったからだ。

「ヨナ、痛い……痛いよ」

「すまない。君の墓は白亜堂公司に言って立派なものを造ってもらうよ。突然の死で、墓銘碑には、生年月日くらいしか記せないと思うけれども」

「ヨナ……」

「エルビン、あの男は友情を逆手にとって、あなたを利用し尽くしたのよ。あの手は鍬を握るためではなくて、銃を撃つため。舌は信頼を得るためではなくて、詐欺を働くためだわ。汚らわしい汚らわしい小悪党、騙されないで、目が覚めた？ エルビンを救うのは私だけ……」

「囀るな人形が！」

激したヨナがアルコールを撃った。僕に覆い被さる身体が軋む。

「お前に……お前に何が分かる。お前に何が分かる！ 大投棄によって家と家族を失い、たった一人母と生きるためなら手段を選ばなかった。毒と放射能で病に冒された母を、白亜堂会社のサナトリウムで療養させるためなら何でもしてやるさ。殺せと言われれば殺す！ 奪えと言われれば奪う！ 寝惚けた理屈で俺を量るな！」

母、確かに彼は母と言った。

「ヨナ……君には、母がいるのか？」

「当たり前だ。俺をそこの人形と一緒にしてくれるな」

瞼の奥から込み上げてくるものがあり、滴るのは涙だった。それは銃を握る感情が矢印のように伝わった証だ。やはり、ヨナはヨナだった。白亜堂会社のヨナではない、母親想いのヨナ。何も成すことなく死ぬ男ではない、本当の男の声を聞いたからだ。

アルコールが調律の乱れたピアノを連打するような声を荒げた。小刻みに震える拳銃の、軽すぎる引き金に指を絡めるヨナは、罪の重さと命の軽さに翻弄される小さな舟だ。陵墓の玄室が満たす死の闇は、喪服の少女人形に枝垂れる柳葉として、殺し殺される命の業を鑑賞しているのだろうか。搾り出された声にはアルコールの憎悪が澱む。

「エルビンは……」

立ち上がると、膝を折り、通路に身体を倒した。

「エルビンは私が殺すのよ……エルビンと一緒に死ぬことだけを夢見てた。この世界は落ち穂拾いも終わった北風の季節、何も栄えるものがない白黒テレビだわ。もうどうでもいい、エルビンと一緒に人の基礎詩も書き終えよう……でも、でも……でも！ エルビンは私が殺す！ エルビンを殺して、エルビンを殺して私も死ぬ、みんな、みんな死んで死んで死んで……エルビンは私が殺すのよ！」

アルコールがヨナに襲いかかった。

弾丸が少女人形の腹部と頭に命中する。館主の赤い鮮血が飛び散ったが、黒いレース編みの手袋をした右腕がヨナの首に伸びた。雄叫びを上げてアルコールを引き剥がそうとするが、十二条の革ベルトが外れて絡みつく。二人は通路に横転して、拳銃が穴へと落下していった。

お前も喰えばエルビンは私を愛するようになるかも、と囁きかけている。

「ヨナ！」

僕は立ち上がった。

もう瀕死の真似事をしている状況ではない。アルコールの手がヨナの口と喉に押し当てられている。恋人同士のじゃれあいなら問題ないが、今の少女人形は蠅螂を踏み潰すように人を殺してしまうだろう。アルコールの名を叫んだが、殺し合いは止まりそうになかったので、舌打ちをして僕は走った。

そしてアルコールを止めるために、背中から黒水晶を抜く。僕がこれを発見したのは間違いだったかもしれない。殺人衝動に突き動かされていた人形の背後を取るのは簡単だった。アルコールの笑顔、下手くそな料理、ようやく飲めるようになった簡易珈琲のことを思いながら、ごめん、と

呟く。

黒水晶を抜いた瞬間、振り返ったアルコールが左腕で僕の頭を殴った。

「あ、ああ……どう、して」

驚きと、悲しみ。その時、初めて少女人形は本来のアルコールに戻ったようだ。

「ごめん、アルコール」

「こちらこそ……申し訳、ありません、御主人、様……」

僕は御主人様ではない、と言おうとしたが、意志の事切れたアルコールの身体を抱き止める場面に言葉は不必要だった。僕は失ってばかりだ、と僕はヨナに微笑みかける。彼は首をさすりながら大きく呼吸を繰り返していた。

よかった。大丈夫なようだ。

「れ、礼を言うだけでも思っているのか？」

「別に。僕は約束を果たしただけだ」

「約束？ そんなものために俺を助けたのか？ 俺は君を裏切ったんだぞ！」

「だからって、君を見殺しにすることはできない」

僕は今でもヨナを親友だと思っている。そう伝えたと、彼は疑いと信頼に揺れて後退していた。アルコールの黒水晶を抜いたときに心を埋め尽くした過去の出来事が、パズルになり剥落して、今度は彼の心臓を握る透明な手へと変じていた。暗いと心が歪みがちになるけれども、晴れた空の下に出れば、きっと上手くいくはずだ。

理想的すぎる。ヨナは鼻で笑った。そうとも思わない。僕は答えた。背負い袋の中に手を伸ばし、トルムが完全に砕けているのを確かめる。ヨナは袖の中から刃物を取り出して、助けてもらわなくても自分の命は自分で守ることができたと言った。僕は首を横に振ると、肺魚の石の中から包み紙を取り出して、独立独歩を気取るのは相手との力の差を考えてからにするべきだと言いつつ。

包み紙の中に入っていたのは、サラゴサの蚤の市で買った拳銃。

「それは！」

「もう使うこともないだろうと思って、石膏で塗り固めていたんだ。誰が見ても化石だと思うように、借りてきた凶鑑を元に肺魚に似せた。大投棄時代でも、使ったことはなかった。こんなもの、買ってどうすると思っていたよ。それが、まさか友情に句読点を付けるために持つことになるとは……」

「ピリオドって言いたいのか？ エルビン、お前は史家じゃなくて作家を目指すべきだったな」

「ヨナ……ナイフを捨ててくれ」

僕は撃鉄を降ろした。

撃てばどこに弾丸が行くか分からない、と僕は正直に話した。放っておけば夜海にまで飛んでいきそうな、ピストル界のアルコールだ。それはつまり、例えば手や足に当てる自信がないと白状しているも同然だった。弾は床を跳ねるかもしれないし、眉間に命中するかもしれない。

偶然という武器は、時に最も威圧的になる。

「仕方ない」

ヨナはナイフを通路の外へと投げ捨てた。母親がサナトリウムで療養中なのに、俺がいなくな

ったら誰が面倒をみるんだ。運命を呪う奴隷の言葉を呟くヨナは、顰め面から母親想いの好青年に相応しい表情になった。敵役は二度殺すチャンスが与えられたが、二度ともミスを犯した。彼は自嘲的になっていただけでも、いつもの口調に戻っていた。

ヨナは僕に安心するように言った。一度や二度の失敗で解雇されるほど、白亜堂公司是成果主義でも信賞必罰でもない。それに起源種博物館という宝の山はまだ失われていないのだから、いつでもリベンジが可能だと笑う。君たち白亜堂公司はその傍若無人さで世界を築いていくんだろ  
うね、僕は降ろした右手の拳銃に視線を落とした。

それから、左手の黒水晶に視線を移す。

「ヨナ……博物館の正体を知りたいと思わないか？」

「ああ、それを知れば白亜堂公司での地位は保証されるだろうな」

「アルコールは、あそこにある四柱が『人の基礎詩』だと言った。では基礎詩とは何なのか。公司是遺伝子情報と考え、僕もそういうものだと思っていた。でも、実際には違うんだ。起源種博物館は、命が産まれる過程よりも、命が尽きる過程にこそ詳しい」

「墓と墓銘碑……」

ヨナの言葉に頷くと、僕は少女人形のほうへと歩いた。起源種博物館の役割について、あと一歩のところで妨害が入ってしまったが、本来通り彼女の口から聞くのが筋だろう。制止しようとしたヨナに大丈夫だと言って、僕はアルコールの背中に黒水晶を戻した。

眼を醒まして、僕に話を聴かせてほしい。喪服の少女人形は呼び掛けに瞼を反応させて、瞳孔が開いたままの両目の焦点を合わせていく。上半身を起き上がらせたアルコールに微笑みかけ、僕が誰だか分かるかと質問した。

エルビン、どうして。

まだ、何も終わっていないじゃないか。

瞳の動きだけで、僕とアルコールはお互いの考えを知った。四柱の回転碑文板に『人の基礎詩』の韻歌を刻んだ館主は、首を吊る前に温めていた計画を、僕に披露するため機械の座へと導いた。理由もなく来たわけではない。一から百までの理由が一本の糸で通されるような答え、それは僕にとって「起源種博物館とは何か」という問いへの答えだった。

アルコールが袖に口を当てて微笑む。

「もうそろそろ、教えてくれてもいいと思うが」

「御主人様はどこまで聡明なのでしょう。敵を味方にし、味方を敵にする術を心得ている。万智を備えた館主様が、価値のない化石の欠片一つを大切にしていた理由も解ります。でも、心得ていないのは女の扱っただけかしら」

「アルコール……」

「戯れですわ」

少女人形は韻の歌を呟きながらステージの石櫃に歩み寄った。小さな足から四方に投影された漆黒が、回転碑文板まで届いている。そして「a」とも「i」とも「n」ともつかない発音を咽から出すと、石櫃に腰掛ける。声は韻の鍵になって回転碑文板の基礎詩を光り輝かせた。

薬効が染む白と、微毒を含んだ青。

夜の葬列を睥睨する女司祭、そういう言葉がイメージに連なるほど、石櫃のアルコールは乱神の



威に充ちていた。屍の記録を集めるのは、命が孕むだけでは望むべき世を選択できないから。アルコルはそう言った。起源種博物館の自動制御システムは、海を支配した多国籍複合企業体が、未来予測のため組んだ位相幾何学機構だった。気候変動や社会経済を高い確率で的中させた機械は、やがて人の輝かしい未来そのものを創ることが期待された。そのために、まだ『人の基礎詩』という名を持たなかったそれは、単純な要求をした。

「人の全てを知りたい」

起源種博物館が起源種博物館になったのは、こうした理由があったからだ。西暦が終わり大投棄時代が始まると、理由と目的を知る者はいなくなり、それでもなお知識を集め続けた。

現在政府の一員として、身体を多くを捨てた女が塩の丘に赴任してくるまで。彼女は機械の座にあるものを知り、『人の基礎詩』と名付けた。博物館の地下深くで、西暦の科学技術の残滓を手足とし、墓銘碑の文言を記憶し続ける。四柱四十二段の回転碑文板は智王の求めを遂行しようとしていた。

答えを。あらゆるものの答えを、と。

「後は廻すだけですわ。右へ廻せば滅び、左へ廻せば始まりへ。零か一かを選択するだけでいいのです」

「で、どうなるんだ？」

「皆死にます」

こともなげに、アルコルは囁いた。

できると思うのか、そのようなことが。大投棄時代にも核兵器が使用されたが、それでもしぶとく人類は生きてきた。白亜堂公司是文化文明を守るし、訳の分からない巨人にも負けるはずがない。ヨナは笑ってみせたが、僕はとても笑う気にはなれない。少女人形は無知な者を愚弄したいのか、また謎掛けを楽しもうと考えたようだ。

質問一、大投機時代に文明のほとんどが破壊されたのに、なぜジュークボックスが動くのか？

質問二、なぜラジオが放送され、白亜堂公司与通信が可能なのか？

質問三、そもそも電力はどこから供給されているのか？

文明を破壊し尽くした大投棄時代は収束しようとしていたが、復興が思うより上手く進んだのは電力が供給されていたからだ。世界は広く、石器時代以前の状態に戻った土地もあれば、白亜堂会社の拠点域のように新都市を形成し社会経済を立て直そうとしている土地もある。発電所の多くは投棄されたが、新秩序の動力として今なお稼働しているものが少数ながら存在していた。

夜海の沿岸部も電力は供給されている。電球が光り、音楽を聴くことができるというのは当然のこととして享受していたけれども。僕とヨナは通路の外、巨大な穴の奥深くを見ようとした。四柱の回転碑文板はどこまでも下へ、地獄の底から立ち上がっていると想像してしまいそうだ。しかし、僕はもっと不吉な考えに身震いした。博物館を循環する水が、最終的に行き着くところを。

質問への回答、起源種博物館の最下層には原子炉がある。

「正解です。正解者には世界の命運をプレゼントしましょう」

「アルコール！ これは遊びじゃない」

僕は声を荒げた。

「当たり前でしょう。皆殺すのだから」

虚空を睨む瞳は命を否定していた。

アルコールは御主人様と一緒に死ぬことしか考えていません。石櫃の少女人形は暗い微笑みを浮かべながら囁いた。君に全てを託そうと思う、と館主の声色を真似する。人の基礎詩は完成したから、全ての人間は用意された墓穴に入れればいい。

そのための選択肢を二つ。

一つは回転碑文板を左に廻し、原子炉の炉心を溶融させる選択。溶融した原子炉は核分裂の暴走によって太陽のようになり、その熱量は地球の裏側まで達するという。そうなれば、どうなるか、人類は幸運なことに核熱が地球を貫通するような大事故を未だ経験していないが、投棄主義が完遂される可能性は非常に高かった。撒き散らされた放射能は「地球」の名を「冥王星」に変えてしまうかも、とアルコールは言う。

もう一つは回転碑文板を右に廻し、起源種博物館以外の全てを破壊する選択だ。西暦の超大国が構築した軍事防衛網を利用し、核兵器のドミノ現象を起こす。起源種博物館に収蔵されたミサイルと、位相幾何学機構の予測によって、旧ソ連のミサイル基地を攻撃、世界規模の花火大会の始まりを博物館の核シェルターで楽しむというのが、右回転の未来だった。

「それじゃあ、核ミサイルもあるというのは」

「嘘とでも思っていたのですか？」

アルコールの言葉に咽を詰まらせる。

「投棄主義者たちは馬鹿だから、効率というものを知らないようですね。もっと知恵を絞れば、館主様やエルビンが思い悩むこともなかったのに。でも、こうなることは運命だったかもしれません。世界と共に滅ぶのも、世界を最初からやりなおすのも、まどろみに安住する者には任せられませんから」

「……どちらにしても、終わりのような気がするが」

「男と女がいて、間違えない未来があれば問題ないです」

アルコールは恍惚に頬を赤らめ、スカートを捲った。

「それが、お前の女だということか？」

「はい。繰り返しますわ。何度でも」

少女人形の下腹部に埋め込まれているのは、膜と血管に包まれた館主の子宮。何を言いたいのか、何を欲望しているのか、それは正常な判断ができない人形の腐った未来予想図だ。溜息を吐いた僕に、ヨナが小声で言った。今ならまだ間に合う、壊してしまおう、と。

「ああ、選択肢はもう一つありました。何もせず、巨人が博物館に辿り着くのを待つという選択。導かれる結果は、回転碑文板を右に廻したときと同じですけれども、伝説が逆さに実現して、丘が海に帰るというのも……」

「会社の飛行船が巨人など寄せ付けない」

自信に満ちたヨナの言葉を、首を横に振って否定する。

「会社の飛行船はもうありません」

頭上の暗黒を見上げてアルコルは微笑んだ。その発音が、四柱の回転碑文板が構える玄室に、小さな灰を降らせる。ヨナの額に汗が浮かんでいた。天に翳した右手の先に、舞い降りていく薄汚れた布があった。白の布地に黒の模様、布は焦げていたが、アルコルを優しく包み込む。

黒の模様は鬼神の顔。

「そ、そんな……」

空と地上での白亜堂公司の目論見が崩れ、絶句したヨナは抛るべき大樹を失った男のようだった。それが飛行船饕餮号の外骨格を覆う布地であるのは、誰の目から見ても明らかだからだ。最初から公司には期待していなかったけれども、その姿には同情を禁じ得ない。饕餮号の布地を羽織ったアルコルは、蠅螂を踏む人の顔をして、国で兵馬俑でも掘っていけば屈辱にまみれたまま死ぬこともなかったのに、と嘲笑した。

邪悪が形と場所を得ればどうなるか、そのようなものを僕らは目の当たりにしている。外の巨人と、内の少女人形によって。親友を侮辱されることは我慢できないが、僕には感情を実行に移し、達成させるだけのものが何もない。無力さを嘲笑されているのは僕でもあるのだ。

館主は望んでいたのだろうか。

塩の丘と集落が巨人に蹂躪され、死と滅びの選択を迫られる。館主がアルコルの言うように人の基礎詩を作り、僕が今そこに立っていても、この愚かな計画を信じられない自分がいた。世の中は裏切りと悪意で出来上がっている、とヨナは言うが、僕は否定する。

「僕は誰も裏切らないし、誰にも悪意を持たない」

「エルビン」

「僕はヨナを守る。約束だからじゃないよ。嫌いなものばかりの世界だけれど、守るに値するから守るんだ。集落も、博物館も、アルコルだって守る」

博物館が災禍をもたらす箱で、館主やアルコルがそれを開ける女だとしても。僕は石櫃の少女人形と対峙した。

「さあ、御主人様、選択を」

手がないと知っているようだ。アルコルのくせに。僕がお前の望むように動くと思っているのか。そう問い掛けたが、澱んだ眼差しが返される。石櫃の上に寝そべると、音を伝えるように話した。

「歧路に立たされれば、鼠でも行き先を決めるものでしょう。迷路の中を右に、左に、罪の意識が耐えられないのなら選択しなくても構いません。簡単ですわ。息のようなもの。アルコルは御主人様と一緒に生きたい。アルコルは御主人様と一緒に死にたい。アルコルは、御主人様のために歌い続けたいのです」

僕はアルコルを激しく睨んだ。

命が持つ不確かさを韻の形とし、基礎詩は種の情報を蓄積し、歌を形成する。韻が歌になれば命がどのように生まれ、どのように尽きるかを読み響かせ、未来をも物語るのか。碑文回廊の基礎詩は進化から淘汰までの道程を辿る雛形としてあり、だから絶滅した生物ばかりが記されていた。その目的、人の基礎詩による完全な未来創世のために。

史家が心を砕き夢見たことを、機械が成就する。

気に食わない。

「アルコール」

僕は言った。どういう選択をするか、人の基礎詩に訊けばいい、と。

「それでは意味がありません。私は、エルビンの言葉で選択を知りたいから」

少女人形はあくまで僕に選択を強いる構えだ。

そして、僕の選択を嬉々として受け入れるだろう。しかし、受け入れることのできない選択を僕がしたら？ 鼠の比喻を少女人形が使うのなら、僕も東洋の諺をもって答えよう。窮鼠猫を囓む。非力な鼠でも追い詰められたら反撃にできるものだ。

「僕の心は決まった」

人形には、決して思考が及ばない閃き。

皆を守る唯一の方法を、僕は思いついた。

「エルビン」

「ごめん、ヨナ。こんな馬鹿な解決策しかなくて」

「いいさ、それで。きっと正解だ」

ヨナが紙巻き煙草に火を点けた。僕もパロ・トロームの水煙草を蒸かしたかったけれども、どうやら不可能なことになりそうだ。蝙蝠印の紫煙は僕には強すぎるので、大きく息を吸い込んだほうが楽になる。ヨナとの会話の中でも、一番どうでもいい事柄を思い出してしまい苦笑した。

どうせなら、化石漁でも回顧すべきだった。

夜海の星々が輝くアンモナイト礁と、駕籠網を手繰り寄せるときの手の冷たさを。でも、そういう機微によって僕らは生を謳歌しているのだろう。

選択を、とアルコールが強いる。

僕は前にと一歩踏み出した。

「巨人と」

少女人形は何を言っているのか理解できなかったようだ。僕はもう一度言った。

「僕は巨人と戦う」

その言葉を残して、僕は鳥籠式昇降機に乗ろうとした。操作盤に手を置き、智王の座の最上階を選ぶ。事態の把握が一步遅れたことが、僕と少女人形の明暗を反転させた。跳躍し手を伸ばしたアルコールをヨナが全身で押し倒したのだ。横転し掴み合う二人の目の前で昇降機の鉄柵が閉まり、滑車が回りだす。

アルコールの細腕がヨナの身体を起重機のように捻ろうとした。

「何をしているんだ、君も一緒に！」

「さっさと行け！」

昇降機を止めようとした僕に、血を吐きながらヨナが怒鳴る。

「白亜堂公司の人間は道義も筋も無視するが、これは約束だ！ エルビン、ここは俺に任せて上に行くんだ！」

「ヨナ！」

「畜生……昔の偉い人は言った。『人は例え全世界を得ても、本当の魂を損じれば、何を手にし

たといえるのか』と。忌々しいが俺も、今そういう気分なんだ。そういう気分を邪魔しないでくれ」

上昇が始まる。

ヨナは渾身の力でアルコルを押し留めている。だが、それは命と引き換えの行為だ。鳥籠式昇降機から、僕はヨナの名を叫び続けた。彼の明るい笑い声が耳に届いたけれども、姿は涙で見ることができなかった。

ヨナ、ごめん。

何度謝ったところで、僕は許されないだろうが。

巨人と戦うために智王の座へと昇る。回転碑文板を右にも左にも廻さず、僕が好きなものも嫌いなものも守るために、選ぶべき最上の道。それは巨人を打ち倒すことだった。巨人を倒せば、人の基礎詩の発動を促すそもそもの余裕のなさが打破できる。

と、思わせるところにあった。

本当の目的は、死ぬことだ。

「ごめん、ヨナ」

死ぬために、ヨナの命を犠牲にし、僕を乗せた鳥籠式昇降機は上昇していった。

大型動物の骨格化石が四肢を強ばらせている姿が、上から下へ、叫びのように通過していく。速く、速く、速く、僕は文字盤を見詰めながら焦りで呟いた。機械の座から智王の座へと繋がる道は、今いる昇降機だけではないはずだし、巨人がどれだけ接近しているかも気になった。

真鍮の掲示板はセフィロト理論の諸階層を示している。王国から遡り、基盤、栄光、勝利、美、力、慈悲、理解、知恵、王冠へと続く樹としてセフィロト理論は表された。僕は真鍮の掲示板の「勝利」の文字に見入った。勝算はあるのか、そのようなことを考えては打ち消し、賽はもう投げられたのだから覚悟を決めるべきだと結論する。

躊躇なく望みを託したヨナのためにも。

「ヒロイックじゃないか」

僕は自分が置かれた立場を鼻で笑った。

託されたり、強いられたり。それは自業自得だ、と僕の中の史家が呟いた。あのときにああしていれば、それは史家の禁句だったが、胸が苦しくなる。何か解決されるわけでもないが、大声を出した。二足歩行の肉食恐竜の化石と通過する一瞬だけ視線が合わさる。あのトカゲもままならないことがあって叫んでいたのだろうか？

鳥籠式昇降機が檜の木の中庭に到着した。

「あなたのおかげで、大変なことになっていますよ」

木陰に横たわる館主の死体に話しかける。

安らかな表情が、夕刻の斜陽に合っているのか、見ていると心が締めつけられる。引き金を引いて、自らは絶対的な領域で僕らの狼狽振りを楽しんでいるだろうか。眠っているのなら肩を揺すってでも目覚めさせたいが、彼女はもう死んでいた。

「そちらに行ったら、恨み言を聞いてもらいますよ」

ボタンの賭け違いが広がった結果だと思いたいが、もう確かめる術はない。僕は館主と暫しの別れを告げると、壁に取り付けられた梯子を伝って屋上に出た。

考えられないような熱風が首筋を嘗め、それが炎上している饕餮号からの息吹であると気付く。焦げ臭さは人が焼けているからなのか、僕はその光景に息を呑んだ。墜落した大型飛行船から放たれた鋼鉄のワイヤーが、壺型甲冑の巨人を縦横に縛り付けていたが、それよりも巨人に蹂躪された塩の丘の惨状に心を痛めた。

オイルサーディンの缶詰工場、枯れた噴水の広場、破砕タイルの家々が巨人に踏み潰されている。パロ・トロームの主人や屋台式カフェが心配だが、確かめることはできなかった。政府軍の攻撃や見物客の混乱ぶりなどで、集落の他のところにも累が及んでいなければいいが。青銅色の壺型甲冑を睨んだ。大丈夫だとは思いたいけれど。

一方、起源種博物館の惨状もかなりなものだった。白亜堂会社の作戦は、饕餮号で巨人を吊り上げることだったようだ。しかし作戦は、巨人の重量と、おそらくは抵抗によって失敗した。大型飛行船は博物館の真上に墜落して、歌花の座の碑文回廊あたりが外骨格の下敷きになっている。巨人は、もう目の前だ。

「海で見たときよりも大きい。近いからなのか」

エルビンは墓銘碑に生年月日しか記されない男。それが僕は何をしているのだろう。

受け入れるしかない。

拳銃をサラゴサの蚤の市で買って良かった。石膏で塗り固めて肺魚の化石に見せかけ、博物館に持ってきたことも。誰かを傷つけるのではなく、巨人の注意を惹くために使う。そのことを感謝したい。誰に、ヨナは化石漁の成果を神に感謝したけれど、それが一番しっくりくるかもしれない。

感謝するなら自分の先見の明に。

それはそうだが、最後の審判を前にして、史家くずれの人間が神に感謝とは面白い。

面白いから、僕は巨人のほうへ歩きながら神に感謝した。

「神様、ありがとう」

熱風が、肺を詰まらせる。

巨人は天を衝くほどの高さ、質感も迫力も相当なものだった。視線を下にすると、蟻のような群衆が阿鼻叫喚の様相を呈していて、まるで地獄。子供の残酷な遊びを見るようだ。投棄主義者が巨人に踏まれるため、塩の丘に押し寄せているとヨナから聞いていたが。

啞然として憤慨する。お前たち巨人と投棄主義者は性根の底で同じだ。塩の丘と世界を血で汚すだけ汚そうとして、責任を取らないところなどそっくりだった。

まどろみの風を巨人が邪魔しているから、刺々しい感情ばかりが表に出てしまう。

ロープを使い、物見塔のテラスに攀じ登った。巨人の鼻息が感じられるくらい近付くためだ。青銅色の壺型甲冑で巨人の表情は伺えないが、目立つ場所に行く必要はある。物見塔は墜落した饕餮号を左に、巨人を正面に見ることのできる位置にあった。ロープを握る手にも自然と力が入り、ダビデも戦うことを躊躇うほど巨大な影に、好戦的な微笑を浮かべてしまう。

物見塔の内部は、おそらく立方ラタだ。この世紀の一戦が、テレビに映されているかもしれないという思いが頭を過ぎった。

塩の丘は、もう巨人のものではない。

噴き上がる火炎と黒煙が僕の視野を奪い、巨人の壺型甲冑が迫る。地震のような揺れが物見塔を襲い、もう少しで足を踏み外しそうになった。手を伸ばし、柱にしがみつく。

苦しい状況だが、守るために力を振り絞る。犬死にだけは絶対に避けたかった。

しかし、僕は考える。守る、というのも理不尽だ。破壊もそうだが、守るために、守りたくないものまで守らなければならない。投棄主義者を憎み、白亜堂公司を嫌い、現在政府とも関わりあいたくない。僕は自分自身についても否定的だが、守ると決めた心をテコでも動かさないのは大きな矛盾だった。

世は理不尽で、矛盾だらけ。

その究極と戦う。相手にとって不足はなかった。

テラスに手を掛けて、身を翻す。距離はほとんどない。視界の全てが標的。

「決闘だ！」

僕は拳銃を構えると、巨人を撃った。

弾丸は青銅の甲冑を虚しく掠めただけだ。サラゴサの蚤の市で買っただけあって、真っ直ぐに飛ばうとしてくれない。二発目は巨人の頭の辺りに命中したが、身動きも身震いもしなかった。当たり前だろう、水際作戦での政府軍の砲撃でも動かせなかったのだから。比較すれば僕は蚊か蠅以下、それでもいいから僕は撃ち続けた。

「やめて！」

その時、悲痛な叫び声が足元が耳に届いた。

血に濡れた手、呪われた瞳、ヨナに撃たれたときに全ての答えが示されていたのだ。屋上の、僕が切り離れたロープのところにアルコールが立っている。

「アルコール」

僕は怒鳴った。

「今度は僕がお前に選択を強いる番だ！」

「やめてください！」

「愛があるなら僕の話の聞くんだ」

巨人を夜海に帰すか、このまま僕が巨人に押し潰されるのを傍観するか。巨人を夜海に帰せば、アルコールは塩の丘で僕と一緒に時間を過ごすことができる。白羊歯の集合住宅での生活や、パロ・トロームなどが軒を連ねる波止場を散歩。化石漁にも連れて行こう。逆に、僕が巨人に殺されるのを選べば、アルコールは一人だ。

それが耐えられるのか？

僕は問い掛けた。

エルビンがいない世界に存在することを、一秒でも耐えることができるのか？

日の光を遮る巨人が、その影を大きく歪めた。僕にとっての最後の一步を、今まさに踏み出そうとしている。このまま行けば衝突は免れそうもない。でも、後には引くつもりは毛頭もなかった。

「今すぐ、今すぐ降りてください！」

僕は首を横に振った。

「降りるつもりはない。お前の選択が全てだ」

「非道です！」

「ああ、たぶん。僕はお前も、ここから見える全ても好きだから、こうせざるを得ないんだ」

「そんな、そんな……そんな！」

アルコールの叫びが、大気をも震わせた。

僕はかつて「Quo Vadis Domine」と問い掛けられ、「星降る海へ」と答えた。今でも、そう繰り返すだろう。正しくはないけれども、美しい答えに世界の音が停止した。投棄主義者たちは昏睡状態から目覚めたように頭上を仰いでいる。白亜堂公司の大型飛行船から立ち上る煙は、塩の丘では見られない雨雲のようだった。黄昏が塩の丘と夜海を小麦畑のように輝かせている。僕はアルコールを見た。

頬を伝う煌きを。

時間よ止まれ、今この一瞬のため。

かつて、知覚の全てを失った少女が「water」の意味を知り、朝靄の世界で輝く理性を得た奇跡を、僕は目の当たりにしているのだろうか。櫛の木陰で眠る館主は、身体以上に己を見失っていた。世界の敵になる力はあるにしても、一言を声にする勇気を持てなかったのだ。彼女は死ぬことで自分の限界に見切りをつけた。それは誤っている。生きていれば、どのような障害も越えることができたはずなのに。

そう、僕らは自分の気持ちに素直になるだけでよかった。

このように。

「愛しているよ」

少女人形の、館主の目から涙が零れ落ちた。

癒しの雨をありがとう。僕は満面の笑みを浮かべた。巨人の体躯が轟音を立てて物見塔を押し潰す、その間際まで、僕はアルコールに愛だけを叫び続けた。

叫びが途切れたとき、一輪の花が咲き、声を響かせた。

塩の丘の、誰もがそれを聴いたという。

静寂に染み通るのは、ささやかな歌。因果を定める韻と歌。やがて韻歌に包まれた塩の丘に夜が来た。夜は朝になり、昼は夕になる。夏は秋に移り変わり、寒くない冬が西風の恵みによってもたらされた。時間が全てを水に流そうとしているかのように、夜海は月日を受け入れていく。

そして、春が訪れた。



季節は春だが、まだ夜海は冷たくて、櫂を漕ぐ手が凍えてしまう。月光が小波の水面に透き通り、乱反射して、小舟で沖に出たときに最も美しいと感じる光景だった。夜の海はとても硬質な印象があって、これは流動的な金属が揺れているのだと思考したくなる自分がいた。確かめるために、指先で海水の冷たさを感じる。

夜明けまでは時間があり、天体が従える闇は色濃い。季節は春だが、毛布を羽織っていなければ冷気で始終震えていなければならないだろう。化石漁の醍醐味は、人知れず行う背徳感と、幻想的な水の夜景にあるようだ。日中との温度差が激しい季節になると、海底から珍しい化石が浮かびやすくなる。アンモナイト礁に仕掛けた駕籠網に珍しい魚が入っているかも、と僕は言った

。

「エルビンがそう言うなら」

と、潮風に目を細めてヨナが微笑む。

もう何度も彼と化石漁をしているから、お互い何も言葉を交わさなくても舟を進めることができる。ヨナは舟から塩の丘を眺めていた。塩の丘に巨人が帰ってくるという出来事から、もう一年近くが経とうとしていたが、集落や博物館の復興はあまり進んでいなかった。海から丘まで巨人が歩いた足跡は舗装されることなく放置して、時々訪れる観光客がコインを投げ入れる池になっていた。

長閑な気質だから、二年後辺りに本格化するかもしれない、と僕らは予想しているのだが、それすら食料品店での賭けの対象になりそうだった。ジュークボックスを動かして、流れる曲をヨナは歌う。迷信深い人々は、海に棲む乙女を誘ってしまうから、なるべく声も出さないほうがいいと言うが、史家と白亜堂公司の人間という組み合わせの前では、どのようなジンクスも効果が薄いみたいだ。

「そういえば、以前、離宮魚を獲ったときがあったよね」

「白パンを買いに行ったときだ」

「あの時、海と月に感謝を捧げたのは、本心からじゃなかったら？」

「もう忘れたけれど」

「本当は、何に感謝したんだ？」

「さあ、俺が感謝するのは公司からの給与明細だけだ」

月と海に感謝を捧げるヨナを見て、感謝なら僕に捧げるべきだと思っていたけれども、彼の本当はもっと即物的なようだ。あの出来事後、ヨナには白亜堂公司から正式に広域支配人の内示が下された。任務を果たしたわけでもなく、手配した飛行船を墜落させてしまうという失点も犯したが、「館主のいない今、博物館を最も詳しく知る男」と振舞うことで上層部からの信頼を得たらしい。その時に彼の笑顔がどれだけの働きをしたのか、僕は知っているけれども言及するのは控えておこう。

アンモナイト礁に到着して、僕らは海中に仕掛けた駕籠網を引き寄せていった。海に直接手を入れる作業が漁の中でも最も痛く、辛いけれども、楽しみでもある。化石魚は潮の流れによって泳ぎ、遠くは大西洋に生息していた種や、深海の不思議な種が網にかかることもある。離宮魚の

化石ように稀少種がかかる可能性は低いけれども、海が作る石の彫刻はどれも美しい輝きを宿していた。

でも、引き上げた駕籠網の中身を見ていくと、どうも化石よりも普通の魚のほうが多く入っているようだ。化石魚よりもイワシのほうが多いことに気づいて、ヨナは舌打ちしたけれども、僕はそれほどでもなかった。

「本来の意味で大漁だな」

「いいじゃないか。パロ・トロームに持っていけば、ただで魚料理を作ってもらえるし、最近、昔の缶詰の製法を掴みつつあるっていうから、感謝されると思うよ」

「俺は金になるほうがいいね。でも、オイルサーディンは食べてみたいな」

「だろ？」

「じゃあ、酒はエルビンのおごりだ」

ジンなら酒樽でも飲ませてやるよ、僕は微笑んだ。

結局、化石漁の成果はイワシが十匹と平魚の化石が一匹だけだった。今日の夜海は見た目以上に機嫌が悪く、それはたぶん舟で金銭の話をしたからだだろう。ヨナの心は信仰と現実主義の天使が殴り合いの喧嘩をしているみたいだ。結果が良ければ俺の手柄、結果が悪ければ妖精の悪戯。そうでも考えていないと白亜堂会社の仕事などしてられない、と彼は真面目な顔で講釈した。

収穫は乏しかったけれども、現金収入になる平魚の化石はヨナに、イワシは僕が貰うことになった。夜明け近くになり、舟を茂みに隠す。夜海製のオイルサーディンは、塩の丘の岩塩とオリーブで作られるが、製法も工場も失われてしまった。白亜堂会社は料理関係の復元には熱心ではないのかとヨナに尋ねる。

「男の職場だから、そっち方面も手薄でね。でも、今度史料を探してみるよ」

「あ、それと菜園公社製のバジル瓶を買ってきてほしい。これから都市に行く機会も増えるんだろ？」

「はいはい。お安い御用ですよって、広域支配人は使用人じゃないんだぜ」

「見飽きたよ。そのカフスポタン。親友だろ、ヨナ」

「そうだなエルビン」

僕らは男同士の会釈を交わすと、別々の道へと歩いていった。起源種博物館から昇る朝日に、僕は目を細めると、午前六時くらいの空気を吸うことが一番健康にいいのでは、という気持ちになった。でも、パロ・トロームの水煙草は魅力的すぎる。イワシを手土産にして、一日夜海を見ながら入り浸ることはできないだろうか。邪険に扱われるかもしれないが、思考を煙で燻したいという衝動に駆られた。

白羊歯の集合住宅に帰り着く。階段を上がりながら、僕は幸せだと考えた。架空の海を漂いながら、部屋の海底で息を殺すエルビンはもういない。今、自分の心臓を動かしているのは、墓銘碑に数多くの事柄を記さなければならないエルビンだ。

「ただいま」

ドアを開けた。

「おかえりなさい、エルビン」

窓際の椅子に腰掛けていた少女が僕を抱擁する。イワシを入れた駕籠網が床に落ちて、後片付けが大変だと思ったけれど、僕らは笑みを交わすことで夢中だった。

それでアルコール、何をするつもりなんだ？

……甘い接吻。

(了)

## 化石漁

<http://p.booklog.jp/book/24514>

著者：浅井健一

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/asai1920/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/24514>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/24514>